# SGRA REPORT

SGRAレポート No. 116

NO. 116

ISSN 1346-0382

第78回SGRAフォーラム・第５回アジア文化対話・
第611回沖縄大学土曜教養講座

# アジアにおける ジェンダーと暴力の関係性

SGRA
Sekiguchi Global Research Association
ATSUMI INTERNATIONAL FOUNDATION

## 第78回SGRAフォーラム・第5回アジア文化対話・第611回沖縄大学土曜教養講座

# アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性

### ■ 開催趣旨

沖縄はアジア太平洋戦争時に住民の4人に1人が死亡したとされる激しい地上戦を経験している。さらに戦後も日本国内の70%を超える米軍の施設が集中する「基地の島」と化した。女性や子どもを含む非戦闘員が犠牲となった「戦場」の暴力は、現在進行形のグローバルな課題を再考察する上で欠かすことができない題材である。軍事的な対立の際に、私たちはどのように非戦闘員の命を守るための観点を保ちうるだろうか。ジェンダーからの問いが必要な理由がそこにある。

沖縄で開催されるAsian Cultural Dialogues（ACD；アジア文化対話）フォーラムでは、地上戦を経験し、今なお米軍基地に起因する性暴力事件が絶えない沖縄で、ジェンダーという弱者への配慮を前提とする視点から「過去・現在・未来」につなげる普遍的価値を探る。

強調したいのは、ACDは開催地の「学び、感じ、行動する」アクティブな議論の場でありながらも、その地域では見逃している国境を越えた視点や、洞察を開催地に提供する場でもある点である。「アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性」は、軍事的な面に限らない。日常における構造的な暴力を紐解いてこそ、より普遍的な議論になりうる。

沖縄と同じく米軍とフィリピンゲリラとの間で激しい地上戦が行われたミンダナオ地域に注目しながらも、その中でより目に見えない「ジェンダー」の問題に焦点を当てたり、ACDが持つ多国籍ネットワークを用いた活動家や文化人の観点も提示する。

本フォーラムはいわゆる「沖縄の問題」を論じるものではない。多国籍の専門家により構成され、その議論の焦点は沖縄という空間で出会う「アジア的視点」と言える。2025年度は戦後80年という節目の年であり、いかにアジア太平洋戦争時の傷痕に向き合うかをアジア各地で議論する年でもある。議論の場である沖縄はもちろん、アジアの過去、現在、未来に一貫して忘れてはならない本質的な価値とは何かを国際的かつ学際的に、さらにはアカデミアを超えて皆で考える機会になることを望んでいる。

## SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

## SGRAかわらばん

SGRAフォーラム等のお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料でご購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。
http://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

プログラム

## 第78回SGRAフォーラム・第5回アジア文化対話・第611回沖縄大学土曜教養講座

# アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性

| | |
|---|---|
| 日　時 | 2025年9月13日（土）9：30〜17：30 |
| 会　場 | 沖縄大学3号館301教室およびオンライン |
| 言　語 | 日本語・英語（同時通訳） |
| 共同主催 | 渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）、沖縄大学地域研究所 |
| 助　成 | 高橋産業経済研究財団 |


**【開会挨拶】**

今西淳子（SGRA）　6

山代 寛（沖縄大学学長）　8

**【フォーラムの紹介】**

洪 玧伸（沖縄大学）　10

**第1セッション　基調講演**

［司会：デール・ソンヤ（SGRA）］

**【基調講演】　暴力に抗する「他者」の眼差し**　12

冨山一郎（同志社大学）

［コメント1-1］　宮城晴美（沖縄女性史研究家）　23

［コメント1-2］　ロバート・リケット（和光大学元教授）　25

［コメント1-3］　グオ・リフ（筑波大学）　27

**質疑応答**　30

モデレーター：洪 玧伸（沖縄大学）

回答：冨山一郎（同志社大学）




© 2026 SGRA

## 第2セッション　交差性
［司会：イドジーエヴァ・ジアーナ（東京外国語大学）］

【発表2-1】 **交差する差別とジェンダー** 33
高里鈴代（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）

【発表2-2】 **継承と掘り起こし：インドネシアにおけるジェンダー化された暴力** 40
インタン・パラマディタ（マッコーリー大学）

［コメント2-1］ ミヤ・ドゥイ・ロスティカ（大東文化大学） 50
［コメント2-2］ 梁 絃娥（ソウル大学名誉教授） 52

**質疑応答** 53
司会：イドジーエヴァ・ジアーナ（東京外国語大学）
オンラインQ＆A担当：グオ・リフ（筑波大学）
発言者（発言順）：
インタン・パラマディタ（マッコーリー大学）
高里鈴代（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）
洪 玧伸（沖縄大学）

## 第3セッション　戦争とジェンダー
［司会：ミキ・デザキ（ドキュメンタリー監督）］

【発表3-1】 **沖縄戦・米軍統治下の福祉と女性** 58
山城紀子（沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト）

【発表3-2】 **ジェンダーの最前線：世界最後の休戦における平和への最終段階** 65
ホセ・ジョエル・カヌディー（アテネオ大学）

［コメント3-1］ 福永玄弥（東京大学） 74
［コメント3-2］ 増渕あさ子（立命館大学） 77

**質疑応答** 80
司会：ミキ・デザキ（ドキュメンタリー監督）
オンラインQ＆A：ミヤ・ドゥイ・ロスティカ（大東文化大学）
発言者（発言順）：
山城紀子（沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト）
ホセ・ジョエル・カヌディー（アテネオ大学）

## 第4セッション　これからに向かって
［司会：洪 玧伸（沖縄大学）、デール・ソンヤ（SGRA）］

【発表4-1】 **沖縄の基地暴力とジェンダー：CSW国連女性の地位委員会に性暴力を訴える —沖縄県内の動きを中心に—** 85
松田 明（沖縄キリスト教学院大学卒業生）、徳田 彩（沖縄キリスト教学院大学）






© 2026 SGRA

【発表4-2】 **タイにおける若者フェミニスト運動の旅路** 88
ニチャカーン・ラクウォンリット／ミミー（タイの学生活動家）

【発表4-3】 **沖縄戦の記憶を聴く：体験者との交流を通して** 95
中塚静樹（沖縄大学）

［コメント4-1］ 親川裕子（沖縄大学、Be the Change Okinawa代表） 101
［コメント4-2］ 上野さやか（沖縄大学、エンパワメント・ラボ・おきなわ共同代表） 104
［コメント4-3］ ボニー・ランバタン（Rainbow Panda代表） 106

【自由討論】 司会：洪 玧伸（沖縄大学）、デール・ソンヤ（SGRA） 109
発言者（発言順）：
高里鈴代（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）
山城紀子（沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト）
宮城晴美（沖縄女性史研究家）
徳田 彩（沖縄キリスト教学院大学）
ニチャカーン・ラクウォンリット／ミミー（タイの学生活動家）
中塚静樹（沖縄大学）

《附録1》 **「『慰安婦』のための碑　17周年記念シンポジウム」**
（於 宮古島市公民館・未来創造センター）
**サバルタンの強烈な声：韓国における最近の社会変化と「日本軍性奴隷（JMSS）」問題への私の関わり** 115
梁 絃娥（ソウル大学名誉教授）

**あとがきにかえて**
洪 玧伸（沖縄大学） 121

**登壇者略歴** 127

《附録2》 **沖縄スタディツアー報告**
**普天間から辺野古・大浦湾へ** 132
イドジーエヴァ・ジアーナ（東京外国語大学）

《附録3》 **宮古島スタディツアー活動報告**
**戦後80年に咲く花** 134
グオ・リフ（筑波大学）

※所属・肩書は本フォーラム開催時のもの。



© 2026 SGRA

【開会挨拶】

今西淳子
渥美国際交流財団、関口グローバル研究会（SGRA）

おはようございます。本日のフォーラムを沖縄大学地域研究所と共同で主催する渥美国際交流財団関口グローバル研究会代表を務めます今西淳子と申します。

本日は会場参加、オンライン参加、合わせて150名を超える皆さまにお集りいただき、ありがとうございます。また、共催をお引き受けくださいました、沖縄大学山代学長、地域研究所の皆さん、お手伝いをしてくださっている学生さんに感謝申し上げます。

昨日、酷暑の東京から、猛暑日なしの涼しい沖縄へ参りました。沖縄には、半世紀以上前、子どもの時に親と一緒に来たことがあるはずですが、あまり記憶に残っていないので、今回が初めてと言ってもいいくらいです。本日、こうして私がここにいるのは、洪玧伸先生のおかげです。先生が沖縄大学に勤務されることになり、赴任が決まった時に「それでは沖縄でSGRAフォーラムを実施しましょう」と決め、それがこうして実現しました。

渥美財団は、博士号を取得するために、日本の大学院に在籍して研究を続ける、外国人留学生および日本人学生を支援する奨学財団です。昨年（2024年）設立30周年を祝いました。奨学支援が終わった後もずっと連絡をとりあい、素晴らしいネットワークになったので、財団設立５年目の2000年7月に、関口グローバル研究会を立ち上げました。「多様性の中の調和」と「良き地球市民の実現」をめざして国際的かつ学際的なシンポジウムやフォーラムを開催しています。渥美財団事務局のある東京都文京区の関口から、グローバルに発信していこうという名前です。

洪先生が早稲田大学で博士論文を仕上げていらした2008年度に渥美財団で支援させていただきました。渥美財団はネットワーク構築を目指して、奨学期間中は毎月交流会を開き、そのうちの４回は一対一でおしゃべりをしています。洪さんは、その頃、ほぼ博論は仕上がっていて、宮古島に慰安婦の碑を建てる活動を精力的に行っていらっしゃったので、個人面談の時には博論の話ではなく、宮古島と慰安婦の碑の話をたっぷり伺いました。ささやかながら募金活動にも協力させていただきましたが、その時にした「宮古島に行くからね」という約束を、こうして果たすことができることを嬉しく思います。洪さんが沖縄大学にいらしたのは数年前ですが、沖縄研究は既に20年以上続いているので、その間に築いた沖縄ネットワークのみなさんとの交流を楽しみしています。


© 2026 SGRA

本日のフォーラムのもうひとつ大事な要素は「アジア文化対話」です。SGRAの活動をさらに発展させて、2013年から２年に1回、「アジア未来会議」という300人規模の大きなシンポジウムをアジア各地で開催しています。アジア文化対話は、その会議の中で主催者側で企画実施するフォーラムのひとつで、今日のもうひとりの仕掛け人、2012年度の渥美奨学生のソンヤさんが主宰しています。ソンヤさんは今渥美財団のスタッフでもあり、今回はふたつの帽子をかぶって忙しいですが、ジェンダー、マイノリティーをキーワードとして日本語と英語で進めるアジア文化対話を通じてネットワーク構築を目指しています。今回も、ソンヤさんと一緒にアジア文化対話プロジェクトを推進している元渥美奨学生の皆さんがコメンテーター等として参加していますので、どうぞ沖縄の皆さんとの交流を楽しんでください。また、来年８月に仙台で開催する第８回アジア未来会議では、次のアジア文化対話を開催することになっていますので、関心のある方は団扇（編注：開催当日会場参加者に配布）のＱＲコードをチェックしてください。

本日は午前９時半から午後６時までの長時間、世界各国から集まってくださったたくさんの方々からのお話を伺う、内容がぎっしりと詰まったフォーラムです。長丁場ですが、みなさんお付き合いいただき、質疑応答や休憩時間には活発に議論に参加していただきますよう、お願いいたします。



© 2026 SGRA

# 【開会挨拶】

山代 寛
沖縄大学学長

登壇者の皆様、そしてご多忙の中、本日沖縄大学にお集まりくださいました皆様を、心より歓迎申し上げます。沖縄大学学長の山代でございます。

まず初めに、本日の「Asian Cultural Dialogues（アジア文化対話）フォーラム」の開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました関係者の皆様、ならびに国内外からご登壇いただく専門家の皆様に、心より感謝申し上げます。本フォーラムは、渥美国際交流財団 関口グローバル研究会様との共催により、沖縄大学第611回土曜教養講座として実現いたしました。

沖縄は、アジア太平洋戦争において、住民の4人に1人が犠牲となったとされる苛烈な地上戦を経験いたしました。その後も、国土のわずか0.6%にすぎないこの小さな島に、日本国内の70%以上の米軍施設が集中する「基地の島」として、長く過重な負担を背負ってまいりました。こうした歴史は決して過去の出来事ではなく、現在もなお、米軍基地に起因する事件・事故、とりわけ女性や子どもを含む非戦闘員が犠牲となる事態が続いています。

本フォーラムは、沖縄の経験を単なる歴史の教訓として語り継ぐだけでなく、今日私たちが直面するグローバルな課題と結びつけて再考察する、大きな意義を持つものです。軍事的対立が世界各地で続き、非戦闘員の命が脅かされる中、いかにしてその命を守る視点を持ち続けるのか。その鍵となるのが「ジェンダー」という視点です。ジェンダーは、性別に基づいた役割や社会的規範を問い直し、すべての人が尊重される社会を目指す考え方です。この視点から戦争や紛争における暴力、さらには日常生活に潜む構造的暴力を見つめ直すことは、未来の普遍的な価値を模索するうえで欠かすことができません。

前回の第610回土曜教養講座において、洪玧伸先生は「慰安所」や「土地のトラウマ」といったテーマを取り上げ、植民地主義とジェンダーの視点から記憶を問い直してくださいました。本日はさらに、多国籍の専門家の皆様の多様な知見と視点が沖縄の経験と交わることで、国境を越えた新たな洞察が生まれることを期待しております。

フォーラムの名称である「アジア文化対話」は、まさに多様な声と視点の交わりそのものを意味しています。この場が、登壇者が一方的に知識を提供する場ではなく、参加者お一人おひとりが「学び、感じ、行動する」対話の場となることを願っております。


© 2026 SGRA

アジア太平洋戦争の終結から80年という節目の年にあたり、私たちはいかに戦争の傷痕と向き合い、未来へと繋げていくのか。本日この沖縄の地で、国際的かつ学際的、さらにはアカデミアを超えた皆様との対話を通じて、アジアの過去・現在・未来に共通して忘れてはならない価値を共に深く考える機会となることを、心から願っております。

本日のフォーラムが実り多きものとなりますことを祈念し、私の開会の挨拶といたします。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

【フォーラムの紹介】

洪 玧伸（ホン ユンシン）
沖縄大学

SGRAのメンバーであり、沖縄大学の准教授の洪玧伸です。SGRAの渥美奨学生としてはじめて今西さんに出会った18年前以来、たびたび今西さんが「沖縄に行くからね」とおっしゃっていましたが、まさか、私が沖縄大学の教員になり、本当にSGRAの学者たちを招くことになるとは夢にも思いませんでした。本日、登壇したSGRAの参加者たちは、韓国、中国、オランダ、フィリピン、タイ、インドネシアなど7か国以上の出身地を持つ学者や活動家です。そして私を含む登壇者の大半は、渥美財団の奨学生で、日本という国で博士論文を書こうと奮闘した経歴を持ちます。私たちの多くは、学問をする過程で、それぞれの状況に巻き込まれながら、何故か、自分が思いを寄せるこの国の状況を、少し変えようと頑張ってきたボヘミアンかも知れません。今や世界各地でネットワークを広げ、対話を続けるネットワークを持っています。私にとって沖縄は、沖縄戦を知るという過程でもあり、そこから自分自身を巻き込み、今西さんを含む、多くの人たちを、今や勤め先の大学までも巻き込み「運動」と繋げた場所でもあったように思います。

本日のテーマは「アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性」ですが、戦後80年という節目の年である今年における、沖縄戦の記憶という問題認識もその中には含まれています。今年、沖縄では、100歳に近い証言者が新聞紙面で、「過去になり得ない」記憶を述べ、愛する人に手をかけてしまった「集団自決」の惨事を繰り返し、スパイ視されて日本軍に殺された記憶が地図で示されていました。また、今まで大きく取り上げられてこなかった大東諸島「慰安所」に関する証言などもありました。

一方で、戦後80年でもなお続く、繰り返し米軍に起因する性犯罪について県民大会や、記者会見、そしてつい数日前には、30年前に起きた1995年少女暴行事件の米兵たちにすでに犯罪歴があった、しかし防げなかったことなどのニュースも、取り上げられています。30年経っても、80年経っても日本軍から米軍へ、軍隊が居座り続ける沖縄は、まさに「戦後」とは言えない状況とも言えます。沖縄で起こり続けている戦時・戦後の線引きの無さは、今、パレスチナで、インドネシアで、民主化を求めて闘い続けるタイで、起こり続けている進行形の現状でもあります。

今なすべきことは、戦後「何年」という時間軸自体ではなく、何故、こうした


© 2026 SGRA

暴力が繰り返し起こり、そして何故この土地に起こり得るか。「今ここ」この空間を生きている私たちは、どのようにこの暴力を見て、それに立ち向う言葉を考えなければならないのでしょうか。

その連鎖を最も顕著にうかびあがらせるのは、言うまでもなく、ジェンダー視点です。

今日のシンポジウムでは、先ほど述べたように7か国に及ぶ出身地を持つ登壇者、参加者が集まりました。それはインターナショナルということを強調しているわけではなく、ここ沖縄で集まり、議論することによって、私たちは、どこか雲の上の学問の世界ではなく、私たちの生きる日常で、何か出来るのではないかという「希望」を語りたいからです。SGRAと沖縄大学が共催した本日の集まりは、こうした希望をあきらめない心から企画されました。

最初の冨山一郎先生の基調演説はその糸口を提供し、続く二つのセッションでは、インドネシア、フィリピン、タイといった過去の帝国主義と植民地主義が重なり、それによってもたらされた「暴力の傷跡」が、沖縄の状況と共に交差されます。最後のセッションでは、状況に悩みながら動き出そうとする「今を生きる」若者たちの発言も予定されています。

また、強調したいのは、本日の場が、何かの知識を一方的に伝える場ではなく、出来る限り議論をする場、「対話」を目指していることです。それは、本日の全体コーディネーターのソンヤさんが橋渡し役をしてくれることでしょう。

私は本日の共催団体のSGRAと沖縄大学両方に属するものです。それはやはり出会いでした。人と人がつながることが、いかに大切か。今日、ここに来られ、これから何処か自分の知らない土地で活躍するかも知れない大学生たちにとっても、SGRAのメンバーたちが勇気を与えることと思います。

長い一日となるかも知れません。どうぞ最後まで、それぞれの背景を持ちながら日本という国に関わってきたボヘミアンたちの声を聴いてください。そして、多様な国籍、多様な背景を持つ話者たちの議論に「巻き込まれながら」一緒に、考えてください。「ジェンダー」を軸に、国家、社会、地域を超えて暴力に対抗するための何かの言葉を考えて行く時間になることを願っております。



© 2026 SGRA

基調講演

# 暴力に抗する「他者」の眼差し

冨山一郎
同志社大学

## はじめに

今から30年前、つまり1995年に私は、『戦場の記憶』（日本経済評論社、1995年）という沖縄戦についての本を書きました。最初にこの本と本を刊行した頃のことから話をしたいと思います。ちょうど戦後50年ということもあって、アジア太平洋戦争にかかわる記録や研究書が刊行され、シンポジウムなどもおこなわれました。しかしこの本には、こうした日本の戦後といういい方では収まらない複数の文脈が入り込んでいます。沖縄において米兵3名による許しがたい性暴力事件が起き、復帰運動以来の大きな運動のうねりが始まったのもこの年でした。それは戦後50年という言い方とは異なる50年を沖縄という場所が抱え込んでいることを、突きつける出来事でもありました。あえていえばそれは、戦後50年というけれども戦争は継続しているということにほかなりません。あるいは戦後という言葉の欺瞞性といってもいいかもしれません。

高里鈴代さんに東京の集会でお会いしたのも、この頃だったと思います。ご本人は覚えておられないと思いますが、発言者として檀上に立つ前に私たちが待機していた時に、高里さんはつぶやくように、「何度東京に来て同じ話をすればいいのだろう」とおっしゃいました。沖縄について何か語るとき、いつもこの高里さんの言葉を思い出しています。この『戦場の記憶』がかかえこんだ戦後50年への齟齬や違和感は、今日、戦後80年ということでこうしたイベントを沖縄で行うことへの期待といいかえてもいいかもしれません。日本の戦後というような自閉した歴史認識が、それこそ80年にもわたって今もなお問われているのであり、それは平和を守れというような言い方においても通底していると考えます。

もう少しこの『戦場の記憶』を書いた頃の話をさせてください。戦争にかかわっていえば当時、ソヴィエト連邦崩壊後の世界秩序の不安定化の中で、民族という言葉が極めて大きな意味を持ち始め、同時にそれが殺戮としても登場しまし


© 2026 SGRA

た。たとえばユーゴスラヴィアの崩壊の中で生じた、昨日まで隣人だった人々同士が殺し合いを始めるような事態です。こうした凄惨な光景は、世界の各地で起きました。それは、戦場と日常が重なりあう、非常事態の日常化といってもいいかもしれません。そのような日常の中で、性暴力とともに「民族浄化」という恐ろしい言葉も登場しました。またこうした1990年前後の事態は、帝国日本がアジアにおいて行った蛮行とも重なっていると思いました。他方でこれまでとは異なる戦争の在り方も顕在化しました。1991年の湾岸戦争です。それも日常と直結する戦争でしたが、まるでテレビゲームをみているような感覚で人が殺されているのを眺めている戦争でした。それは今も続いています。

確かに『戦場の記憶』は沖縄戦について考えた本なのですが、そこには戦争をどう受け止めればいいのかという自分の生きている同時代における戦争にかかわる複数の問いが入り込んでいます。そしてこうした問いの前提としてあるのが、戦争が自分の生きている今と地続きだということです。すなわち戦争は過去のことでもなければ、ある地域に囲まれた出来事でもなく、今自分がたっている場所と重なり、つながっているということ、そのことを前提にしなければならないということでした。この本の冒頭に私は次のように書きました。

> 戦場が異常事態でもなければ、日々の生活から切り離された狂気でもなく、毎日の陳腐な営みにおいてこそ準備されるのだとしたら、過去の戦場の記憶をいかに語ることができるのだろうかということこそ、問われなければならないのだ。…（中略）…戦場に日常を持ち込むことにより、日常と切り離されたところで戦場の記憶を語る語り口を問いただし、今度は逆に日常のなかに戦場を発見するという往復運動が必要なのだ。

この文章で宣言したかったのは、戦争を自分から切り離して論じる場所などないということです。平和な日本などということを前提にして戦争を語ることなどできない。平時は戦時と重なり合っているのであり、それを前提にして戦争を語るとしたら、平時と戦時の区分を行ったり来たりしながら考える以外にありません。戦争を対象化したうえ論じられる一般的な正しい解説ではなく、自分の住まう世界の中でその戦争が何かということが、まず問われなければならないのです。それは、戦場の性暴力が、戦争という異常事態の問題ではなく、自分の生きる日常世界におけるジェンダー規範やセクシュアリティへの認識と重なっていること、そのことをぬきに戦争を考えることはできないということでもあるでしょう。いいかえればそれは、この平時に戦争を予感し、また終わったとされる戦争の終わらない傷を凝視することにより自分が生きている日常を問い直すことにほかなりません。



© 2026 SGRA

## 1．戦争に抗するとはどういうことか：言葉と暴力の問題

ところでこうした前提は、戦前あるいは戦後という言葉を無効にするだけでなく、戦争に抗するとはどういうことなのかという問いに結び付きます。この点にかかわってもう一つあらかじめ述べておきたいことがあります。それは言葉という領域にかかわることであり、同時に暴力という問題です。ここで念頭においているのは、言葉が後景に退き暴力がせりあがってくる状況、何をいっても無駄という状況のことです。言葉が人と人の関係性を生み出すことから撤退するとき、関係性を支配しようと登場する力こそが暴力という問題ではないでしょうか。平時と戦時の重なり合いから戦争に抗する営みの輪郭を浮かび上がらすために、今このような言葉と暴力の問題を、出発点にすえてみたいと思います。

言葉が次第に意味をなさなくなり、暴力がせりあがってくる状況は、人種主義や植民地主義の中でも日常的に登場します。例えば植民地解放闘争を担ったフランツ・ファノンは、町の中で突然「ほらニグロ」と子どもに指さされた時の経験を、「他者は身振りや態度や眼差しで私を着色する。…私は激昂し、釈明を求めた…。なにをしても無駄だった。私は粉々に砕け散った」と記しています（フランツ・ファノン『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房）。この、釈明を求めても、あるいは何をしても無駄という状況こそが、話しているのに話しているとはみなされず、抗議の声も放置されたまま消えていき、次第に暴力にさらされているという感覚が膨れ上がっていく事態にほかなりません。

あるいは社会運動家で多くの著作を出しているレベッカ・ソルニットは、『私のいない部屋』（東辻賢治郎訳、左右社）という著書の中で、自らのライフヒストリーを念頭におきながら、自分の生きてきた世界が自らの女性としての身体や性的マイノリティにむけられる暴力が恒常化していた日常であったと述べていますが、そこでいう暴力は単に具体的な行為だけを意味しているのではありません。ソルニットは、「暴力の脅威は心に根を張り、恐怖と緊張は肉体に棲みつく」と述べていますが、そこでいう暴力は身体が感じ取る脅威であり、日常の中で危険にさらされているという感覚にかかわることなのです。

またソルニットはこうした日常を、「戦時下の生活」とも表現しています。ここでいう戦時下という言葉は比喩的な意味としてとらえることも可能ですが、そうした事実確認的な解釈よりも、暴力にさらされているという日常の身体感覚の延長線上に戦時が見いだされていることが、重要であると考えます。そしてソルニットの議論でさらに重要なのは、この暴力にさらされているという感覚を言語行為との関係で描き出していることです。すなわち語っても語ったこととして認められない、自らの言葉が言葉として承認されない状況と暴力にさらされているという身体感覚が重なっているのです。ソルニットはそれを、誰が「言葉のない空間」に追いやられるのかと問い、その言葉のない空間と継続中の暴力にさらされているということを、ひとつながりの問題として描いています。

ソルニットは『説教したがる男たち』（ハーン小路恭子訳、左右社）という著書の中で、一方的に説明しようとする男性をとりあげ、それがマンスプレイニン





© 2026 SGRA

グ（mansplaining）という言葉を生みました。しかしそれは説教臭い男たちということだけではありません。相手を、言葉を語る存在とは認めないという態度からソルニットが感じとったのは、まさしく問答無用の暴力にほかなりません。すなわち言葉の領域はある秩序を持っており、そこには言葉の意味内容以前に、絶えず誰を言葉のない空間に追いやるのかという排除が、言葉の前提として存在するのであり、そこにソルニットは暴力を見出したのです。それがソルニットにとってのジェンダー的秩序にほかなりません。ソルニットは自分の議論がマンスプレイニングという流行語を生んだことを批判的に受け止めながら、それは「惨めたらしい死」とひとつながりであると述べています。そこに先ほど述べた「戦時下」という言葉も、重なっているでしょう。

ところで先ほども述べたように、言葉が次第に意味をなさなくなり、暴力がせりあがってくる状況は、人種主義や植民地主義の中でも日常的に登場します。それはまた暴力は決してひとつの言葉のない部屋において登場するのではなく、幾重にも重なり合っていることを意味しています。この重なりは、暴力に抗するという実践がいかなる関係性において担われるのかということにも関わっています。

フェミニズム研究のみならず様々な分野で発言し続けているジュディス・バトラーは、『触発する言葉』（竹村和子訳、岩波書店）の中で言語領域からの「予めの排除（foreclosure）」という問題をとりあげています。それは話すことが禁止されているということではなく、話しても言葉としてみなされないという排除です。バトラーにおいて権力とは言葉の領域から予め排除し続ける中で成立するものであり、またこうした権力は、「ある種の市民を生存可能にし、他の市民を生存不可能にするために機能」すると述べています。バトラーはそこで暴力という言葉を使ってはいませんが、言葉を発することのできる可能性が予め排除されている者たちは、「危険にさらされている（at risk）という感覚」をもつと述べています。それはまさしくファノンのいう「何をしても無駄」ということであり、ソルニットがいう「恐怖と緊張は肉体に棲みつく」ということにほかなりません。

またこうした言葉として承認されない領域は、しばしば言葉以外の行為として認知されることになるでしょう。それは例えば身振りやただの音、あるいは鳴き声などです。そしてこうした身振りや音としてのみ受け止められる言葉には、しばしば新たな意味付与がなされ、それが生存を不可能にしてもいい理由として運用されたりもします。

ここで沖縄戦のさなか日本軍が戦場において、沖縄の言葉を話したものはスパイとみなして殺せという軍令をだしたことを思い出すことは重要です。そこでは何を語るのかが問題なのではなく、沖縄語という言葉そのものが言葉の領域から排除され、同時にそれはスパイの身振りとみなされているのです。またこうした文脈の中に、私が度々言及してきた沖縄戦の証言があります（『戦場の記憶』参照）。それは沖縄戦の証言として聞き取られたものですが、沖縄戦が始まる前に小学校の教室で教師が、「大震災の時、標準語がしゃべれなかったばかりに、多くの朝鮮人が殺された。君たちも間違われて殺されないように」と生徒たちに語ったのです。1923年の関東大震災の時、戒厳令のもとで自警団が日本語の発音を標識として、殺してもいい朝鮮人をみつけだして虐殺したことは、すでに



© 2026 SGRA

よく知られていました。教師はそれをふまえて、「間違われて殺されないように」と教室で話したのです。またそれを聞いた元生徒は、沖縄戦における日本軍の住民への残虐行為にかかわる記憶として、この教師の発言を想起し語っているのです。

そこにはすべての秩序が軍事的暴力において遂行される戒厳状態がうかびあがります。この戒厳状態において、バトラーのいう「ある種の市民を生存可能にし、ほかの市民を生存不可能にする」ことこそが、言葉の領域における予めの排除にほかなりません。また沖縄戦は日米の国民軍同士の戦闘でもなければ、軍同士の戦闘に、たんに住民が巻き込まれたということでもありません。まさしく戒厳令なき戒厳状態において人々を動員し、また問答無用で人々を殺害したことこそが沖縄戦の基軸であったと私は考えています。動員されるか虐殺されるかという戦場です。またそこに、関東大震災における虐殺と沖縄戦における虐殺をつなげていく回路があると考えています。

しかしながらこの教師の発言にもあるように、このつながりは、まずは間違われないようにすることとして登場しました。予めの排除は今述べたように幾重にも重なって存在します。こうした幾重にも張り巡らされた排除の中で、暴力を予感しながらも自分は生存可能な側であると文字通り必死で主張するわけです。また幾重にも重なる予めの排除は、決して同じ排除ではなく、それぞれが重なり合い、対立し、そうであるがゆえに○○なら仕方がないが私は○○ではないという言い分が、そこかしこに登場します。ジェンダーやセクシュアリティもこうした重なりと対立の中で再度検討しなければなりません。

こうした重なりは交差性といってもいいかもしれませんが、重要な問題は、私は○○ではない、という態度です。少し具体的に述べれば、私は沖縄の言葉を話しているが朝鮮人ではない日本人だ、あるいは私は朝鮮人だが共産主義者ではない、あるいは私は女性だが白人である、あるいは私は黒人だが男だ、あるいはさらに私は左翼だが過激派ではないということです。これらは、決してきれいな階層構造を構成しているのではなく、重なり合いながらも対立し絡み合っていますが、まさしく暴力にさらされる中で、他者との関係を断ち切ることを意味しています。しかしそこに別の道筋をえがくことはできないでしょうか。バトラーのいう「危険にさらされている感覚」を○○という他者との切断ではなく出会いとして、再設定することはできないでしょうか。○○ではないとして暴力にさらされている感覚を打ち消そうとするのではなく、自らの日常を成り立たせている予めの排除を問い、その○○と新たな関係をつくりあげていく出発点として暴力の予感を確保することはできないでしょうか。そしてこうした他者との関係性こそが、暴力に抗するということなのではないでしょうか。それは○○ではないといっていた「私」という存在が、変わっていくことでもあるでしょう。

政治哲学者のジャック・ランシエールは、既存の政治には、その政治から予め排除された者たちが配置されおり、その者たちの存在は見えず、またその言葉は動物の「鳴き声」とみなされていると述べています（ジャック・ランシエール『不和あるいは了解なき了解』松葉祥一・大森秀臣・藤江成夫訳、インスクリプト）。そしてこうした予めの排除を前提にした政治を政治とよぶのではなく、こ





© 2026 SGRA

の排除された者たちが顔を出し、声を上げ、次第に既存政治の前提が問われ始める事態こそが政治であるとしたうえで、その政治のプロセスを、「今まで見られる場を持たなかったものを見えるようにし、音だけがあったところに言説が聞こえるようにし」ていくことであると述べています。予めの排除はいわば、見ること、あるいは聞くことをめぐる生死にかかわる抗争であり、それこそが政治なのです。

伊波普猷（いはふゆう）について画期的な研究をした崎濱紗奈さんは、『伊波普猷の政治と哲学』（法政大学出版局）という著書の中で、このランシエールのいう政治において、今の沖縄を描いています。つまりいくら主張しても主張として認めない、ただの「鳴き声」とみなし続ける日米の共犯関係において構築された既存政治への、存在をかけた抗争としての政治です。あるいは洪玧伸さんの著書である『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』（インパクト出版会）で、「慰安婦」あるいは「慰安所」を見たという経験が、新たな関係性の出発点として考察されていることも、この政治にかかわります。また増渕あさ子さんが、最近出された『軍事化される福祉』（インパクト出版会）という著書の中で、戦時と平時の結節点として福祉という領域をとらえたうえで、その結節点をになう公衆衛生看護婦たちが現場で生み出す関係性に希望をみいだそうとされているのも、既存政治への存在をかけた抗争であると私は考えています。ランシエールのいう存在をかけた抗争という政治は、沖縄という場所が抱え込んだ闘いの系譜といってもいいのかもしれません。

ところでここでいう政治のプロセスが既存の政治の前提を問うものである以上、この動きを担う者たちは、既存の政治からは徹底的に鎮圧されるべき存在として描き出されるでしょう。それは予め排除された領域から始める言葉の問題として先ほど述べたことでもありますが、声を言葉に変えていくプロセスは、単なる言語行為におさまるものではなく、時には秩序を乱す暴力として描き出されるに違いありません。こうした意味では、暴力に抗するプロセス自体が、既存の政治においては暴力的であると命名されることもありうるでしょう。ここに暴力という言葉の厄介さがありますが、そこに新たな言葉と存在の登場を見出していくことが重要になると考えます。

## 2.「暴力、その後」という問題

ところで日常的に暴力にさらされているという身体感覚は、すでに暴力が行使されているということと切り離すことはできません。ソルニットがいう暴力の脅威には、未来の暴力の予感と同時に、すでに生じている暴力の記憶が重なっているのであり、そこには過去から現在そして未来に向かうという単線的な時間とは異なる時間が存在しています。フェミニズム研究の竹村和子は、「いかにして理論で政治をおこなうか」（竹村和子「訳者あとがき」ジュディス・バトラー『触発する言葉』）という文章の中で、「暴力は、暴力的行為のなかだけにあるのではない。暴力のその後、わたしたちの生そのもののなかに根をはっている」と指摘



© 2026 SGRA

していますが、継続する暴力的状況の中では、かつての暴力と、これからの暴力が、今ここのひとつの脅威として、生そのものに根を張っているのです。

それは、すでに生じている関東大震災における虐殺を想起しながら、「間違われないように」とこれからの暴力の予感を語る教師においても同様です。暴力の後（あと）としての今と、これからの暴力を予感する今は、重なり合っているのです。さきほど他者との関係性こそが、暴力に抗するということであり、それは○○ではないと主張していた「私」という存在が変わっていくことであると述べましたが、そこでは暴力の後と暴力の予感が重なる今を、他者との出会いの始まりとして確保することが問われているのです。

そのためにも、ここで竹村のいう「暴力、その後」という問題をもう少し考えてみたいと思います。バトラーのいう予めの排除については先ほど述べましたが、バトラーはこの言葉をまずは精神分析学の概念として考察しています。今精神分析学はどうでもいいのですが、そこでは予めの排除を、「思い出すこともされず、憶えておかれもせず、意識のなかにも導き入られない」と述べています。あえていえばそれは、記憶を思い起こすこと、すなわち想起にかかわる問題です。過去の出来事の言語化は、いわゆる記憶という領域にかかわる問題です。そして記憶は言語領域の外に広がっているのであり、その言語化は同時に、言語とみなされないような身振りや表情、あるいは言葉ならざる言葉としてもあるでしょう。精神分析学ではこうした言葉と言葉ならざる領域は、多くの場合構造的に固定されていますが、バトラーはそれを秩序の問題あるいは権力の問題として描きなおしたのです。いいかえれば記憶が想起されるということは、既存の言語的秩序においては言語ではないと予め排除されてきた領域が、その排除の切断線を食い破りながら姿を現す事態なのです。それは既存の言語的秩序が支えていた現実が問われることであり、だからこそその始まりは、まずは混乱として、あるいは、くりかえしますが、暴力的とみなされる出来事として登場するのでしょう。

そこで重要な点は、この予めの排除が問われるプロセスとは、それが現実世界の言語的秩序の前提にかかわることである以上、決して個人の営みとしてあるわけではないという点です。すなわちあえていえば、様々な行為が絡まりあった集団的な動きとして登場するのであり、いいかえればこれまで排除されていた他者の存在が姿を現し、こうした他者との関係性が一人ひとりに問われていくような動態としてあります。ソルニットや竹村が指摘する暴力の脅威が、ランシエールのいう政治につながっていくプロセスを、私はこうした集団的な動きとして考えてみたいと思います。あえていえば、個人ではなくこの集団性の登場がいかなる事態なのかということが、重要なのです。

## 3．予めの排除に抗するこころみ

ところで、先ほど述べたすでに生じている暴力の記憶を考える時、避けて通れない問題領域があります。それは過去の傷や被害、あるいはトラウマという問題





© 2026 SGRA

です。PTSDなど疾患の原因となるトラウマは、暴力的な出来事にかかわるトラウマ的記憶として議論され、治療の対象になってきました。今こうした治療実践が必要ないということをいいたいのではありません。しかし記憶が言葉を獲得しようとするプロセスをトラウマの症状として意味づけることは、まさしくこれまで議論してきた予めの排除にほかなりません。すなわち先ほどもいいましたように記憶が言葉を獲得するプロセスは、既存の現実が混乱する事態なのですが、あえていえばトラウマという用語は、この混乱を事実として聞き取ることのできる証言とトラウマ的記憶に区分し、後者の方を病状とみなして言語的意味を剥奪し、そのうえで治療実践の対象であることの根拠として意味づけるわけです。この証言と病状の区分を前提にしている限り、予めの排除に抗するこころみは、被害証言の証言台と病室に別々に隔離されることになります。

さらにトラウマ治療の現場からは、このような区分けが成り立たないことが、既に指摘されています。例えばトラウマの病状として指摘されている「回避」という概念があるのですが、それは、ある出来事のまわりを丁寧に縁取り、そこに立ち入ることを一切拒絶するような語りです。沖縄戦にかかわるトラウマの治療を続けている蟻塚亮二は、『沖縄戦と心の傷』（大月書店）という著書の中で、トラウマを抱えた者は、混乱した言葉ではなく、「決まった線路を走る列車のように」、明確に語ると指摘しています。そして治療の現場では、まちがいなくその語りは病状ですが、明確な事実を聞き取ろうとする聞き手にとっては証言にもなるわけです。そこで問われているのは言葉の概念的区分ではなく、聞くことにおいて何を言葉とみなし何を病状とみなすのかというこの前提的な秩序にほかなりません。

今ここで、トラウマ論に深入りする必要はありません。また治療は必要です。ただこの暴力にかかわるトラウマという問題から提出される重大な問いは、暴力のその後にかかわる事後性という問題です。トラウマにおいては多くの場合、過去に受けた傷の深さがその要因として想定されています。そこでは傷は、過去の出来事に密着して存在し、トラウマはその出来事の後という時制にすえられています。そこでは暴力の被害は、あくまでも過去の出来事としてあります。

しかしトラウマは、過去の出来事ということだけではなく、その出来事を今語ろうとすることと語ることを予め封じこめようとする力が絡み合う、現在における力学的な問題でもあります。すなわち過去の出来事ではなく、語ろうとしても語れない、語る言葉が見つからない、語る言葉が言葉として認められない、あるいは語ることが許されないという今の状況が、トラウマを生み出すのです。そこでは、語ろうとする今という現在が過去の出来事をトラウマとして構成し、現在にトラウマをもたらすことになります。医療人類学者の松島健の言葉を借りれば、トラウマの事後性とは、こうした過去と現在を螺旋状に往還する時間にあるのです（松島健「トラウマの時間性」田中雅一・松島健編『トラウマを生きる』京都大学学術出版会）。そこでは語るという動詞をめぐる今現在の言葉の秩序が問われることになり、語るという動詞とともに構成される状況や、語る相手や宛先もまた重要な問題になります。あえていえばトラウマは、言語化をめぐる今ここにおける言語的秩序、すなわち予めの排除をめぐる抗争でもあるのです。



© 2026 SGRA

この問題はすぐさま、次のような極めて具体的な問いにつながります。すなわちかつての戦争の傷を、継続中の戦場の中で想起することはできるのか。あるいはそこに先ほど引用した竹村の、「暴力は、暴力的行為のなかだけにあるのではない。暴力のその後、わたしたちの生そのもののなかに根をはっている」という文章を重ねてもいいかもしれません。すなわち、生そのものの中に根を張る暴力とは、たんなる傷の深さというだけではなく、その暴力が今も継続中であるということにほかなりません。

インド・パキスタンの分離独立の中で生じた女性への戦時性暴力について人類学者の田辺明生は、「生き延びてあることの了解不能性から、他者とのつながりの再構築へ」という論文の中で、「トラウマ経験を言語化できないなかで、人々はどのように日常の生きられる世界を再構築しているのだろうか」という問いをたてていますが（田辺明生「生き延びてあることの了解不能性から、他者とのつながりの再構築へ」田中雅一・松島健編『トラウマを生きる』京都大学学術出版会）、この問いにおける田辺の焦点は、トラウマ経験の傷の深さというより、言語化できないという今の状況を、いかにして「生きられる世界の再構築」に結び付けるのかというところにあります。また田辺はこの語れないということを、女性たちが「自分たちを誘拐した者たち、蹂躙した者たち、あるいは裏切った者たちのあいだで生きていかざるをえない状況」として指摘し、「そこでは、暴力の記憶は決して語りえない」と述べています。暴力は過去の出来事に閉じ込められているのではありません。語れないということは、その暴力が潜在的にも顕在的にも継続中であることにかかわることであり、語るとは、今作動中の暴力に向き合う営みでもあるのです。そしてだからこそそこに、生きられる世界をどう作り上げるのかという問いを立てなければならないのではないでしょうか。

そして語りえないということは、たんに田辺がいうような加害者がまだ眼の前に存在しているということだけではなく、語ることを封じ込め、語ろうとする言葉を予め排除することにより暴力の痕跡を言葉の外に葬る言語的な秩序にかかわる問題です。またそこでは暴力にかかわる記憶をいかに語るか、あるいは語るとはどういう事態なのか、語る言葉はどのような姿をまとって現れるのか、ということが問われることになるでしょう。またこの言葉には、アートによる表現も含まれるでしょう。そして田辺のいう生きられる世界とは、こうした言葉の始まりとともにあるのではないでしょうか。

## 4．被害という言葉の持つ意味

トラウマという傷は、個人の傷でもなければ過去の出来事でもありません。今を生き延びようとする不断の闘いの中に傷は抱え込まれているのです。ここにおいて被害という言葉を、再度検討する必要があるでしょう。被害は治療や救済の文脈の中では極めて重要な位置を占め、曖昧であってはなりません。客観的な事実として被害と被害者は認定される必要があるのです。しかしトラウマにかかわる議論から見えてくるのは、傷は闘いの中に抱え込まれているということです。





© 2026 SGRA

性暴力にかかわって韓国のフェミニズム研究を担う鄭喜鎮は、「被害者アイデンティティの生とフェミニズム」という論文の中で、「被害は発見されるのではなく「言語的実践」によって発明すべき対象」だとし、それを「闘いによって獲得される概念」だと述べていますが（鄭喜鎮「被害者アイデンティティの生とフェミニズム」クォンキム・ヒョンヨン編『加害と被害のフェミニズム』監訳影本剛・ハン・ディディ、解放出版社）、そこで想定されているのは、被害の認定とその救済ということではなく、すくなくともそれだけではなく、これまで述べてきた予めの排除にかかわる抗争にほかなりません。そしてこの抗争の中でしばしば生じることが「被害者化」であると、鄭喜鎮は警告します。すなわちこれまで言語的秩序から予め排除されながらも、言葉を獲得し始めた語る主体は、今度は犠牲者であるときだけ語ることが承認されることになるのです。

この承認は、始まった抗争を停止させ、犠牲者であるとき以外の生を、再度ソルニットのいう言葉のない空間に埋葬していく事態だともいえるでしょう。またこの再度の埋葬により、被害は闘いの中で獲得される概念ではなく、被害者の属性として固定化され自然化されることにもなります。継続する暴力は、暴力の痕跡を言葉のない空間へと予め排除するという問題でもありました。したがってこの再度の埋葬は、依然として暴力が継続していることを示しているといえるでしょう。そしてだからこそ、犠牲者の証言といったとき、証言という範疇がこの暴力の継続に加担していないかどうか、注意しなければならないのです。またこの注意が払われないところでもし犠牲者の証言を根拠に謝罪や救済が登場するとしたら、それは過去の暴力への謝罪や救済と引き換えに、今継続中の暴力を、容認することにもなるでしょう。

この鄭喜鎮が指摘する被害者化ということにかかわって竹村も、『愛について』（岩波書店）という著書の中で、被害者であるというカミングアウトを受け取る状況について、「聞き手は、聞き取り可能なものだけを聞く。語りは、聞き手に届いたとき、聞き手にとっての語りになる」と述べています。すなわち聞くことには、聞くことの可能なものだけ聞くという枠組みが既に前提にされており、この前提としてある聞くことができるという可能性、あるいはできないという不可能性こそが、バトラーのいう予めの排除にほかなりません。そして竹村は、「被害者である」というカミングアウトに、「被害者になる」というビカミングアウトを対峙させ、後者にこの前提としてある枠組み自体を問うこと、すなわち予めの排除を問題化していくプロセスを、見出そうとしています。

またこのビカミングアウトの先に想定されている世界は、カミングアウトを受け止め支援や救済をしようとする聞き手たちが住む既存の社会ではなく、予めの排除を前提にして成り立つ今の現実に抗する運動としてあります。またこの運動は、これまでの被害者、支援者、活動家、研究者の関係も含め、新たな関係性をつくりあげ、また現実に住まうあらゆる人々を巻き込んでいくのではないでしょうか。ビカミングアウトにおいて登場した他者との出会いがそれぞれの位置性を問う契機となり、そこから始まる集団的な運動こそが、暴力に抗するという実践になるのではないでしょうか。



© 2026 SGRA

## 5．継続する暴力に抗するためには

たしかに被害者の被害が動かしがたい真実であるということは、法的な救済の枠組みのみならず、誰が加害者なのかという認定や、加害の責任ということに密接に結びついているがゆえに、きわめて強固でありまた重要なものです。こうした責任を真実によって明らかにし、関係者を処罰していく必要があることはいうまでもありません。また被害者への救済も必要です。しかし他方で、被害者を救済し、加害者を処罰することだけでは、継続する暴力に抗することができないのではないかというのが、今日私が話したかった問いです。暴力は日々の日常に深く根を張り、当たり前として受け止められている会話や、気づきもしない了解事項によって継続しているのです。言語的秩序という固い言い方で示したかったのは、このあたり前の日常でした。また責任を真実によって明らかにすることに対しては、先ほどから述べている被害者化という問題が絶えず存在します。30年前に『戦場の記憶』を出した頃、戦場における性暴力にとりくんでいた活動家から、正義の根拠を被害者に押し付けるのではないやり方で正義を実現するにはどうしたらいいかと聞かれたことがあります。それは、暴力の痕跡を抱える被害者がこれから生きていく世界と、社会の正義を実現することが齟齬をきたしていることを訴えているのです。

こうした齟齬あるいは困難に対しては、すぐさま正しい答えを求めることより、私はその困難を抱え込むことが重要ではないかと考えています。困難は解決すべき対象というよりも抱え込むべき出発点なのです。また抱え込むということは、抱え込まなければならないという倫理的判断にもとづくことではなく、また抱え込む一人ひとりの決意にゆだねることでもなく、新たな関係性を共に作り上げていく集団的な営みとして抱え込むことをいかに確保するのかという場の問題であると考えます。それは、安心して言葉において関係を継続できるような場、あえていえば新しい言葉と関係を継続的に作り上げていく場の問題です。

またその営みが継続するためには、齟齬があっても、あるいは意見の一致がなくても、その場に参加でき、また巻き込まれていくことができるということが、とても重要になります。なぜなら要点は、意見の一致でもなければ、最大公約数的な共通項をくくり出し、集団を量的に拡大させていくことでもなく、それぞれの既存の位置性から出発し、それぞれが変わっていくような新しい関係性を生み出すことにあるからです。このような場を、そこかしこに構築していくようなこころみこそが、重要なのではないでしょうか。そこで生じるのは、それぞれの位置を共通項においてくくり出す等質な集団ではなく、他者との関係を丁寧につくりなおしていく運動の中で現れる集団性です。そしてまさしくそこに、すでに暴力に抗する社会は始まっているのではないでしょうか。明日から予定されている宮古島での活動もそうしたこころみだと私は理解しています。また、まさしく今日のこの集まりも、そうしたこころみの出発点になればいいなあと思っています。





© 2026 SGRA

# ［コメント1－1］

## 宮城晴美

沖縄女性史研究家

講演の「暴力」という視点から、私の方からは、軍事的に「暴力」にさらされてきた沖縄女性を取り巻く社会について簡単にコメントさせていただきます。

去る沖縄戦の米軍上陸から80年。それ以来起こり続ける、米兵による強姦事件は未だ止むことはありません。

軍隊による沖縄女性への強姦事件は、はじめて記録に見られるのが、幕末に那覇に来航したペリー提督の部下による事件です。そして沖縄戦前年の1944年からは、駐屯した日本軍兵士による強姦事件が多発しますが、日本軍当局は相次ぐ事件に対し、「沖縄の女性は貞操観念がゆるい」とか、「沖縄の女性に誘惑されないように」など、責任を女性に押しつけました。

さらに日本軍は、「沖縄はデマ多き土地柄」として沖縄人をスパイ扱いし、それを防止するため、米軍に捕まると、女は強姦されるか米軍の「慰安婦」にされると恐怖心を煽り、その前に「玉砕」するよう命じました。沖縄の女性たちは、休日になると慰安所の前に列をつくって順番をまつ日本軍兵士を目にし、辻遊廓の女性や、朝鮮半島から連れて来られた日本軍「慰安婦」を差別的に見ていましたので、彼女たちと同類にされることはどうしても避けなければなりませんでした。そして米軍上陸を目の当たりにした女性たちのとった行動が、「集団自決」だったのです。男手のある家族ほど犠牲は大きかったと言えます。

上陸した米軍は、傷ついた住民を救助し食糧を与える一方で、次々に女性を襲いました。1945年に日米の戦争が終わったとはいえ、5年後の朝鮮戦争、1960年代初頭からはじまるベトナムへの軍事介入、北爆開始と米軍の戦争は続き、出撃基地となった沖縄では、帰還兵による残忍な戦時性暴力が復帰後まで続きました。そんななかで、「島ぐるみ」土地闘争や、いわゆる「祖国復帰」運動、「コザ騒動」など、米軍支配下の沖縄人の人権回復を求めた反米行動がありましたが、その中には、女性の人権や尊厳を守るための抗議の声はありませんでした。

現在なお、家父長制をベースにした〝伝統的家族制度〟を維持する沖縄社会では、被害に遭った女性に自己責任を問う声は少なくはありません。さらに加害者は日米地位協定によって守られて処罰されないことも多く、冨山氏のご指摘のように、まさに「暴力は日々の日常に深く根を張り、当たり前として受け止められて」いると言えます。それによって、被害にあった女性たちの訴えが封じ込められてきたといっても過言ではありません。

1960年代末から女性団体によって米軍当局や日本政府などへの抗議が行われてきましたが、メディアが取り上げることはきわめて少なく、社会運動への関心は拡がりをみせなかったように思えます。不幸な事件ではありましたが、30年前の事件をきっかけに、米軍基地問題が女性の人権の視点から問われるように



© 2026 SGRA

なったと言えます。

その後、女性たちが軍隊の構造的暴力を明らかにして、全国やアメリカ市民に沖縄の現状を訴える活動を続け、また日米地位協定の改定を求める声を上げ続けています。その中心となって活躍しているのが、次のセッションで発表される高里鈴代さんですので、冨山氏の講演と併せて、沖縄女性を取り巻く現状についてご理解を深めていただきますようお願いいたします。

これで、私のコメントを終わります。





© 2026 SGRA

# ［コメント1－2］

## ロバート・リケット

和光大学元教授

現代国家では、既存の権力関係を維持するために、被抑圧の民が主流社会から、政治的に、言語的にあらかじめ排除され、周辺化されていきます。その実態を前提として、冨山氏は言語と性差別の関係を射程に入れて、戦争に伴う性暴力を可能にする要因は私たちの日常生活と社会通念に潜み、「毎日の陳腐な営みにおいてこそ準備されるもの」であると提起しています。

その前提を裏付けるために、冨山氏はアメリカ人作家でフェミニストのレベッカ・ソルニットの体験を取り上げました。ソルニットは若い頃から現在まで、自らの日々の暮らしが戦時下の生活のようなものだと言っています。

数日前にイギリスのガーディアン紙でソルニットの意見記事を見つけました。ここで、冨山氏の論考との兼ね合いでそれを共有したいのです。ちなみにテーマは千人以上の少女を巻き込んだ億万長者J・エプスタインの人身売買ネットワークの暴露です[1]。

要約して引用すると、「レイプとは、人間間の平等の本質的な意味において民主主義そのものを否定する犯罪である。しかし、大半の強姦犯は被害者の声を軽視し、恥辱や威嚇、脅迫によって沈黙させるという社会システムに頼ることで罪を逃れる。つまり、加害者は権力を与えられ、被害者からはそれを奪うという仕組みなのである。女性の声と肢体を無効にするこの根深い不平等なシステムを永続させる社会こそがレイプ文化を形成してきた。米国の歴史の大半において、それは私たちアメリカ人のものである」とのことです。

では、ここから米軍のレイプ文化と沖縄の戦時と平時におけるジェンダーと暴力の関係に触れておきたい。1944年の春、日本の第32軍は予想される米軍の侵攻を防ぐために沖縄に派遣され、軍の工兵部隊は各島で軍事空港を建設しながら、その近辺に147カ所の慰安所をも設置しました。そうした施設の多くは民家や村の公共領域に置かれました。それで軍は各地の生活区間の真ん中に現れた慰安所を一般住民向けの恐怖による統治政策の一環として利用したのです。同年の秋から日本軍は侵入する米兵が沖縄人に性的虐待を加えるという宣伝工作を開始し、慰安所は戦闘準備の軸の一つとなりました。

先ほど宮城氏のお話にあったように、何より地上戦が始まる45年の春に、恐怖の政治は死の政治に切り替えられたのです。沖縄人は、男女を問わず、みんなが恥ずかしめられて殺されるとか、レイプされ慰安婦にとられると言われ、地上戦中、生き残ることを恐れた多くの人々が「集団自決」に仕向けられました。

1　Rebecca Solnit「ジェフリー・エプスタイン事件の隠蔽工作は米国民主主義への侮辱である」『ガーディアン』2025年9月6日。



© 2026 SGRA

沖縄戦が終結したのは1945年6月末ですが、8月半ば以降、日本政府が降伏して本土は「戦後」に入っていっても、沖縄では戦時と平時が一体となったのです。米軍とともにアメリカのアジア人蔑視とレイプ文化も上陸したのです。戦闘が収まった後も、米軍基地の周辺に強姦の恐怖は常態化してゆき、現在に至っても跡を絶たないのです。驚くことに敗戦から80年が経った今もなお、沖縄人は米軍基地のレイプ文化の恐れのもとに戦時と平時の狭間で閉じ込められ、本当の平和はまだ遠いようです。

とはいえ、先ほど宮城氏のコメントにあったように、1995年の米兵による凶悪なレイプ事件に対して、大勢の女性たちは反抗して、かつてない規模の大衆運動を切り開いたのです。その先端に立ったのは、1992年の沖縄における慰安所の地図を初めて作成した女性の歴史研究グループでした。実は、この会場にそのメンバーも参加しておられます。こうして女性の怒りを軸にした新しい基地反対運動を通じて、沖縄人は戦時の日本軍による性暴力と平時の米軍による性暴力を繋ぎ合わせて、1944年から現在に至って継続してきた軍事的性暴力を徹底的になくしていこうとしています。

午後のセッションで、その運動に深く関わって来られた高里鈴代氏のお話を期待しています。以上です。





© 2026 SGRA

# ［コメント1－3］

## グオ・リフ

筑波大学

冨山先生の今日のお話を伺って、日常に潜む暴力の継続性と、その中で言葉を取り戻すことの困難さ、そして他者との関係性に希望を生み出すというお話はとても大切なことだと思いました。

講演の中で強調されていたのは、「戦争を自分から切り離して論じる場所などない」という点です。その点を考えると、現代社会における国家の多くの動きというのは、実は戦争のマインドセットから出てきているのではないかと思いました。

例えば現在の中国では、フェミニストやクイアの活動家たちは常に境外勢力、つまり海外から来た敵対勢力と見なされていて、国家による排除または抑圧がされています。この人たちの声というのが、内側からの正当な訴えというわけではなくて、外部からの攪乱と見なされているということになっています。

実際、コロナ後に起きた白紙運動、中国の民主化をサポートする運動なのですが、その後に逮捕された若い女性の活動家たちは、当局から「あなたたちはフェミニストですか。レズビアンですか。それとも海外勢力なのですか」という質問があったと報告されています。すなわち、国家安全保障という論理が日常の市民運動をまるでスパイ行為のように扱っており、マイノリティーの主張を言葉として否認しているのです。

同性婚やLGBTQの権利要求といった、本来は個人の自由に関わるはずのセクシャリティの問題が、伝統的価値を脅かす西洋の過剰な多様性の象徴として敵視されている現状というのは、まさにその延長線上にあるのではないかと思いました。戦争化の思考様式が日常政治に浸透して、国家がジェンダーやセクシュアリティの領域にまで安全保障上の敵意を投影しているのではないかと思います。

冨山先生はまた、言葉が後景に退き、何を言っても無駄だという状況において暴力が前面にせりあがってくるという話をされましたが、この「言葉と暴力の問題」を理論的に捉えるために、あらかじめの排除ということについて触れたのだと思います。権力というのは、ある種の人々の言葉を言葉の領域からあらかじめ排除し続けることで成り立っています。そうした権力は、ある種の市民を生存可能にして、他の市民を生存不可能にするために機能していると語っておられました。

ここで重要なのは、これは単に話すなという検閲だけではなくて、話してもその内容が言葉として認められないという形で行われる排除だという点だと思います。これは、例えばトランスジェンダーの人々が望む第三者代名詞を周囲が意図的に使わない場合もそうです。自分は確かに言葉を発して訴えているのに、それは言葉として聞き届けられないという状況が生じています。つまり、その第三者



© 2026 SGRA

代名詞というのは、そもそも英語を破壊するものだとして否定され続けていくのです。これはあらかじめの排除の一例なのではないかと思います。

ここで興味深いところは、このようなトランスの代名詞をめぐる論争というのは、アメリカでは保守派によって、あまりにも行き過ぎた左翼の主張とか、ラディカルなどと攻撃されている一方で、中国ではそれは西洋の過剰な多様性の象徴として笑われていることになっています。つまり、左も右も国境も超えて、声なき者の言葉を封じ込める、このような言語的暴力が利用されているという現実は、注意する必要があるのではないかと思います。

さらに、あらかじめの排除による支配がもたらすもう一つのものに、人々の間に張り巡らされる複雑な境界線があると思います。冨山先生が先ほどおっしゃっていた通りです。私は沖縄の言葉を話しているけれど朝鮮人ではないといった例がそれです。そうした境界線の引き方ではなく別の道筋を描けないのかと冨山先生は問われました。バトラーのいうこの危険にさらされている感じ、あるいは傷つけられるかもしれないという可能性を、他者との断絶ではなく、出会いへと再設定することはできないのか、ということを私は考えております。

日常的なレベルで言えば、暴力に対する脅威、脅かされている感じを他者と共有して、それを連帯の基盤にするという発想は可能なのではないかと私は思っています。そして他者への恐怖から身を守るために境界線を引くのではなく、お互いの脆弱性、傷つけられやすさを認め合うことで、むしろ、その境界を橋渡ししていけるのではないかと思います。

クイア運動では、まさにこの言葉や表現の領域で、このような抵抗の工夫を重ねてきました。例えば、あまりいい言葉ではなかったクイアという言葉、その意味を変えたり、権威を笑い飛ばしたりするようなキャンプ的なパフォーマンスで暴力の矛先を交わしたりなどしてきた歴史があります。暴力の脅威そのものをアイロニーに晒すという態度、怖がらせの力を奪うような態度は、私たちが新たな関係性を築く上でヒントになるかもしれません。

続けて、日常的な暴力の脅威にさらされているという身体感覚は、それ自体、すでに何らかの暴力が行使されていることと地続きになっています。暴力の脅威というのは心に根を張って、恐怖と緊張が肉体に住みつきます。それは過去に受けた暴力の記憶と、これから起きるかもしれない暴力の予感が重なり合った感覚です。時間というのは過去から未来へと一直線に流れるものではなく、暴力に脅かされた感覚の中で過去と未来が今ここでせめぎ合っているという状態です。

以上のことを私自身の経験に照らしてみると、私のセクシャルマイノリティは、かつて中国でも体制に異を唱える立場でした。常にどこかで暴力にあうかも





© 2026 SGRA

しれないという漠然とした不安の中で生活をしてきました。そして、実際に暴力にあったとしても、それが暴力だとすぐに分からないかもしれないという状況が常にあって、その不可視の恐怖を感じながら生きてきました。

例えば、行政や公安による監視だったり尋問だったり、インターネット上の誹謗中傷だったりアカウントの削除だったり。そういう一見何でもない日常の延長にある出来事なのですが、積み重なれば暴力となりうるという状況なのです。

近年の政治状況の中では、フェミニズムやLGBT運動に対する弾圧が、特に中国では露骨に冷戦的なイデオロギーと結びつけられていて、私にとってその暴力の輪郭がよりはっきりしてきました。例えば西側の価値観を広めるなというようなスローガンで多様性を否定されるとき、私はまさに自分がその攻撃の対象になるのではないかと、そういう思いがありました。そういう思いがあった中で、いつ中国に戻れなくなるか分からないという不安も常にあるということです。このように、暴力の脅威にさらされる感覚というのは、時間と空間を超えて私の心と体の中に根を張っているといえるのではないかと思います。

最後に、暴力の事後性の問題について、私はこの問いをクイアな記憶の問題として考えてみたいと思います。セクシャルマイノリティのコミュニティが抱える歴史的記憶というのは、常にトラウマの上に基づいていると思っています。そして、その記憶は、他者の暴力的な言葉に対する抵抗の姿とどう関わっているのかということなのですが、最近の動向を見ると、LGBTクイア運動の内部でも痛ましい亀裂が生じています。

とりわけトランスジェンダーの人々に対する排除の動きというのは、せっかく長年の運動で克服したはずの偏見や無理解がもう一度問題となっているということです。

つまり、トランス当事者たちが経験してきた苦痛やトラウマというのは、本来ならばなかったことにされるべきではないものが、再び公然と否定される場面がちらちら見られるようになっています。これは、一度は社会に認知され、癒されつつあった傷が、また新たな形で表面化したと言えるのではないかと思います。

こうした動きの中で、トラウマだったこの記憶が、どう覚えられていくのか、消されないようにしていくために何をすればいいのかというところが、私の最も関心のあるところです。

少し長くなりましたが、私のコメントは以上とさせていただきます。



© 2026 SGRA

# 第1セッション【質疑応答】

モデレーター：洪 玧伸（沖縄大学）
回答：冨山一郎（同志社大学）

**洪 玧伸**　宮城さん、リケットさん、リフさん、コメントありがとうございました。冨山先生のお話とも重ね合わせながら、とても興味深く伺っておりました。冨山先生、いかがでしょうか。

**冨山**　宮城晴美さんのお話にあった感覚、つまり戦時期に「慰安所」ができて、それに対してあの人たちと同類に見なされてはいけない、一緒にされたくないと思うこの感覚ですよね。それはその時点では、一緒にされてしまうと殺されてしまうかもしれない、ひどいことになると思うからですが、おそらく記憶というものが持っている重要さというのは、その感覚がそのあとずっと同類とはみなされたくない記憶としてあり続けるのかどうか。それはこれからの話、すなわち暴力、その後という問題です。

講演の中で少し紹介した沖縄戦の話でも、教師から間違われないようにと教えられた時には、たぶん生徒は間違われないようにしなければと思っていたのかもしれませんが、虐殺を目の当たりにしながらこんなことを言われていたんだということを後になって思い起こすわけです。当時は身を守るための感覚だったとしても、そこには感覚をある種の歴史としてもう一度考え直す作業があるわけで、その中で、もしかすると違う可能性を見出すことができるかもしれない。そこ


© 2026 SGRA

に、おそらく歴史を考えることの重要な意味があるし、宮城さんがずっとなさってる沖縄女性史ということの、アクチュアルな意義があるのだろうと感じました。歴史は単に事実をおさえるというよりも、そうすることでもしかすると過去の経験を別の経験としてもう一度作り直すようなこともあるのではないか、宮城さんはそれを実践されているのだろうと思いました。

リケットさんの話の中に出てきたレイプ文化は、確かにアメリカ文化と言ってもいいのかもしれませんが、実はアメリカ文化というのは冷戦の中で広がるわけです。それはグローバルなミリタリズムでもあるのですが、さまざまなメディアやいろいろな媒体を介して広がり、当然日本の中にもそれは共有されていくし、かつてその地域にあったレイプ文化も、そこでもう一度承認されたりもするわけです。

そういう意味では、アメリカが悪いというよりも、戦後の冷戦の中で、戦時の性暴力と、あるいはその後も継続して日常的に展開していったレイプ文化という話がどういう関係にあるのかということを、見ていく必要があるのだと思いました。それは一つの国や地域に収まるような話ではなくて、また同じような話にしてしまう話でもなくて、それぞれの地域での歴史的な系譜をふまえながら丁寧に批判していく必要があると思います。また冷戦の中でのアメリカ文化については、豊かさだとか華やかさだとか、いろいろなものと結びついているわけですよね。そのあたりを丁寧に読み解いていくような作業が必要だと思います。

リフさんの話にもたくさん言いたいことがあって、言い過ぎると止められなくなるくらいなのですが……。例えばキャンプ的可能性とおっしゃったよね。それって、スーザン・ソンタグですよね（編注：「《キャンプ》についてのノート」(1964)）。キャンプというのはある種の秘語、あるいは仲間内だけのものとみなされてしまうものですが、そこに可能性があるわけです。実はこのセッションもそうだと思うのですが、社会や歴史や文化を論じるアカデミアの言語というか、学問というのはその逆なわけですよね。誰しもがわかる、普遍性というか。そこでわかった気になるというか。こうした知の在り方が実は問われてる、そういう側面があるかもしれないとずっと思っているのです。

もちろん、キャンプ的可能性、仲間内にしかわからないというような言い方で切り離すのではなくて、たとえある状況的、部分的な領域であってもそれが大事だというような知識のあり方が求められるのではないか。では、そういう作業をどうやって作るのかということをリフさんのコメントから考えました。

暴力とはすぐにわからないというのは本当にその通りで、実際の感覚として考えた時にはそれはすごく怖いことですよね。気が付いた時にはもう遅いというか、いろいろなものが積み重なり積み重なり、その時にはどうでもいいと思いながら、ハッと気がつくととんでもない事態を引き起こしている。そして、とんでもない事態だけをピックアップして議論することはしばしばされるのだけれども、重要なのはその積み重ねですよね。

その苦しいトラウマの記憶というものを、治療するというよりもどこかで共有するというか、少し違う形を持つということ。そこにキャンプ的な可能性があるのかもしれません。苦しいままでいいというのではなくて、その苦しさが別の形



© 2026 SGRA

に変わっていくことが一緒になるような可能性がどこかにあるのではないか、そこに先ほどの講演の最後に話した、他者との関係を丁寧につくりなおしていく運動の中で現れる集団性があるのではないかと私も思っています。

**洪 玧伸**　冨山先生、ありがとうございました。もう少し話をお聞きしたいところですが、ここで第１セッションを終わりにしたいと思います。冨山先生から「暴力、その後」の感覚や、状況における知など、非常に大切で、ボーダーレスな論点も提起されました。次の第２、第３、第４セッションでも、引き続きこのテーマについて考えていきましょう。ご参加の皆さまにも最後までおつきあいいただいて、全体として一緒に議論していきたいと思います。





© 2026 SGRA

発表２－１

# 交差する差別とジェンダー

高里鈴代
「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表

## １．基地・軍隊の島にされた沖縄

### （１）日本本土の防衛のため

日本の中で、沖縄は特異な歴史と文化を持つ地域です。1944年３月に日本陸軍第32軍が沖縄に創設されました。１年間に、軍は147カ所の慰安所を沖縄全域に設置しました。本土防衛のために沖縄を不沈空母化、全島要塞化する目的のためでした。

沖縄各地に飛行場を建設して、米軍の沖縄上陸を想定して長期持久戦のための「全島要塞化」、中国・山西省などから転戦してきた戦闘部隊が配備されました。そして、その結果、沖縄の女性に対する強姦事件が頻発しました。朝鮮、台湾、九州の女性たちが軍の輸送船で沖縄に慰安婦として配備されました。沖縄の最大規模の辻遊郭の女性たちも慰安婦に徴用されました。

### （２）米軍は沖縄をどうみていたか

1945年の３月、１年後に米軍が上陸してきましたが、上陸する前に米軍は沖縄をどう見ていたのか。米海軍作戦本部が1944年11月に編纂した「琉球列島に関する民事ハンドブック」が将校たちに配布されていました。これは文化人類学的な調査から分析されたもので、戦後の沖縄占領政策にも活用されました。

琉球人は日本人から民族的に平等だとみなされていない、琉球人はいろいろな方法で差別されている、琉球人と日本人との関係には潜在的に対立の種があり、それが政治的に利用できる要素になるかもしれないというのが民事ハンドブックの内容です。捨て石にされた沖縄なら、米軍の占領、基地建設を進めても日本国内で政治的圧力は上がらないと見ていました。



© 2026 SGRA

つまり、沖縄戦を前に米軍は基地を長期存続できる仕組みを構想していたとも言えます。沖縄は1972年に復帰の時を迎えましたが、その時に密約がありました。「一応返還はするが、米軍基地として使用できる状況を確保する」と首相の佐藤栄作は約束したのです。

沖縄返還はアメリカの議会でも問題になりました。沖縄の土地は尊いアメリカの兵士の命であがない取ったものである、なぜ返還するのかと批判が出たのです。

沖縄の地上戦では1万2,000人のアメリカ兵が亡くなっています。しかも、戦後はアメリカの税金を投入し、基地で働く人々の給料も設備費もアメリカの負担でした。

批判を受けてアメリカの国務副長官は、「だから返すのです」「あがない取った土地であり、これまでずっと投資してきた土地であり、軍事戦略的にずっと活用してきた場所である。今施政権を返還することによって、これをこれまで通り使うことができる」と言って、議会を説得したんです。

## （3）ベトナム戦争時　絞殺される女性たち

復帰前夜、ベトナム戦と基地経済の街で、ベトナム帰還兵の性的攻撃の受け皿として、米兵相手に働く女性たちの多くが締め殺される恐怖を経験しました。実際、毎年2人ないし5人が絞殺されていました。実は私は7年間、那覇市の婦人相談員をしていましたので、相談の中で多くの女性たちから直接その恐怖の体験を聞いています。

**ベトナム戦争(1965～1975)**Vietnam War (1965-1975), **米兵による絞殺死体で発見された女性たち** Women strangled to death by American soldiers

| | | | |
|---|---|---|---|
| 1967. | 1<br>4<br>4<br>1<br>1 | 32歳ホステスが１８歳の海兵隊員に絞殺、全裸で発見される（金武村）32 y/o hostess, strangled by an 18 year old marine, found completely naked<br>34歳のホステス米兵に強姦、絞殺される（コザ市）34 y/o hostess, raped by an American soldier, strangled<br>ホステスが間借り先で米兵にナイフで刺され死亡する（コザ市）Hostess stabbed and killed by an American soldier<br>20歳のホステス、自宅で就寝中に米兵にハンマーで殴られ死亡（金武村）20 y/o hostess, hit and killed with a hammer by a US solder while sleeping | 重労働35年の判決 Sentenced to 35 years of hard labor<br>不明 Unknown<br>不明 Unknown<br>迷宮入りUnsolved |
| 1968. | 3<br>5<br>5<br>6 | 牧港補給基地勤務のメイド、米軍将校女子寮風呂場で絞殺される（浦添村）Maid strangled to death in the bathroom of a US military officer's women's dormitory.<br>52歳の主婦、自宅前でミサイル基地所属兵に強姦、殺害される（読谷村）52 y/o raped by solder working at missile base and killed in front of home<br>45歳の女性が帰宅途中、海岸で米兵に強姦、殺害される（読谷村）45 y/o woman raped by a marine on the way home, killed<br>23歳のホステス、海兵隊ＭＰに強姦される。短銃で殴られ,重体（宜野座村） 23 y/o hostess, raped by marine, hit with handgun and left with serious injuries | 迷宮入り Unsolved<br>沖縄警察。終身刑<br>逮捕後不明 Unknown after arrest<br>訴えず。No case |
| 1969. | 2<br>2<br>2<br>3<br>1<br>1 | 21歳のホステス、砲兵連隊二等兵に絞殺、全裸死体で発見される。（コザ市）21 y/o hostess strangled to death by an artillery regiment private, body found naked<br>19歳の女性、自室で、牧港補給基地所属二等兵に絞殺される（コザ市） 19 y/o woman strangled to death in her room by a private<br>20歳の女性、第15歩兵隊所属の米兵に絞殺される（コザ市） 20 y/o woman strangled to death by a US soldier<br>20歳ホステスが死体で発見。司法解剖結果、米兵の犯行と断定（那覇市）20 y/o hostess' body found, autopsy determined crime committed by US soldier<br>25歳の女性、路上で米兵に強姦される。抵抗しナイフで傷つけえられる。25 y/o woman raped by a US solder on the street. Injured with a knife when she tried to resist. | 逮捕後不明 Unknown after arrest<br>不明 Unknown<br>CIDに検挙 Arrested by CID<br>迷宮入り Unsolved<br>俸給２ヶ月分罰金 2 months' salary fine |
| 1970. | 5 | 女子高校生、軍曹に襲われ、腹部、頭などメッタ刺しにされる。強姦未遂。High school girl. Attacked by a sergeant and stabbed in the stomach, head, and other parts of her body. Attempted rape. | 懲役３年,降等 3 years jail, demoted |
| 1971. | 4<br>5 | 23歳のホステスの全裸死体が墓地で見つかる。海兵隊伍長逮捕（宜野湾市）23 y/o hostess' body found in graveyard, marine captain arrested.<br>41歳の女性が18歳の海兵隊員にドライバーで刺殺される。指紋体液の血液型などの証拠で逮捕（金武村）41 y/o woman stabbed to death by an 18-year-old Marine with a screwdriver. He was arrested based on fingerprints, bodily fluids, and blood type. | 証拠不十分で無罪 Not guilty, insufficient evidence<br>不明。本人は否認 Unknown, crime denied |

スライド１





© 2026 SGRA

多額の前借金による強制管理売春が肥大化。女性はドルを稼ぐ最前線に送り出され、沖縄社会の根底を支えました。1969年３月の警察の調査によると、7,400人の女性たちが売買春関連で働いていました。「ホテル、Ａサインバー、旅館、洋裁店等、基地経済は女性たちに大きく依存している。女性たちの年間の稼ぎは、およそ4,590万ドル。これは、沖縄の基幹産業であるサトウキビ（4,350万ドル）やパイナップル産業（1,700万ドル）を凌ぐものだ。沖縄の最大の産業とも言えた」と、琉球新報記者の島袋浩は記しています。

しかし、絞殺された女性のために抗議集会、県民大会は開催されませんでした。

スライド１はベトナム戦争時（1965～1975）に米兵による絞殺死体で発見された女性たちの年表です。これは私たちが作成した年表からまとめたものです。ベトナム戦争時の米兵に絞殺された女性のために抗議集会が開催されなかったのは、米兵相手に働く女性たちに対する蔑視感があったからでした。

## （４）復帰・施政権返還後も変わらない基地・軍隊の島

1972年に復帰して施政権は返還されましたが、返還後も現在に至るまで沖縄は基地・軍隊の島です。全国面積の0.6％の沖縄に、在日米軍基地の70.3％が集中し、沖縄本島の15％を占有しています（スライド２／ p36）。そして、在沖米軍として、軍人が2万5,000人、軍属・家族2万人が沖縄に滞在しています。基地から派生する爆音、演習事故、環境破壊・汚染、米兵による事故・事件、女性・子どもへの性暴力、人権侵害が問題になっています。

上陸直後からすさましいまでの性暴力事件が続いたのですが、告発することは難しい状況でした。これは、日米地位協定の不平等さと日本の刑法が家父長制の中で加害者を優利にする差別的刑法によるものです。1907年から存在する加害者に優利な刑法（強姦罪）で、警察に告発しても、被害者の落ち度やどこまで抵抗したかが警察から追及され、被害者自身が告発を止めてしまうことが圧倒的だったのです。

1995年の３米兵による12歳の少女のレイプ事件が起きたとき、8万5,000人の県民が集まった大抗議集会が行われました。その集まった数の多さに日米両政府は驚きました。それで、「沖縄に関する特別行動委員会（SACO）」を立ち上げて、SACO合意を発表しました。その内容は、沖縄の負担軽減と日米安保同盟関係の強化です。普天間基地の辺野古への移設が決まり、北部訓練センターの過半が返還されましたが、2025年の現在は6ヘリパッド建設とオスプレイ機能配備が行われ、米軍の基地機能は強化されて、軍隊の撤退、規模削減は全くありません。辺野古新基地建設を強行しています。

私たちは、1996年11月に「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」を結成して、県議会前で12日間座り込みを続けました。米軍基地問題は、土地問題、爆音、演習事故と環境破壊等と、問題が山積みです。駐留する米兵による性暴力は基地問題ではなく個人の犯罪という位置づけでしたが、私たちは、基地と軍隊はセットであると指摘しました。



© 2026 SGRA

**「復帰」・「施政権返還」後も、変わらない 基地・軍隊の島**

Even after the "reversion" and "reversion of administrative rights," the island remains a base and military haven

- ➢全国面積の0.6%に、在日米軍基地の70.3%が沖縄本島の15%を占有。
- ➢在沖米軍： 軍人：25,000人、軍属・家族：20,000人
- ➢基地から派生する爆音、演習事故、環境破壊・汚染
- ➢米兵による事故事件、女性、子どもへの性暴力、人権侵害

- On just 0.6% of Japan's total land area, 70.3% of all U.S. military bases in Japan occupy 15% of Okinawa's main island.
- **U.S. Forces in Okinawa:** Military personnel: 25,000
  Civilian employees and family members: 20,000
- From the bases stem deafening noise, training accidents, environmental destruction, and pollution.
- **Accidents and incidents involving U.S. soldiers include sexual violence against women and children, as well as human rights violations.**

スライド２

ハワイの米軍太平洋司令部のリチャード・マッキー司令官が、少女をレイプした３米兵について、「あいつらバカだ。レンタカーを借りる金で女が買えた」と発言したことが、米国上下院議会で問題になり、女性差別発言をしたとして彼は更迭されました。

## ２．脱軍事化・脱植民地化ネットワークの構築

このような状況に抗して、私たちは米国の女性と米軍基地を抱える国や地域の女性たちとのネットワークを構築しています。

1996年に13人の女性で「アメリカ・ピース・キャラバン」を組織して、２月に２週間の計画で渡米し、アメリカの市民・女性へ沖縄の実情を訴えました（スライド３）。訪問先は、サンフランシスコ、ワシントン、ニューヨーク、ハワイです。

そこで、五つの要請を出しました。①過去50年にわたる米軍の女性に対する犯罪の総点検を求める、②海兵隊の確実な撤退、削減計画の着手を求める、③女性、子どもの人権の尊重に留意した人権教育の実施を求める、④日米安保、日米地位協定の見直しには、北京女性会議の「行動綱領」との整合性を図る、⑤沖縄の基地・軍隊の実情把握、調査のための専門家の派遣を求める、です。

また、『性差別主義と戦争システム』の著者であるベティ・リヤドン教授のコロンビア大学にも呼ばれていきました。リヤドン教授はコロンビア大学平和教育センターの創設者です。グローバル・イシューのゼミに呼ばれ、次のようなことを話し合いました。





© 2026 SGRA

スライド３

「紛争下の女性に対する暴力はひどい、ある意味容認されている、構造的に継続されてきた。沖縄の米軍は占領から27年で撤去するはずだったのに、なぜ今まで残っているのか。その地域の人々の安全や基本的人権の侵害について解明が必要である」

こうした私たちの「アメリカ・ピース・キャラバン」に対する応答として、アメリカの女性から提案がありました。韓国やフィリピンの状況はある程度の資料があるし、交流もしていた。けれども、沖縄に関しては全く何もなかった。だから、沖縄で「軍隊・人権・女性と子ども」をテーマに、韓国やフィリピンの女性たちも招待して、ネットワーク会議を始めませんか、という提案です。

私たちはそれを受けて、1997年５月に沖縄でフィリピン・韓国・米国、日本・沖縄が参加する「東アジア・アメリカ軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」を立ち上げました。そして各国の女性たちの歴史、経験を聴き合い、その共通性に驚きました。社会・政治構造、支配構造が見え、親密さが増したのです。現状を変えていく希望が見えてきました。

2002年には韓国で、2004年にはフィリピンで会議を開催し、2007年のサンフランシスコ会議の時には、「軍事主義に抗し、“いのちの文化”を創造する」というタイトルで集まりました。そのとき参加をしていた日系の女性の映画監督の人が提案して、『LIVING ALONG THE FENCELINE』というタイトルの映画を作りました。米軍基地と隣り合わせに住む７人の女性の物語です。彼女たちは、持ち前の知恵とリーダーシップと優しさで、その土地とそこに住む人々への愛情と尊敬、未来を担う次世代への希望を原動力にそれぞれの地域で活動しています。

映画の舞台は、サンアントニオ（テキサス州）、ビエケス（プエルトリコ）、ハワイ、グアム、沖縄、韓国、フィリピンです。それぞれの地域で米軍基地が生み



© 2026 SGRA

出したのは、環境汚染、売買春、暴力、地域と文化への冒涜でした。そこでの彼女たちの闘い、喪失、勇気を通じて、この状況を変えていこうとするコミュニティの物語が描かれています。この映画のコピーは私も持ってますので、必要でしたらご覧になってください。

2009年にはグアムで会議がもたれました。テーマは「抵抗・回復・人間の尊重」です。1898年にスペインとの戦争で勝利したアメリカは、フィリピン、グアム、プエルトリコ、ハワイを奪取しました。それを示すパリ条約というのがあるのですが、グアムでの会議ではそのパリ条約のコピーをビリビリ破き、燃やして灰にして、小さな筏に乗せて水葬しました。このパフォーマンスを通じて、私たちの精神に深く食い込んでいる意識をはぎ取り、脱軍事化と脱植民地化、植民地支配からの解放を願ったのです。

## 3．真の安全保障を！

米軍基地が地域社会との境界として敷いた金網のフェンスとゲートで、米兵士とその家族の安全で快適な生活は保障されています。沖縄の人々がオレンジラインを超えると逮捕されます。そして犯罪は圧倒的に基地の外で起こっています。

日本の女性は性暴力、性被害を訴えない。これは長年駐留している米兵たちに共有された意識です。1995年に12歳の少女がレイプされた事件のときも加害者の3米兵は、日本の女性はレイプされても訴えない、逮捕されない兵士たちがたくさんいる、日本の女性は銃やナイフを持たないから襲っても大丈夫だ、面通しにあっても特定できないなどと話していたのです。

2012年10月の在米海軍兵集団強姦事件でも、加害者たちは捕まるとは思っていませんでした。空中給油の演習のためにテキサス州から来た7人の兵士は、横田基地から沖縄を経てグアムに行く予定で、沖縄にはたった2日間しか滞在しませんでした。その米兵たちがコンビニで買い物をしている女性に声をかけて無視され、追跡して彼女の住んでいるマンションの1階の駐車場で集団強姦をしました。翌朝早朝にグアムに移動する予定だったので「捕まるとは思わなかった」と言うのです。

2016年の4月には、20歳の女性がジョギング中にレイプされて殺害されました。裁判を傍聴しましたが、加害者は黙秘権を使って裁判中は沈黙を貫きました。ところが彼は英字新聞のインタビューを受けて、日本の女性はレイプされても訴えない、慣習と偏見と恥の意識で訴えない。日本の法制度では女性暴行は親告罪で、被害者による通報も通報率も低い、逮捕されることは全く心配していなかったと言っているのです。

それはなぜかというと、日本の法律のせいなのです。2017年7月に110年ぶりにようやく強姦罪が改正されて、親告罪が削除されました。強姦罪は家父長制度下の加害者に有利な法律でした。2023年7月には罪名が「不同意性交罪」に変更され、対象年齢は13歳から16歳に引き上げられています。

2012年10月の海軍兵士集団強姦事件に抗議した私たちは、「NO RAPE・NO





© 2026 SGRA

OSPREY・NO US BASES」を掲げて抗議集会を行いました。女性に対する性暴力は構造的な暴力です。兵士の性暴力は個々の兵士の犯罪ではなく、軍隊の本質、殺傷と破壊の訓練で刷り込まれた意識であり、植民地差別や性差別に深くつながっています。沖縄への集中配備は構造的に暴力として捉えることができます。朝鮮・ベトナム・湾岸・アフガン・イラクの各戦争へ直結する派兵基地としての全機能は、女性への性暴力、人権侵害に深くつながっています。

今年2025年5月には、「安全な生活のためのフェミニズムの応答と実践：戦争、安全保障、基地」というテーマで、韓国・ソウルで第11回のネットワーク会議がもたれました。

沖縄・アメリカ・フィリピン・韓国、プエルトリコ・ハワイ・グアム・マーシャル諸島・オーストラリアなどと日本が参加して、ジェンダーの視点から、真の安全保障を求めて、脱軍事化と脱植民地支配を目指しています。暴力の文化は、女性、子ども、高齢者へ、環境へ大きく影響を与えています。先住民族社会を破壊し、地球温暖化を進めています。

私たちのこのネットワーク会議は、今年で28年になります。今、改めて、国や地域に生きる私たちが国際的なネットワークを深め、軍事主義に抗し、武力によらない平和と正義を達成するために、グローバルな活動を展開していきたいと思っています。

これで私の報告は終わります。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

発表2－2

# 継承と掘り起こし：
## インドネシアにおけるジェンダー化された暴力

インタン・パラマディタ
マッコーリー大学

［原文は英語、翻訳：川崎 剛］



## 1．はじめに

### （1）つきまとう問題

第5回アジア文化対話にお招きいただいた渥美財団に感謝します。終わらない暴力につきまとわれることの意味を知る場所として沖縄を訪れその歴史を知ることができることは光栄です。

まず私たちにつきまとう共通の問題から始めましょう。私たちは何を継承するのでしょうか。何が未だに埋葬されずに残されているのでしょうか。終わらない暴力の影に直面する現代インドネシアのフェミニストたちを突き動かしている問題です。「Waris（相続）」と墓掘り人というからみあうメタファー（比喩）を通して、インドネシアのフェミニストは、現在の政治行動の基礎として、切断されたフェミニストの系譜を意図的に再建する「系譜的行動主義」を演じています。

「ワリス（Waris）」はアラビア語で「相続」です。相続は決して中立ではありません。財産や血統だけでなく、傷や沈黙、そして抹消の伝達でもあります。墓堀人は労働、発掘、服喪の形象化です。墓掘り人は、何が埋められてきたのか見つけるために、歴史の土壌や文書アーカイブ、沈黙といったものを掘り起こすのです。私の発表は、現代インドネシアのフェミニストがいかに未解決の暴力と抹消の遺産に向き合っているか、「女性思想学校（Sekolah Pemikiran Perempuan：SPP）」とその年次祭典「ETALASE Pemikiran Perempuan」が行ってきた研究を通して検討します。本日の発表は活動の成果の一部です。

### （2）1965年の破壊

今述べた比喩の緊急性を理解するためには、私たちは1965年というインドネ


© 2026 SGRA

シア史で深刻な破壊を刻んだ年に戻る必要があります。クーデターの疑いの後、大衆的な反共暴力の中で50万人が殺害されました。組織的な標的のひとつとなったのが、インドネシア女性運動ゲルワニ（Gerwani: Gerakan Wanita Indonesia）でした。ゲルワニはインドネシアの主要な女性組織で、1965年までに300万人に成長していました。インドネシア共産党（PKI）と提携しており、労働問題や家族問題、識字や反帝国主義の問題について活動していました。しかし1965年以後、ゲルワニは暴力的に解散させられました。指導者やメンバーは投獄されレイプされ、拷問されたり沈黙を強いられたりしました。ゲルワニの女性たちについての国家的プロパガンダの嘘は、参加した女性たちを不道徳とか、暴力的とか「不自然（unnatural）」などと悪魔化するものでした。

ゲルワニが消滅させられたことは、インドネシア・フェミニズムの系譜に深い分裂を生じさせました。1965年の大量虐殺は肉体を殺しただけでなく、フェミニストの知的伝統も抹殺したのです。現代のフェミニストは、二重の暴力にさらされています。大量虐殺による身体的暴力、レイプ、左翼女性の投獄といった暴力と、インドネシアの歴史文献から女性思想家を組織的に抹消する隠れた暴力です。社会主義者によるフェミニズムは大衆の言説から消滅しました。スハルトの「新秩序」体制下で、イブ主義（ibuismまたは母性主義motherism）と呼ばれる新しい国家イデオロギーが女性の価値を家庭的な役割に整列させ、女性たちが男性たちの母や従属物であることを制度化してしまいました。女性の急進的な政治思想は危険とみなされました。「新秩序」体制は単純にゲルワニを沈黙させたのではありません。彼らを粗暴な去勢された女性とする集団的記憶を再構築して、そうしたイメージを国民的意識に埋め込みました。有名なプロパガンダ映画「*Pengkhianatan G30S/PKI*（1984）」を通して。

現代のフェミニストは破壊された系図を継承しています。フェミニストは沈黙、不在、ゆがんだイメージを継承しています。彼らは抹消された母たちの娘たちなのです。私たちは抹消された母たちの子どもです。未解決のままのジェンダーに基づく暴力を継承するとはどういうことでしょうか。

## 2．女性思想学校（SPP）

### （1）対抗するアーカイブをつくる

こうした背景に対して2020年、私はインドネシアの列島横断的なフェミニスト集団「女性思想学校（Sekolah Pemikiran Perempuan：SPP）」を、何人かの他のフェミニストの同僚たちと共同設立しました。SPPは、歴史を回復し女性の知的遺産を再建しようという他のイニシアティブとともに起こったのです。Ruang Perempuan dan Tulisan（女性のための執筆空間）は、男性が独占している文学的聖典に挑戦するために、歴史から消されたり排除されたりした女性たちの言説を広げました。RUAS（Ruang Arsip dan Sejarah Perempuan）は、フェミニストのアーカイブをつくり、公式の国民的言説から意図的に排除された



© 2026 SGRA

女性の歴史を文書に残しました。

SPPが目指すのは、列島のどこでも女性が知の正当な生産者として位置づけられることによって、家父長的、植民地主義的、資本主義的知的生産に介入することです。これが私たちの焦点です。なぜなら、女性の知識はしばしば国と父権主義的社会によって無価値にされ、今朝の冨山一郎先生の基調講演で聞いたように有意義な議論というより、騒音とみなされる。他の活動では消された歴史の回復と文書化に焦点があたるなか、SPPは過去の沈黙と現在の声をリンクさせて集団的学びやフェミニストの教育法の列島横断的プロジェクトに拡大させています。

SPPには二つの主要プログラムがあります。第1にフェミニスト学校：インドネシア列島を横断してジャワ、カリマンタン、スラウェシ、東西ヌサ・テンガラ、パプア各島からの女性とクイアの人々が参加する20週のオンライン学級です。参加者には、作家、運動家、移民労働者、クイアや障害者の活動家、そしてイスラム教徒や教会組織家などが含まれています。

第2に、「ETALASE Pemikiran Perempuan」フェスティバル。文字通りでは「女性の思想の陳列窓」です。私たちは“etalase”（陳列窓）という言葉が、通常、商品や女性を陳列するものに関連付く陳列窓という言葉であることに異議を唱えて、これをフェミニスト思想のプラットフォームに転換します。ETALASEはフェミニスト学校の参加者によって計画され共同で創造されました。SPPにとって、学校は実験室であり、フェスティバルは集団的な結果です。このサイクルを通して、私たちは諸島と文化、世代を超えた新しい系譜をつくり、破壊されたフェミニストの系譜を再生する系譜的行動主義を実践します。

## （2）ワリス：継承をめぐる政治

ここでお話しする二つの概念のうち最初のワリス（相続）は、SPPの政治的枠組みを特徴付けます。ワリスは、家父長制的な財産の移転という概念から、トラウマの認識と集団的癒やしのフェミニスト的実践へと根本的に再定義しました。SPPにとって、ワリスは誰が継承するか、何が継承に値すると考えられるのか、継承は権力メカニズムとしてどう機能するかという問題です。

2025年、SPPはワリスについてマニフェスト（宣言）を発表しました。個人、フェミニスト、クイア・グループが、財産ではなく政治闘争として「継承」をつくりなおす。マニフェストは、相続の政治的性質について重要な主張で始まります。

“Mewariskan dan menjadi ahli waris adalah perihal politis. Waris menentukan siapa tuan, siapa jadi bayangan, siapa yang disingkirkan dari garis hak”

（相続することと相続者になることは政治的事項である。相続は誰が主人になるか、誰が影になるか、だれが権利のラインから除外されるか決定する。）この冒頭の文章は一瞥で相続が単なる家族贈与ではなく力関係のシステムであることを明らかにしました。

マニフェストのコアな宣言部分では、関係は継承されたトラウマの承認に変換





© 2026 SGRA

されます。

“Kami adalah anak-anak dari luka yang belum kering. Menjadi ahli waris, bagi kami, adalah menyelami trauma leluhur yang terus mengalir dalam darah, dilukai oleh kuasa yang menggerogoti tubuh dan tanah”

（私たちは癒えぬ傷を持つ持つ子どもである。継承者であるとは、血に流れる祖先のトラウマに身を投じ、身体と土地をむしばむ権力によって傷つけられたものを受け止めることである。）

この見方は決定的に重要です。なぜならこれは歴史的トラウマから「前進しろ」という新自由主義的な要求を拒絶し、その代わりに理解し抵抗する道として継承（相続）された傷にさらに深く飛び込んでいく必要性を主張しているからです。

SPPのワリス（継承）概念は植民地主義的かつ資本主義的な「相続」の論理に直面します。マニフェストは、国がいかに植民地主義的な世界観を継承し、広めているか批判しています。

“Negara mewariskan cara pandang pembangunan yang berakar pada watak kolonialisme dan kapitalisme: akumulasi kekayaan melalui eksploitasi manusia dan alam, memutus ikatan dan relasi yang saling menghargai”

（国は植民地主義かつ資本主義に根ざす開発のパースペクティブを継承する。それは、人間と自然の搾取を通して富を蓄積し、きずなと相互信頼関係を断ち切る。）

現代のフェミニストは、歴史的トラウマを継承するだけでなく、暴力と抑圧、資本主義をかざす同じ体制に起因する自然破壊も継承します。

“Kami adalah ahli waris penuh luka sejarah, kebohongan, trauma, kemiskinan dan Ibu Bumi yang telah hancur”

（私たちはたくさんの歴史の傷、嘘、トラウマ、貧困、破壊された母なる大地の相続人である。）

ワリスは他人なら拒絶するものをあえて継承するという選択も意味します。マニフェストによると

“Kami ingin mewarisi segala yang dianggap sebagai aib dalam sejarah versi penguasa dan tidak pernah diselesaikan dengan benar”

（私たちは支配者側の歴史の中で恥ずかしいと考えられる決して適切に解決されなかったすべてを継承したい。）

これは継承の論理の根本的な転換を表します。恥ずかしい人々、消された人々、無価値とみなされる人々をフェミニストの継承として主張することによって。

マニフェストは、パプアからロテ、そして都会の中心まで、インドネシア列島を横断してさまざまなトラウマの継承を例示する多様な声を含んでいます。ワリスが国家暴力と植民地による抹殺という点では共通のつながりを維持しながら、いかに民族、性別、地域で異なって実施されるか例示しながら。クイアやトランスジェンダーの個人にとっては、マニフェストはさらなる拒絶の層を継承することを明言しています。



© 2026 SGRA

“Pada kami (kwir),warisan itu nyata terasa. Perasaan inferior, tak dilihat, tak didengar, tak dianggap, tak dicintai—bising dan ramai”

（私たち（クイアの人々）には、継承が実際に感じられた。劣等とされ、見られておらず、聞かれてもいない、考慮されておらず、愛されてもいない、そしてうるさくぎっしり詰まったこれらの感覚の継承が。）

SPPの政治プロジェクトにとって最も重要なことは、マニフェストは犠牲者であることではなく、転換に関して結論にしていることである。

“Karena warisan bukan kutukan, tapi api yang kami nyalakan kembali untuk membakar segala yang tak adil, dan menerangi jalan pulang ke pintu kesetaraan”

（なぜなら継承は呪いではなく、私たちが不正義なものすべてを燃やし、平等への道を灯すために着けた火だから。）重荷として継承されたトラウマを政治的行動の燃料に転換するのです。

## （3）墓掘り人：フェミニスト的発掘の方法論

二つのコンセプトのうち二番目は墓掘りですが、これはフェミニスト歴史家が埋もれたフェミニストの声を掘り起こす行為を指す比喩です。ワリスの継承者の相方として登場します。継承がフェミニストのいう人々を指すなら墓掘りは埋もれたものをいかに積極的に発掘するかを表します。ワリスと墓掘り人の両者は、埋もれたままにすることを拒否し、傷を受け継ぎ、その傷を掘り起こしの道具に転換するという完全な実践をするのです。

「墓掘り（gali kubur）（掘り起こし）」の概念は、SPPの協力者で歴史家でもあるRAUS（女性のアーカイブと歴史）のIta Fatia Nadiaイタ・ファティア・ナディア（女性のアーカイブと歴史）によって最初に提唱されました。歴史家であり運動家の実践はlaku gali kubur（墓掘りの営み）と描写しました。歴史家でRUASとSPP両組織のメンバーであるAstrid Rezaアストリッド・レザは、自分の方法論的進化を述べています。「最初に大学で歴史の研究に入ったときに、私は歴史家の仕事は探偵が調査して手がかりを見つけるようなものだと想像していました。しかし今や私たちの仕事は墓掘り人のようなものだとわかりました」。この変化は、すでにある手がかりを探すことから、意図的に埋められたものを積極的に掘り起こすことへの根本的な転換を表現しています。

墓掘り（掘り起こし）は、ワリスとして継承された沈黙を積極的な法医学的調査に変化させます。アストリッドと彼女の同僚たちは、散らばった文書、手書きの伝記、未完成の詩稿、色あせた写真、レシピ、「革命のための子どもたち」向けに書かれた児童書などの断片をもとに作業する「記憶の法医学的調査」に従事します。

この法医学的な次元においてフェミニスト歴史家は、毀損された文書の消極的受け手ではなく、過去の女性たちの精神を呼び戻す積極的な探求者として位置づけられます。過去の女性たちはとてもわずかな限られたメディアを通して私たちに語り





© 2026 SGRA

かけるのです。世代を超える想像力と感情移入を必要とする読解であるのです。

墓掘りはRUAS、Ruang Perempuan dan Tulisan、SPPなど複数のフェミニストのネットワークが関わる集団的な作業で、国の枠組みの外部で運営される対抗的なアーカイブをつくります。集団的であることは、ワリスのマニフェストに書かれた継承の集団的特性を反映させていますが、そこではトラウマと癒やしが個人の経験よりも共有されます。

## 3．ETALASE 2025：継承と掘り起こしの営み

2025年のETALASEフェスティバルにおける三つのイベントがいかにフェミニストたちが継承者であり掘り起こす人でもあると自認しているか説明しています。

### （1）Riwayatmu Puan（女性の歴史）

Riwayatmu Puan は、達成してきたことを祝い、考えをシェアし、歴史的記録からの女性の除外を集団として拒否するフォーラムです。方法として、世代を超えて演じたり語ったりする方法で、「Estafet pengetahuan lintas generasi（世代間の知識リレー）」を創造します。2025年、Umi Sardjonoウミ・サルジョノ（反植民地運動の左翼活動家、フェミニスト歴史家・哲学者Ruth Indiah Rahayuルス・インディア・ラハユの再話）、オエイ・シアン・ヨクOei Sian Yok（芸術批評家、文化運動家ブリギッタ・イサベラBrigitta Isabellaの再創造）、サロミ・ランブ・イルSalomi Rambu Iru（スンバの反暴力提唱者、マルサ・ヘビMartha Hebiとユスティナ・ダマ・ディアYustina Dama Diaの回顧）などの物語をフィーチャーしました（スライド1）。

Umi Sardjonoの話は、現代インドネシアのフェミニストが取り組まねばならない掘り起こし（継承）の多様な層を表現しています。1923年スハルティ生まれ。彼女は1948年インドネシアで最初の国際婦人年の式典を開催し、ゲルワニ

スライド1

**Riwayatmu Puan (Women's Stories)**
**Riwayatmu Puan（女性たちの物語）**

- Stories of Umi Sardjono, Oei Sian Yok, Salomi Rambu Iru
- Storytelling as gravedigging practice
- Ruth Indiah Rahayu's act of narrating Umi's erased history

- ウミ・サルジョノ、オエイ・シアン・ヨク、サロミ・ランブ・イルの物語
- ストーリーテリングは「墓掘り」の実践として行われる
- ルース・インディア・ラハユによる、ウミの抹消された歴史の語り



© 2026 SGRA

を率い、議会では差別的法律に挑戦しました。彼女は、説明もなしに14年間投獄され、その後のパラノイア、歴史から名前を消されるなど、組織的な抹消に苦しみました。彼女の墓石にはその名前で戦った「Umi Sardjono」ではなく、単に「Suharti Sumo Wiryo」と刻まれています。

Umiの人生を物語るRuth Indiah Rahayuルース・インディア・ラハウは墓掘り人（掘り起こし者）の方法論を例証しています。彼女は事実だけでなく感情の次元まで発掘して、Umiの葬儀に急行したことや隣人のNenek Hasanahネネク・ハサナが、いかに（スハルト政権の）「新秩序」に抗してUmiを守ったか、いかに友情が思想的な相違を超越するかを描写しています。このパネルは女性の物語を語ることが単に思い出すことではないことを示しています。それは継承の行為であり、消された名前や感情、闘いを思い出すことであり、そうすることで彼らはフェミニストの未来を鼓舞し続けるのです。物語を話すことは、責任をもって亡霊とともに生きることを学び、集合的記憶の中で抵抗し続けることを具体化するのです。

## （2）Bongkar Kata（言葉の解体、または分解された言葉）

Bongkar Kataは、権力、トラウマ、バイアスの歴史に共通かつ包含的に表れる言葉を解体する短い講義の空間です。2025年に四つの単語が取り出されました（スライド2）。Gali Kubur（墓掘り）は、アストリッド・レザによって明るみに出されました。文字通りでもあり比喩的でもある抵抗です。；Bungkam（黙らされた）は、パプアのLigia Judith Giayリジア・ジュディス・ギヤイが掘り起こしました。Merdeka（自由）はZely Ariane（ゼリー・アリアネ）が探求したもの、そしてRevolusi（革命）は、Ishvara Devantiイシュバラ・デバンティによって検証されました。

パネルはいかに家父長制のナラティブが言語それ自体に埋め込まれていて、重要なフェミニストの仕事から必要な言葉を”bongkar kata”（解体）しているか

スライド2

**Bongkar Kata (Unpacking Words)**
**Bongkar Kata（言葉の解体）**

- Words as sites of power & trauma
- 2025 words: Revolusi (revolution), Bungkam (silence), Merdeka (freedom), Gali Kubur (gravedigging)
- Astrid Reza: “makam tanpa sejarah” (graves without history)

・言葉 ― 権力とトラウマの場として
・2025年のキーワードRevolusi（革命）Bungkam（沈黙）
Merdeka（自由）Gali Kubur（墓掘り）
・アストリッド・レザ：「makam tanpa sejarah（歴史のない墓）」





© 2026 SGRA

を実証します。言葉の再生によって、フェミニストたちは知的不服従に従事し、言語が支配の現場であることを認識するのです。言葉を掘り深めていくことは何世紀にもわたる侮辱と恥辱を掘り起こすことです。

フェミニストの方法論としてアストリッド・レザが取り出した「Gali Kubur（墓掘り）」は、このアプローチを実証します。彼女はRUASのイタ・ファティア・ナディア（Ita Fatia Nadia）が、墓掘りが単に比喩ではなく具体的なフェミニストの方法論であると言ったことを承認しました。「あのとき、破壊が起こっていたのです。そして今日のわれわれの仕事は、彼らが埋めたものを改めて掘り返すことです。」

アストリッドは、ポスト1965年時代は、墓の掘り起こしが要求される最も深刻な歴史的断絶だと述べています。「女性史の文脈のひとつで、最も暗く、最も深い歴史的破裂が1965年10月1日に始まった」。アストリッドは、いかにゲルワニのメンバーが肉体的ばかりでなく、言説的に埋められたかを説明します。「記憶に値しないと考えられ、歴史的記録から消された」。概念であったmakam tanpa sejarah（歴史のない墓）が現実に表れます。「名前のない古い墓の前に立つ私たちを想像してほしい。墓石はなく、誰も花を手向けない。巡礼もない。私たちは誰がそこに埋葬されているのか知らない。誰の墓かなんて誰も尋ねさえしない」。

重要なことは、墓掘りは方法論を超えて精神的、政治的な実践に拡大するのです。墓を掘ることが「肉体的な労働だけではなく精神的、社会的行為」になっているToraja Rambu Solo文化の描写を引きながら、アストリッドは「フェミニストの墓掘りは、過去と未来、生と死という欧米の線的な分割を拒否する」と論じます。この精神的な次元は直接にいかにワリスが働くかということに関連します。両方とも時間が直線ではなく循環し、先祖の存在は現在の行動を導くことを理解しています。

発表でアストリッドは、忘れられた女性の名前を呼ぶ「mantra pemanggil（マントラを呼び出す）」儀式に参加者を導きました。「彼女たちは先達です。祖母や母たちです。記録者であり、戦士であり、動かす運搬人たちです。知識ある植物学者であり、物語の織り手です」。アストリッドが一人一人の女性の名前を呼ぶと、参加者がそれを繰り返し、墓掘りが礼拝の実践であることを証明します。この呼び出しの実践は亡霊を呼び出すフェミニストの儀式として機能します（編注：当日は実際の儀式の様子をビデオ映像でも紹介）。

## （3）Meramban Pengetahuan（知識を求めて）

ETALASEフェスティバルは墓地を訪れる活動を含んでいます。参加者はジョクジャカルタのTaman Wijaya Brata墓地を訪れました（スライド3／p48）。この活動はMeramban（食料を求めて歩く）と呼ばれます。知識を集めることは公式の文書の外側で行われるべきだという示唆です。Merambanは、インスティチューション（慣習や制度）からしたたり落ちてこないだけでなく、コミュニティーを横断して地下茎のように成長するというSPPの見方を反映しています。



© 2026 SGRA

スライド 3

巡礼で参加者は、功績が主流の歴史的叙述からほとんど忘れられてきた女性教育者や活動家の先駆者たちの墓地へ案内されます。Taman Siswa墓地では、巡礼者はSutartinah Sasraningrat／Nyi Hadjar Dewantara（1890－1971）の墓へ行きます。彼らはTaman Siswa＆Wanita Taman Siswaの創始者で、反植民地の幼稚園教育の先駆者で、1928年のジョクジャカルタ女性会議の主唱者です。Nyi Darsiti Soeratman（1926-2004）は、Universitas Gadjah Mada（UGM）大学で教えたインドネシアで最初の歴史学の女性教授です。彼女の研究は女性と家族、アフリカ史、スラカルタ王宮の歴史とTaman Siswaに焦点をあてました。Soewarsih Djojopoespito（1912-1977）は、作家で反植民地主義の教育活動家でした。Nyi Suratmi Iman Soedijat（1919-2018）は教師で、Taman Siswaの管理者として女性の寮であるWisma Riniを管理しました。Siti Sundariは作家で左派の活動家でした。これらの女性たちは、フェミニストの巡礼を通じてSPPが掘り起こして讃えたいと考える教育や政治のネットワークを代表しています。

墓地で教えることは、学界に主流の知識と服喪、学びと死者の追悼を分けることを拒否するフェミニスト教育法になっています。ガイドとしてアストリッド・レザが追想します。“Mengajar di makam tuh kayak bayangannya kan absurd gitu ya. Eh, tapi itu sangat menyenangkan”（墓地での教育は馬鹿げていると思われるかもしれないが、実際はとても楽しいものです。）

この教育方法により、墓地が学びの場に転換し、忘れられたフェミニスト思想家が眠る場所に立つことを通じていかに知識の伝達が埋葬された者の近くで起きるか示しています。

巡礼はフェミニストの継承はエコロジカルであり、地域住民と感情に資すると教えます。こうした知識は図書館に残ってはいないけれど、他の人々が歩いたところを歩いたり、公式の文書ではなく口伝えの伝統で生き残った物語を集めたりすることを通じて、ケアや生存者によって伝達されてきたのです。Merambanはこうして方法論とともに、フェミニストの知恵が旅した地下ネットワークを尊ぶ知識を集めるひとつの方法として儀式にもなるのです。


© 2026 SGRA

## 4．継承と掘り起こしという二重の労働：亡霊とともに生きることを学ぶ

現代のインドネシアのフェミニストには二重のポジションがあります。ワリス（継承者）としてトラウマの遺産、暴力的な歴史、組織的に行われた抹消を継承し、そして墓掘り人として積極的に隠されてきたものを発掘し、抹消を拒絶し、系譜を再建します。こうした系譜学的行動主義にはさまざまな労働が伴います。かけらの収集を通じて対抗する言説を創造する文書の労働、継承されたトラウマを集団的に取り扱うことによる感情の労働、掘り起こされた知識を現代の行動のために使用することによる政治的労働などです。

継承者で掘り起こす者として、フェミニストたちは亡霊にとりつかれているという考えを持ちます。未だ解決されない暴力の亡霊と倫理的に生きることを学び、亡霊が現代フェミニストの実践を導くことを許容するという考え方を持ちます。死にきれていない人々のことを思い、私の同僚がワリスについてのSPPマニフェストの中に書いています。

“Apakah aku mati? Tidak! Mereka berkata sambil terus memimpin perlawanan dari dalam kubur”（私は死んでいるのか？　いいえ、彼女たちは言う。墓の中から抵抗を続けながら。）

ワリスと墓掘りという二重の実習が系譜的な行動主義を形作ります。行動の基礎として断ち切られたフェミニストの系譜を意図的に再建するのです。インドネシアのフェミニスト政治は、過去を取り戻すだけでなく、亡霊とともに生きて、終わることなく服喪し、忘れることなく修復していくのです。

現代のフェミニストは傷と沈黙を継承しますが、同時に発掘を道具とします。一人のフェミニスト墓掘り人として継承することは、不快と痛みを受け入れることです。ワリスのマニフェストが宣言しています。

“Warisan bukan kutukan, tapi api yang kami nyalakan kembali untuk membakar segala yang tak adil, dan menerangi jalan pulang ke pintu kesetaraan”（継承はのろいではなく、私たちが点火する炎である。不正をすべて焼き払い、平等への道を照らすための炎である。）

ETALASE とSPPの拡大された仕事を通して、インドネシアのフェミニストは系譜的行動主義が服喪と抵抗の両方であり、継承と発掘の両方であることを示します。インドネシアのフェミニストは、責任を継承することは墓掘り人になることを示します。死を掘り起こすのではなく、システム的な暴力に埋められた生を掘るために。忘れられた女性たちの名を呼びながら、彼らの墓を訪れながら、抑圧の歴史を運んだ言葉を解体しながら、フェミニストたちは1965年に始まり今日まで続く抹消を拒否します。フェミニストの継承は、あえて亡霊にとらわれること、行動すること、掘り起こすこと、炎を絶やさず守ることを選ぶことを意味するのです。



© 2026 SGRA

# ［コメント2-1］

## ミヤ・ドゥイ・ロスティカ

大東文化大学

高里先生、そしてインタン先生、それぞれの発表は、異なる地域の歴史的背景を持ちながらも、驚くほど深い共鳴を感じさせるものでした。

まず、高里先生のご発表では、沖縄における軍事主義と構造的差別がジェンダーと交差しながら、女性たちにどのように影響を与えてきたか、非常に丁寧に描かれていました。慰安婦制度や米兵による性暴力、そしてそれに対する社会の沈黙は、国家の差別構造と家父長制度が結びついた結果であり、女性の尊厳が長く脅かされていることを改めて認識させられました。

しかし、沖縄の女性たちはその沈黙を破り、声を上げてきました。その声は、国際的なネットワークを通じて、グローバルな連帯へと繋がっています。ローカルな経験が世界と繋がる力になるという点に、私は大きな希望を感じました。世界の他の地域で同じような性暴力の被害を受けた方々が、自分の声を上げる勇気を持つきっかけになればと思っております。

実は、オランダ、イギリス、日本の占領下にあったインドネシアにも慰安婦が存在しました。インドネシアでも、宗教の価値観、伝統の価値観によって、「恥」だという思いから、声を上げない方々がおります。そしてこのことは一般のインドネシア人にも知られていない状況にあります。ですから、このようなグローバルな連帯が私たちの国でも知られるようになれば、そうした女性たちが声を上げる力が湧いてくるのではないかと思っております。

一方、インタン先生のご発表では、インドネシアにおけるフェミニズムの断絶と再構築が、「継承」と「墓掘り」という非常に印象的なメタファーを通じて語られました。1965年の虐殺によって失われた女性たちの声を、現代の活動家たちが掘り起こして再び語り直すというプロセスは、記憶と抵抗の政治そのものだと私は思っております。

女性思想の学校（SPP：Sekolah Pemikiran Perempuan）やETALASEフェスティバルという活動を通じてアーカイブを再構築し、世代や地域を越えて地を繋ぐ実践として非常に意義深く、アジアにおけるジェンダーと暴力の関係を考える上で重要な視座だと感じました。

私はカルティニ（R.A Kartini）というインドネシアの女性を研究しています。インドネシアでは誰でもカルティニという名前は知っていますが、彼女に対する解釈あるいは評価は時代と共に変化して、過小に扱われてきたという状況にあります。だからこそ、インタン先生が関わっているこうした活動を通じて、若い世代と語り合いながら、記憶を掘り起こして再び語り直している取り組みは、非常に有効的です。特に今の若者世代は本を読まない傾向がありますので、最適な方法だと感じております。





© 2026 SGRA

両先生の発表に共通していたのは、抑圧された記憶を掘り起こして声を上げる、女性たちが国境を越えて連帯していくというフェミニズムの実践だと思います。沖縄とインドネシア、それぞれの文脈において、女性たちは歴史を語り直して、立ち上がっています。その姿勢から私たちも学んで、どう連帯していくかを考える必要があると強く感じました。

最後に、お二人にお伺いしたいことがあります。

フェミニズムの実践がローカルの文脈に根ざしながらも、グローバルの連携へと繋がっていくためには、どのような工夫、それとも視点が必要だと考えているのでしょうか。

暴力の記憶を語ることは、個人にも社会にも大きな影響がありますが、語ることの難しさや可能性についてどのように感じてらっしゃるのでしょうか。そして、これは次のセッションにも繋がっていると思いますが、若い世代との対話をどのように築かれているのかというのは、是非できる限り聞かせていただければと思っております。

以上です。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

# ［コメント2－1］

梁 紘娥（ヤン ヒョナ）
ソウル大名誉教授

［原文は英語、翻訳：川崎 剛］

インタンさんのレポートを読みました。これまで知らなかったインドネシアのフェミニスト運動の歴史、哲学、運動を知る機会をいただいて感謝します。フェミニズムが過去から現在へどのように発展してきたか、豊かに力強く紹介されています。

レポートは肯定的・否定的な両義ある「相続（Waris）」についてです。これは知識と財産を運ぶだけでなく、植民地主義、資本主義、1965年の政治的弾圧のような歴史の流れの中で積み重なった痛みやトラウマも継承するものです。レポートではまた「墓掘り人（Gravediggers）」の、勇気ある掘り起こしについても書かれていました。私はインドネシアにかくも豊かな「女性思想学校（SPP）」が存在したこと、早くも1920年代に思想家が生まれていたことを知りませんでした。フェミニズムが根ざすのは西欧とその歴史だけと教えられてきたので、このことは特筆すべきです。現代のフェミニストは散逸され埋められた母たちの声や文書を探し求めた子どもたちなのだと発表者は言います。フェミニストの努力は「活発な法医学的作業」に等しいとも。

このことは、韓国やアジア地域にいる日本の軍事性奴隷（JMSS、Japanese Military Sexual Slavery）犠牲者ならびに生存者の証言を聞くときの哲学に似ています。忘れられた女性の声を語り直すことは、女性の歴史あるいは歴史そのものをリライトすることであるとインタンさんが飜訳しているのは、明日宮古島で行う私の発表、「サバルタンの強烈な声Strong voices of the subaltern」（附録1参照／p115）と似たような考え方です。この意味で、私がインタンさんの発表の討論者を務めることは偶然ではないでしょう。

喪の儀礼が社会運動でもあるというインタンさんのレポートに書かれた死者を思い出す勇気あるアプローチに感動しました。この発表は同時にとても詩的です。とくにインドネシア語の響きは美しく必然的に響きます。私は、苦悩が解放への道筋でもありうるという仏教哲学さえ感じました。ある意味で、この発表は、マントラ（真言）のようにも聞こえたのです。

できれば、あなたが描写した中でどれが最も重要で、忘れられないものか教えていただけないでしょうか。また、現代のインドネシア社会はこれらの活動をどのように見て受容しているのでしょうか。例えば他の社会運動、政治、芸術、教育などの分野において。

ありがとうございました。


© 2026 SGRA

# 第2セッション【質疑応答】

司会：イドジーエヴァ・ジアーナ（東京外国語大学）
オンラインQ＆A担当：グオ・リフ（筑波大学）
発言者（発言順）：インタン・パラマディタ（マッコーリー大学）
高里鈴代（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）
洪 玧伸（沖縄大学）

［英語発言翻訳：川崎 剛］

**ジアーナ**　質疑応答に移る前に、発表者の方々から何かコメントをいただければと思います。高里さん、大丈夫ですか？　インタンさん、いかがですか？

**インタン**　あたたかいコメントと親切な理解をありがとうございます。高里鈴代さんとともにお話しできたことを誇りに思います。高里さんのリサーチは暴力の実態についてとても包括的で、私は多くを学びました。暴力だけでなく、女性のレジスタンスについてもそうです。沖縄とインドネシアで、女性のレジスタンスには関係があると思います。共同作業が必要です。掘り起こしは単独ではできません。共同でやらねばならないのです。私はこうした女性たちの共同作業はとても霊感を与えてくれるものだと思います。

ミヤ先生の質問はとても重要です。国際的な連帯を築きながら、地域に根ざすフェミニストの慣習をどうやって発展させることができるか。重要な問題で、これは掘り起こし（墓掘り）を意味します。なぜなら私たちは暴力や痛みを掘り起こすだけでなく、フェミニストの思考も掘り起こすからです。例えばインドネシアでは、歴史から女性思想家が組織的、意図的に消されました。私たちはフェミニストや女性思想家について学校で学ぶことはありません。私たちはカルティニ

© 2026 SGRA

だけは知っていますが、ほかにもたくさんの女性がいたのです。過去を振り返り、女性たちの知的な作業を見渡すことはとても重要です。

同時に、問うてみなければなりません。知識とは何でしょうか。何が知識として正当とみなされるのでしょうか。本日の基調報告に戻ります。「誰が語ることができるのか」「誰の知識が見えるのか」。これはフェミニストの作業です。なぜなら女性が語るときにしばしば、ノイズとしてとらえられ正当とみなされないからです。ですから私たちは何が知識なのか、誰が知識を定義するのか問う必要がありますよね。私たちは国際的な連帯とつながるたくさんの方法があると思います。あなたが指摘したフォーラムなどはそのひとつです。沖縄やフィリピン、世界のさまざまな地域の女性たちが、どうやって連携し、知識や運動の経験を分かち合うのか。

私たちがSPPで行ったことは、生き生きとしたフェミニズムの女性たちについて知ることです。本日の基調報告でジュディス・バトラーに言及されたことはとても素晴らしかったけれど、私は実は日本のフェミニストについて語られたことにより興味を抱きました。

**ジアーナ**　それでは、質疑応答に入りたいと思います。まずオンラインからの質問をどうぞ。

**リフ**　インタンさんへの質問なので英語でお話しします。インドネシアの男性はフェミニスト運動をどのように見ているのでしょうか。

**インタン**　男性についてのこの質問をいつも受けるのですが、私たちはなぜフェミニズムについて語るときに男性を中心に取り上げなければならないのでしょう。

男性を本当に一般化することはできないと私は思います。ここではつまり、生まれながらのヘテロセクシュアル男性ですが、彼らの経験や、インドネシアのフェミニズムの高まりについての考えを一般化することはできません。私は、単一の存在として男性を考えません。とても協力的な同盟者もいます。知識のある男性だけのパネルでもこの問題はあります。知識のある男性たちは、大学や活動家のイベントで女性の声を取り入れようと努力します。しかしながら、残念なことで、一般化はしませんけれども、この問題はまだ道半ばだと思います。一般的にいって女性たちの声は（クイアやノンバイナリーの人々はまして）、かき消されています。この人々は「エキスパート」ともみなされません。彼らは時にトークン化されます。イベントが組織されるときにいつも彼らが女性を含むのはソーシャルメディアで除外されたくないからです。しかし、一般的に女性はエキスパート、知識の生産者とはみなされません。

政治の世界ではとても権力のある女性がいますが、これがインドネシア女性の多くの経験、とくにジャワ島やジャカルタなど中心地以外の女性の経験を代表しているとはいえません。他の島々の女性たち、インドネシア東部の島々の女性たちは代表されていません。ですから、一般的にいって、（女性が）除外されることが未だに多いのです。





© 2026 SGRA

**ジアーナ**　ありがとうございました。会場からはいかがですか。質問がある方は手を挙げてください。はい、どうぞ。

**フロア１**　お二人ともそれぞれの現場で女性たちと連帯して活動なさってるので、お二人に質問したいことがあります。答えられる範囲でいいのですが、実は私自身が今どうしたらいいのかを悩んでいる部分なのです。

というのは、みんな同じように一つの活動に加わっているといっても、同じ一枚岩ではありません。女性たち一人ひとりにいろいろな背景や経験があるので、それぞれの思いなどが違うこともあります。

私は平和運動に関わっているのですが、なかにはセックスワーカー、性を売っている女性たちも参加しています。その方たちは活動には本気で関わっていて、いい社会にしたい、平和な社会にしたいという思いで頑張っています。

ただ、父権制の社会構造のなかで性を買う男性たちがいるからそういう仕事があるのであって、そうでなければセックスワーカーは現れなかったと思っています。父権制の問題をどう捉えるかというのは、女性たちの人権の獲得のためにすごく大事な部分だと思うのですが、セックスワーカーであることにプライドを持っている方たちもいることを考えると、そこで一緒に行動していくことにズレを感じることがあります。

そういう方たちとも、せっかく出会った仲間として、どうやって連帯して、分かち合いながら一緒に戦っていけるのかと、いろいろモヤモヤしています。何か助言をいただけたらと思います。

**高里**　私はセックスワークの立場に立ちません。というのは、私はセックスワークの経験をしている人たちから、たくさんお話を聞いてきましたので、それがどんなに人間的におとしめられる状況なのかというのが分かるのです。

ですから、セックスワークを続けていきたい、頑張っていきたいという人の状況は受け止めますけれども、どういう状況なのか、しっかり対話をして聞きたいと思います。

でも、私はそうではない立場の人たちの経験をずっと聞いてきましたので、そのセックスワーク論には立ちませんね。

**ジアーナ**　はい、ありがとうございました。インタンさん、いかがですか。

**インタン**　運動に携わっている女性たちの中にある違いをどう処理するかという問題に集中したいと思います。共通項をとらえることは重要です。私はこのシンポジウムは、私たちの経験は、それぞれ異なった抑圧や民族や性差や階級によって形成されたことを理解して共通項をとらえようとする理想だと思います。セックスワーカーをめぐる質問はそれに関連します。私たちが共通項を認識すれば、私たちはフェミニズムの内部でも、権力関係や権力階層があることを理解する必要があります。私たちの権力を問う必要があります。フェミニズム内部で聞かれているのは誰の声か。決定しているのは誰か。特権的ではない人々、周縁に置かれた女性



© 2026 SGRA

たちが含まれているけれど、意志決定は数少ないエリートに委ねられているのではないか。

では、それは私たちのフェミニズムをどうするのでしょうか。それは私たちフェミニストの実践をとても困難にするし、長引かせることになります。しかし、難しいプロセスに率先して関与する必要があると思います。そうでなければ、私たちはいわゆる従属者を代表して話しているだけになってしまうでしょうから。

**ジアーナ**　ありがとうございました。ほかに質問がある方はいらっしゃいませんか。せっかくの機会ですから、ここでしか聞けないことをぜひ。はい、どうぞ。

**フロア2**　私は90年代から、中国の慰安婦の証言を聞き回ってきたのですが、東南アジアでも同じようなことがありました。今日のテーマは、アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性ですが、戦争の問題にしてもフェミニストの問題にしても、根底にあるのはやはり差別ということが大きいと思っています。次のセクションでもぜひそれについて考えていきたいと思っています。

また、昨日沖縄に来ましたが、軍事基地を縮小すると政治では言っていますが、例えばアメリカビレッジとか、実際にいろいろな場所を訪ねて行くと、沖縄の占領化の状況をさらに感じます。ですから、暴力とジェンダーだけに限らず、やはり今の状況、特に日本人ファーストとか、またアメリカのアメリカファーストとか、今日はそういう状況もふまえて議論していただきたいという感想です。よろしくお願いします。

**ジアーナ**　ありがとうございます。発表者の方々から何か返答があればどうぞ。よろしいですか？

オンラインから追加の質問があるそうなので、リフさんどうぞ。

**リフ**　オンラインの聴衆者から寄せられた質問なのですが、少し文章が長いので、私の方でまとめてお伝えします。

公表された資料によると、アジア地域の各地に戦後旧日本兵が取り残されていた、残留していたということが判明しています。そのような方たちに対してどういう評価が妥当でしょうか、といった内容です。アジア各地に取り残されていた旧日本兵の人たちをどう考えるべきなのか、何か地域研究の対象になっているのでしょうかという質問になります。

**洪 玧伸**　リフさんがまとめてくださったご質問に絡めてインタンさんにお伺いします。インタンさんは墓堀りのときに歴史に埋もれている女性の名前を呼び戻すというお話でしたが、その活動に対し、何故、女性の名前だけなのかという抗議をされたことがあったとおっしゃいました。リフさんのまとめてくださった質問は、例えば、死者の中には、旧日本兵の遺骨も各国に散らばっていて、そういう人たちは墓堀りの活動ならびに研究対象にはならないか、というニュアンスのご質問で





© 2026 SGRA

はないかと、聞いておりました。

さて、私からは、インタンさんにやや違う角度からの質問をしたいのです。忘れられた女性たちの名前を呼ぶという行為、それが自分にとっても回復になるのではないかとインスピレーションを感じました。インタンさん自身は活動を通して死者の名前を呼ぶことによって治癒されるという感覚を経験したことがありますか、もしあれば是非、共有してください。

**インタン**　質問の全体を理解していないかもしれません。とくに日本兵について。この問題には知識がありません。女性の名前を呼ぶ儀式は、女性を抹殺してきたことに抵抗する意図があります。それがポイントです。女性たちは抹消されてきましたが、彼女たちが書いたものにかかわらず、私たちは彼女たちの名前を知らないのです。彼女たちの書いたものは焼かれました。だから儀式はとても重要なのです。

マルシナ（Marsinah）と呼ばれる女性がいました。労働運動家でした。彼女はとても暴力的に殺害されました。彼女は権力に反抗したとだけみなされていますが、彼女を労働者の権利のために戦った一人の労働者としてだけではなく、思想家としても位置づけることがとても重要です。こういう文脈なので、旧日本兵の名前は誰も呼ばないのです。

女性にとって名前を呼ぶことはどういうことでしょうか。これはとても重要な質問です。認識の部分と癒やしの部分があると思います。ビデオ（編注：忘れられた女性の名前を呼ぶ儀式の映像）には映っていなかったかもしれませんが、儀式では女性たちは実際に泣いています。学問的にどう位置づけるべきかよくわかりませんが、死者であり忘れられた人々と結びつきあう情緒的で感情的な次元があるのです。死者を悼む女性たちには何かがあるのです。

よい視点をいただきました。とらわれることと集団的な癒やしについてさらに考察をすすめたいと思います。ありがとうございました。

**ジアーナ**　それではこれで第2セッションを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

発表3－1

# 沖縄戦・米軍統治下の福祉と女性

山城紀子
沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト

## 1．声をあげ始めた沖縄の女性たち

『母たちの戦争体験―平和こそ最高の遺産』は、沖縄県婦人連合会（沖婦連）が各市町村婦人会に呼びかけて集録した「戦争体験記」である。沖縄戦を体験した女性たちは戦後長い間、自らの戦争体験を語らなかった。重い口を開くようになるのは、故人を弔う最後の年忌法要であり、亡くなった人が神になると考えられている三十三回忌（没後32年）法要を終えた1970年代後半からである。

沖婦連は当時約５万人の会員を擁する沖縄最大の女性団体だった。1981年の婦人大会で「戦争体験の語り継ぎを実践し、平和の世論づくりに努めよう」と決議。翌82年度の定期総会で「戦争体験を集録する」ことを活動目標に掲げた。そして70点の体験記を集録し、1986年３月、発行した。「平和こそ最高の遺産」と副題をつけた同書には、日米両軍と民間人を合わせて20万人以上が命を落とし、住民の４人に１人が犠牲になり、「ありったけの地獄を集めた」といわれた戦場を体験した女性たちが平和の尊さ、命の大事さを訴え、「二度と戦争を起こさないため」、「生き残った者は語り継ぐ責任がある」と考えてペンをとったと語っている。

日本軍の兵力不足を補うため、「根こそぎ動員」された沖縄戦。地上戦が始まると14歳以上の男子学徒隊や護郷隊などなし崩し的に招集が拡大された。女たちの避難は高齢者や子どもを抱えてのことである。「当時95歳の歩けない祖母をおぶって山へ、山へと真夜中までかかって避難した経験」、「悪性マラリアの流行で毎日のように何人、いや何十人もの人が死んでいく」、壕に避難することはできたものの、赤ちゃんを連れていた姉が「泣く子の口をふさげ、泣く子は殺せ」と壕にいる人たちから言われた恐怖、「アメリカ兵におそわれないかという恐怖」など、当時の心境が綴られている。体験だけでなく、「目撃」の強烈な記憶も印象に残る。「道端で、死んだ母の乳にしがみついて離れない子、一方では死んだ


© 2026 SGRA

母の回りを、『アンマー』（お母さん）、『アンマー』と泣き叫んでいる姿を見て通りすがった」。また、当時の沖婦連会長の宮里悦さんも「ある障害者の死」と小見出しをつけた箇所で目撃した経験を書いている。知的障害のある30歳を過ぎた息子は状況を理解できない。米兵が近くに来ているとの地元住民からの知らせにみな密林に逃げ込んだものの、男性は逃げ遅れた。男性のいる小屋から黒煙と火柱がのぼったという。小屋が焼ける音に混じって男性の断末魔の悲鳴が聞こえたがだれも助けに行くこともできず、全くの見殺しであった、と書き、「健康な子を戦場で殺された母、障害者を避難小屋とともに目の前で焼き殺された母、あの母もこの母も生涯悲しみを抱いて生き続けた」と記録した。

「語り継ごう書き継ごう戦争体験」と題して寄稿した安里要江さんは、33回忌法要を機に、文字通り戦争体験を書くこと、語ることを40年にわたって県内外で続けた。安里さんは当時の夫や息子、娘、親族11人を沖縄戦で亡くした。私は2012年６月、当時92歳だった安里さんの語り部活動に３回同行して取材した。いずれも修学旅行で沖縄を訪れた県外の中高校生への講話だった。変形性膝関節症で両方の足を交互に手術し、人工骨を入れたとのことで、その時もまだリハビリ中だったが、「（平和学習の）講話の依頼はただの一件も断りたくない」と語っていた。

生徒たちの前に立った安里さんはとても90代とは思えない声量で、体験を具体的に伝えた。戦況が悪化する中、生後９か月の娘と４歳の息子、病身の夫、高齢の親族らと共に戦場をさまよったこと。生まれたばかりの娘・和子ちゃんは母乳だけが頼りだというのに、食事をとっていない安里さんは母乳が出なかった。泣き声もたてなくなっていたが、そのことにも「安堵のような気持ちをいだくほど、私は追いつめられていた」という。なぜなら、「友軍」はガチャガチャと銃剣の音を立てながら「子どもを泣かす者は誰でも殺してやる」とどなっていたからだ。和子ちゃんは亡くなっていた。「正確にいつ死んだのかはわからない。声も出なくなって、泣くこともしなくなって火が消えるように死んで。暗い洞窟の中のことで死に顔さえ見てあげてなくて…」。2019年５月、安里さんの語り部引退を伝える記事が出た。98歳。体力の低下や体調不良に加え、認知症の進行が引退の理由であった。戦後再婚して生まれた娘が母の引退について、必ず語っていた娘の和子ちゃんを亡くした体験を語らなくなったなどと引退の理由を説明している。「辛い気持ちを忘れたがっているのかもしれない」とのコメントもあった。語り続けることを自らに課していた安里さんの心中を考えさせられた。

沖縄戦の体験がトラウマになり、心を病み、語れない人も多い。精神科医や戦争トラウマの研究者の助けを得て、戦争体験を語り、書く人もいる。並里千枝子さんは「知られざるユナパチック壕～あの時、地の底で何が起きたのか」の著書を表した。当時９歳。70年の時を経て体験を振り返った。中でも「弟・清隆ちゃんの死」の場面は大変苦しく辛いところで、何としても筆が進まなかったという。著書から引用する。

「母のお乳が出なくなり、お腹をすかせた清隆が泣き出した。どんなにあやしても泣き止まず、黒糖を湯飲み茶わんの水に溶かして飲ませようとして



© 2026 SGRA

も、吸うことしかできず飲めないのだ。清隆は更に体を反らせて泣いた。『あの赤ん坊はどうにかならんか！』痩せた老人が人差し指を向け、射るようにして怒鳴った（中略）。そこへ、日本兵の一人が島出身の少年兵を引っ張ってきて『貴様、撃て』と、あごをしゃくって命令した。少年はおずおずと銃口を向けたが、全身震えて的を定めきれず、引き金を引けないでいた。壕内は騒然となり、身動きがとれない住民の血走った視線が銃口と清隆に注がれた。私は母の左側に座っていた。私は銃口に飛びかかりたい衝動にかられ、心臓が飛び出さんばかりだった。『貴様、それでも兵士か！』上官が罵声をあびせ、自分の銃の柄で少年兵に激しい暴力を幾度となく振るった。住民の恐怖に満ちた目は、日本兵の暴力に向けられた。その時、清隆が母の膝から小さな足をはみ出して、私の右太腿を強く蹴った。清隆はもう泣かなかった。私は、お乳が出たから泣き止んだのだと思った。清隆はとても元気な子で、両脇を抱えて膝の上に乗せると、ピョンピョン跳ねて喜ぶ子だったから、蹴られた膝はその時の感覚でしか捉えられなかった。しかし、実際は違った。まさか、それが清隆の死の突っ張りだとは考えもつかなかった。確かに母の異常な様子を感じてはいたが、何がなんだかわからなかった」（中略）、「祖母がやっと母に声をかけた。『しかたならん』、イクサデームン（いくさだから）。鉄砲し射られえ（鉄砲で撃たれたら）、あんたもトオ（死の意味）なっていたよ。イジ・ククル（意思を）強くもってちょうだい」それでも母は頭をあげなかった」

母親はショックで「すみません」を繰り返し、わが子を殺めたことを何度もわび、泣き崩れ、正気をなくした。両手で胸を抱え辛そうに立ったり座ったり、半狂乱ともいえる行動をしたり、「清隆にお乳をあげてくる」と言って壕を出ていこうとする様子などを綴っている。並里さんは9歳の時に経験した沖縄戦が、70年を経て、体験を書き終えた後もフラッシュバックに苦しめられている、とも語っている。

## 2．米軍統治下の福祉と女性

沖縄戦は多くの「戦争未亡人」をつくった。琉球政府は戦後12年目の1957年、「未亡人の生活実態調査」を実施している。「未亡人の生活状況」は以下の通りであった。調査対象は870世帯。女世帯の精神的、経済的生活の向上をはかることを目的としたものである。

・どうして世帯主になったか。戦争や戦災で夫を亡くしたいわゆる戦争未亡人の女性世帯が最も多く、55％となっており、後は病気や事故死によるもの32％、離婚により女性世帯になったもの9％で残りは不明。
・女性世帯主になった時期。女性世帯になった時期は太平洋戦争中及びそれ以後に最も多く、戦争未亡人の場合は太平洋戦争中急激に増加して89％





© 2026 SGRA

を占めている。

・女世帯主の年齢。最も多いのは30代、40代で73％を占めている。

・女世帯主の学歴。小学校卒業程度が最も多く、47％を占めており、高等小学校を卒業したもの30％、小学校に行かなかったものや、小学校退学のものが13％、女学校以上のものがわずかに10％となっている。

・女世帯の世帯員。一人暮らしのものは少なく、94％が家族持ちである。女世帯主の扶養する世帯員は平均３．８人である。

上記のような調査結果が出ている。特に学歴の低さに驚く。約半数の女性が小学校卒業程度で、女学校を卒業したものがわずかに10％。女に教育はいらないという考えがいかに大きかったかを改めて知る思いがする。教育を受ける機会もない中で、世帯主として家族を扶養せねばならない時、どれほどの困難を抱えたことだろうか。また、日本本土から切り離され、統治していた米軍が本土との分断政策をとったことも生活の困難をもたらした。法整備の遅れだけでなく、同じ名称であっても内容には違いがある。ここでは二つの法律を見てみることにする。

【児童福祉法】本土は1947年、沖縄は６年遅れて1953年に制定された。しかし、本土では児童福祉法に準じて設置されていった公立保育所は沖縄では60年代半ばから、児童館や母子寮は復帰後になってやっと取り組まれるようになった。

沖縄の福祉関係者からは、50年代から60年代にかけての「高度経済成長期」の日本本土と比べて、あまりにも沖縄の福祉が貧しいということをたびたび聞いた。その背景に米軍側が日本政府の経済援助を受け入れないためということも語っていた。1950年代以降、本土では「ポストの数ほど保育所」との掛け声の下、公立と認可保育園、合わせて１万カ所の公立保育所がつくられる中、沖縄には公立保育所はひとつもなかった。沖縄で初めての公立保育所が設置されるのは1964年である。きっかけは、沖縄県教職員婦人部（沖教職婦人部）主催の「母親と女教師の会」で「公立保育所要求の緊急決議」が採択されたことだった。1962年10月、「公立保育所設置促進協議会」が結成された。参加団体は教職員会婦人部、官公労婦人部、自治労婦人部、全逓婦人部、沖婦連。

『沖縄・女たちの戦後―焼土からの出発』（沖縄婦人運動史研究会）には「厚生大臣宛に、沖縄の保育所設置費を日本政府より援助させるべく、働きかけて欲しい旨の要請書を送付」したとし、その理由として「かつて日本政府から琉球政府にたいして、保育所設置の補助がなされることになっていたものが、アメリカ民政府の拒否によって実現しなかったことがあり、この軍事権力の壁を運動の力で突破しようという考え方からであった」と説明している。戦後19年目、沖縄の児童福祉法が制定されてから11年目にしてようやく初の公立保育所が設置されることになった。



© 2026 SGRA

【精神衛生法】1950年に制定され、この法律の成立によって、精神障害者の私宅監置が禁止されることになった。沖縄でも10年遅れて1960年、精神衛生法は制定された。しかし、精神科医や精神科入院施設の絶対的不足もあって「精神病院以外の場所で保護拘束をすることができる」とし、私宅監置は禁止にならなかった。禁止になったのは、本土復帰時の1972年だった。

県内のある集落に私宅監置跡が残っていると聞いて初めてその場所を訪ねたのは2013年２月だった。小屋のすぐそばに建っている家で一人暮らしをするＴさんが監置されていた当人であった。食事を運んでもらうなど、同じ集落に住む妹の世話を受けて暮らしているとのことだった。私宅監置に使われた建物を見せてもらったが、食べ物を出し入れする小窓が一つついているだけの、まるで「コンクリートの箱」だった。中に備え付けられているのはトイレだけ。鍵も外側につけられており、中からは開けられないようになっていた（スライド１）。

沖縄の精神衛生法は第45条で本土法にはなかった公費負担を定めていた。利点となりえたはずだが、実際には予算がつかず、ほとんど活用できなかったと聞く。「マラリア、結核、日本脳炎など米軍に影響の出る感染症や伝染病には予算をふんだんに使っていたが」という声を医師や保健関係者から聞くことがあった。

1980年代後半から精神障害のある家族の居場所をつくろう、と県内各地に小規模作業所がつくられるようになった。やむにやまれぬおもいで開設し、運営していたが、ほとんどは母親たちの手によるものだった。

スライド１

**私宅監置跡**

沖縄県内に残っている私宅監置の建物。狭いスペース。食べ物を出し入れする小窓がひとつついているだけのまるで「コンクリートの箱」だった。中に備え付けられていたのはトイレだけ。鍵も外側につけられていて、中からは開けられないようになっていた。訪ねたのは２０１３年２月。建物のすぐそばにある実家で、ひとり暮らしをしていたTさんが監置されていた当人だった。当時８０代。２０代から３０代の１０年以上を監置の建物で過ごしたようだ。訪ねた時には、食事を運んでもらうなど、同じ集落に住む妹さんの世話を受けて暮らしていると話していた。
「私宅監置」のための建物が現存するのは全国で唯一といわれている。「私宅監置」は本土では１９５０年、精神衛生法の制定で禁止となったが、米軍の統治下にあった沖縄では１９７２年の本土復帰まで認められた。沖縄の医療、特に精神医療施設整備の遅れが深刻だったためである。

***Shichaku kanchi* (private confinement)**

A *shichaku kanchi* (private confinement) building still remaining in Okinawa Prefecture. It was a cramped space, nothing more than a “concrete box” with only a single small window for passing food in and out. Inside, the only fixture was a toilet. The lock was installed on the outside, making it impossible to open from within.

I visited in February 2013. The person confined there, Mr. T, had been living alone in his family home right next to the building. He was in his 80s at the time. From his 20s into his 30s—over ten years—he seems to have spent his life in that confinement building. When I spoke with him, he said he was then living with the support of his younger sister, who lived in the same village and brought him meals.

It is said to be the only remaining building for *shichaku kanchi* in the entire country. On the mainland, *shichaku kanchi* was prohibited in 1950 with the enactment of the Mental Hygiene Act, but under U.S. occupation Okinawa continued to allow it until its reversion to Japan in 1972. This was due to the severe lack of medical facilities in Okinawa, especially psychiatric care.





© 2026 SGRA

## ３．沈黙を強いられた女性たち

沖縄戦、その後に続く27年の米軍統治、その中で多くの女性にとって深刻な被害や問題が生じたにも関わらず、女性に対する偏見や差別から声が挙げられず、覆い隠されてきた問題がある。その中から米兵による性暴力と無国籍にされた子どもたちについて記したい。

1995年、少女に対する３人の米兵による性暴力事件が起きたことで、県内の女性団体が次々に抗議の集会や会見などを開き、米軍基地の存在を女性の人権の視点から問うようになった。同年発足した「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」は1945年４月の米軍上陸を起点にこれまでの女性を性的対象とした米兵の犯罪について琉球政府・米軍資料、新聞、書籍、証言等をもとに記録した年表「沖縄・米兵による女性への性犯罪」に取り組んでいる。新たにわかったものを加えて版を重ね、現在は第13版。

収容所、畑、山中、道路でと、ところかまわず。また、父母や夫の目の前でも。被害者は乳児から高齢の女性まであらゆる年齢におよんでいる。調査には「処罰の方法」という項目があるが「不処罰」が多い。40年代、50年代はほぼ「容疑者不明」、60年代以降でも「逮捕後の扱いは不明」、あるいは「訴えず」、「容疑者は裁判中に配置転換」というものもあり、大半の加害者は処罰されてこなかったことがわかる。なぜ被害者が「恥ずかしい存在」なのか。「汚れた」だの、「穢れた」だのと言われ、沈黙しなければいけなかったのか。現在、女性たちは性暴力に向き合い、社会に問い続けている。2016年６月、40年前の米兵の事件を訴える記事が掲載された（スライド２）。自宅が複数の米兵に囲まれ、窓という窓から室内をのぞき込まれ、戸を激しく蹴られた。母と娘の暮らしの中で、恐怖におびえ、母は警察に電話をかけて助けを懇願したが、応じてもらえなかったという。驚くのは、米軍統治下の時ではなく、復帰後の1975年のことだという。たまたま民間住宅街にはいないはずの米軍警察のサイレンが鳴り響いたことで難を逃れた。社会全体が性暴力に対する認識を改める必要がある。

スライド２

次の「誰か」生まぬよう
基地の不条理 伝えたい
「人殺しの娘」■入店断る■一緒に怒れない

**２０１６年６月１３日の沖縄タイムス記事**
４７歳の女性が、４０年前に自身に起きた米兵による自宅への侵入寸前の事件について語っている。自宅を複数の米兵に囲まれた。窓ガラスには男たちの手のひら。戸を激しく蹴る音。恐怖におぼえる母子をからかうように笑い声が響く。室内をのぞき込み、大声で談笑する米兵たち。母親は警察に電話し、助けを懇願した。しかし、警察はこなかった。驚くのは米軍統治時代のことではなく、復帰後の１９７５年の秋のことだという。

**Okinawa Times article from June 13, 2016:** A 47-year-old woman recounts an incident that happened to her 40 years ago, when U.S. soldiers nearly broke into her home. The woman's home was surrounded by several U.S. soldiers. Men's palms were on the windowpane. There was a violent kick at the door. Laughter echoed, teasing the terrified mother and child. The soldiers peered into the room, chatting loudly. The mother called the police and pleaded for help. But the police never came. What's surprising is that this incident didn't take place during the U.S. military occupation, but rather in the fall of 1975, after Okinawa's return to Japan.



© 2026 SGRA

## ４．国籍法の改正（父系血統主義から父母両系主義へ）

1977年３月、国会で社会党（当時）の土井たか子さんが国籍における女性差別について質問したことから無国籍の子どもの問題があきらかになった。無国籍児は日本の国籍法が父系血統主義であったことから生じていた。父親が日本人なら子も日本国籍を取得できるが、母親は我が子に国籍を与えられなかった。一方、アメリカの国籍法はアメリカ合衆国に10年間の居住経験があることや、その半分の５年間は14歳以後の居住であることなどを条件とする出生地主義のため、条件を満たしていない場合は父親からも国籍が得られず、生まれた子どもは無国籍になる。在日米軍専用施設の約70％が存在する沖縄では沖縄の女性と米兵との結婚も多く、子の無国籍問題は戦後すぐの時からあったと思われるが、70年代後半までほとんど知られていなかった。あたりまえのことかもしれないが、無国籍の子どもの多くは沖縄にいることが明らかになった。約80人ということだった。

1977年といえば「国連女性の10年」（1976～1985年）の期間中。世界的規模で女性の問題が活発に展開されている時である。しかし、改正に向けて沖縄社会が動き出したのは1979年の国際児童年からだった。児童の権利宣言第３条「児童はその出生の時から姓名及び国籍を持つ権利を有する」を根拠に無国籍問題を「沖縄からの提言」として発表。福祉問題や女性問題に関わる女性たちが次々と日本政府の会合などに出向き、子に母親の国籍を継承させる必要性を訴えた。日本の国籍法は1984年、父母両系主義に改正された。

昨年７月、信濃毎日新聞提供の記事が沖縄タイムスに掲載された。沖縄生まれの50代の男性は無国籍のまま人生を過ごし、日本から出たこともがないにもかかわらず外国籍住民が常時携帯を義務付けられている在留カードを持ち歩いているという。「国籍・地域」の欄には「無国籍」と印字されている。沖縄で暮らしていた男性の母は米国人男性と結婚して渡米。米国籍を取得した。しかし夫と死別した母は米国籍のまま内縁関係となった日本人男性との間に男性を産んだ。

戦後80年経った。しかし、沖縄戦、その後の27年の米軍統治の問題は過去の問題ではなく、今現在も続いている。米兵による性犯罪、今なお無国籍のままで暮らしている人。戦争トラウマの問題は今やっと始まったばかりだと痛感する。





© 2026 SGRA

発表３－２

# ジェンダーの最前線：
## 世界最後の休戦における平和への最終段階

ホセ・ジョエル・カヌディー
アテネオ大学

［原文は英語、翻訳：川崎 剛］

## １．バンサモロ紛争におけるジェンダーへの影響

この機会を与えてくれたSGRA（関口グローバル研究会）、渥美財団、沖縄大学に感謝します。私の前の発言者にも感謝します。たくさんのことを学びました。こうした知識を共有してくれた寛大さに感謝します。

フィリピン南部、バンサモロ地域の情勢についてお話しします。戦争状態のときも、平和なときも、この地域が常にジェンダー問題の最前線だったことを議論したい。この地域は、ガザやスーダン、その他どこでも崩壊した和平プロセスの文脈で、世界の最後の休戦における平和への最終段階とみなすことができます。おそらく、ミンダナオの紛争のジェンダーの側面から世界は学ぶことができると思います。

ミンダナオの、そしてバンサモロのこの戦争がどれだけ長く続き、ある意味では未だに続いているか説明します。紛争拡大のタイムラインをごらんください（スライド１／ p66）。半世紀以上に及びます。植民地のルーツは勘定にいれていません。なぜなら中東で起こったように、私たちが見ているこの紛争も、遡ればスペイン人がフィリピンを植民地にしたときからずっと、アメリカが1899年から占領を始めたときからずっと、そして第二次大戦からずっと、それからも今日までずっと続いてきたのです。この地図を覚えておいてください、後で説明します。

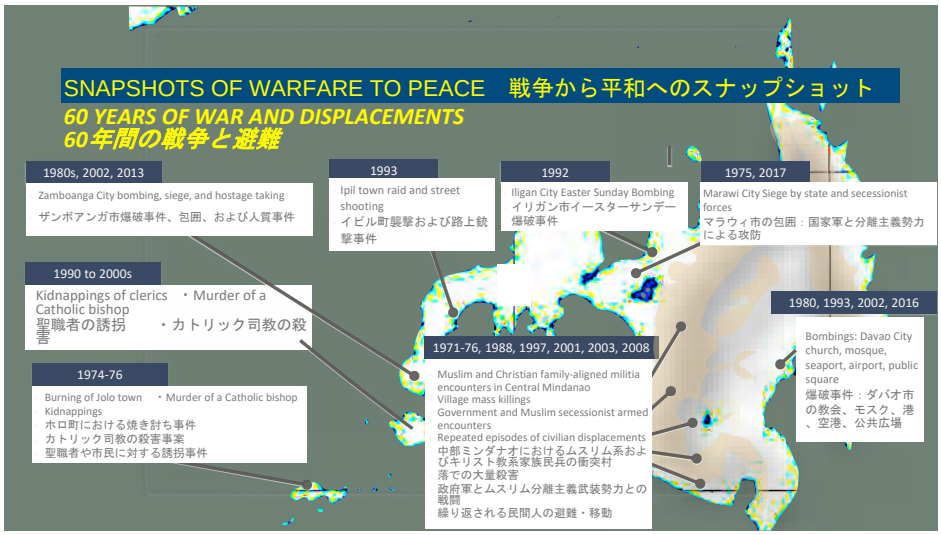
ここで明らかにしておきたいのは、私の発表は、バンサモロの児童のケアについて行ってきた大規模な研究の一部として位置づけられるということです。私はこの地域のジェンダー現象を調べるために、層別化されたこの調査を使いました。専門家の委員会、グループ討論、インタビュー、円卓討論、この地域における過去20～30年の私自身の民族誌的関与なども利用しています（スライド２）。

紛争の背景をさらに層別化するために、暴力の主要な特徴について説明しま



© 2026 SGRA

スライド 1




スライド 2

す。この地域は、バンサモロと自称し過去60年間自決権を主張する人々が始めた解放運動の現場です。2000年頃から、9.11事件に続く時代に、反乱状態が起きていたこの地域は、ジョージ・W・ブッシュ元大統領による米国のグローバルな対テロ戦争の戦域とみなされてきました。この地域に派遣された米兵部隊は、公に受け入れられないような戦闘地域には送り込まれませんが、顧問団として活動しました。彼らはフィリピン軍の軍事基地に滞在し、フィリピン軍に保護され、紛争にいかに勝利できるかという指令を与えていました。その考えは、少なくとも軍のブリーフィングそしてまた米政府からくる考えは、フィリピン兵は米兵から学ぶことができ、米兵も対テロ戦争の戦域から学ぶことができるというものでした。

日本政府はこの地域の平和と安定を支援するパッケージを提供していましたが、それは対テロ戦争という拡大的な文脈の枠内でのことでした。もちろん日本政府は地上部隊や具体的な軍事支援は行っていません。しかしアジア開発銀行やJICAを通した関与は当時の対テロ戦争の拡大された権限の中で始まったものでした。もはや対テロ戦争とは呼ばれませんが、アレンジメントは今も他の形で続


© 2026 SGRA

いています。

暴力と私のテーマであるジェンダーの影響を表す主要な数字を見てみましょう。まず暴力ですが、過去60年間の紛争で推定12万人が死亡しました。それでみると、死亡した12万人のうち50％がバンサモロ兵士、30％がフィリピン軍兵士、20％が民間人でした。しかし私の計算では、バンサモロ兵士とみなされるうちの50％は、実際は民間人でもあったのです。私がそう考える根拠は、武装グループは国軍が持つ軍事装備を持っていなかったからです。彼らのすべてが小火器を装備していたわけではありませんでした。おそらく、これらの民間人は自決権を支持してきたのですが、戦闘の中で、最初は自決権闘争への支持によって取り込まれたのでしょう。私の推測で50％以上の民間人がこの紛争で死亡したとみられます。おおよそ、1806億円、または12億米ドルがこの紛争で使われましたが、これは過小評価でしょう。

冒頭からこの紛争のジェンダー的特質を話してきましたが、多くの事例で、女性と少女たちはこの破壊的な紛争の負担を二重に強く受け、脆弱化にさらされました。男性が戦闘する間、女性たちは生活費を稼ぎ子どもを育てるために残されます。男性は戦場の壕にとらわれているから、生活費を稼いだり子育てをしたりしないでしょう。その間女性たちは生活費を稼ぎ子どもを育てなければなりません。それは女性の不平等な地位によってさらに悪化します、主に資源へのアクセスにおいて。例えば、食糧援助です。援助の配給が行われるときに、通常、誰が援助を受け取るかカウントの基礎は世帯主です。紛争前は、世帯主は母親というより父親が多く記載されてきました。その結果、母親はしばしばカウントされないのです。だからときどき、うまい手として、女性支援団体などが利用したのは、最も年長の男子を世帯主にしました。そうするのに十分なだけいたらという話ですが。

実戦を避けるために、いくつかの共同体が平和ゾーンや平和スペースを宣言してきました。市民社会グループが始めた試みですが、このセクターの脆弱性が明らかになっただけでした。これらの平和ゾーン宣言はとても限られていました。私の手で数えられるくらいで、五つ以下でした。私は二つか三つを立証しましたが、とても少ない。しかし平和ゾーン宣言は、現地の人々が認識した紛争のジェンダー的側面を説明しています。

近年、いくつかの希望がでてきました。2014年の包括和平合意が守られているのです。これは政府と解放勢力の一つモロ・イスラム解放戦線との協定です。（スライド３／ p68にあるように）民族解放戦線ではありません、それは間違い。前に述べたように、これは世界最後の休戦です。マニラの英国大使館のような外交使節も、多かれ少なかれ崩壊したアフリカや中東の紛争における和平プロセスと比較して、バンサモロの和平プロセスが今日の世界で最も成功した一つと認めています。

2012年の枠組み合意への署名、そして2014年の包括和平合意の締結によって、政府と解放戦線の大規模戦闘は大幅に減少しました。おそらく、これは自治権を求めて戦ってきたバンサモロによる自治地域の確立という和平合意の重要項



© 2026 SGRA

スライド 3

目の一つによって推進されたのです。自治政府を通して改革が実行されていますが、一定の範囲でしかありません。これが、なぜ私が「長期戦争の後、60年間の戦争の後、何が起きているか」と問い続けている理由のひとつです。制度的アクター（国家および解放運動）間では和平が成立しました。しかし紛争と60年間の戦争の暴力は、断片的な形で続き、社会にすでに存在していた亀裂を露わにしました。これはすでに起きていることです。紛争後の再建過程もまた、ジェンダーに基づく不平等や権力喪失の深刻さを可視化します。これは紛争が拡大するときに見ると乱雑ですが、拡大局面ではないときにはより見えるようになります。しかし、ジェンダー不平等はそこにあります。それはいつもあったのです。

紛争の不釣り合いな影響のひとつの特質は、戦争や紛争後の再建がジェンダー関係に与える影響がいかに深く根付いており、かつ目に見えにくいものだったかということです。このことは後で説明しますが、この状況下で女性や子どもは戦時の混乱の中だけでなく、再建の政治過程と和平プロセスにおいても最も脆弱な立場に置かれていることを注意し、強調したい。女性と子どもは、優先順位の最下位に押しやられてしまいます。

女性と子ども、とりわけ最遠隔地や周縁地域におかれた彼らは、平和がもたらされる最後の人々と位置づけられます。紛争の重みと傷を背負わされる一方で、遠隔の場所にいるために彼らが苦しみから救い出されるのは最も遅くなります。この平和の最後の数マイルにおけるジェンダー関係は、戦争と平和の亀裂、断層、不均衡な影響が可視化される最前線となります。こういう条件が連続し、母親と子どものジェンダー的立場は戦後再建と平和構築の最後の数マイルに押し込められるのです。

## 2．事例研究：ママサパノ（Mamasapano）の女性たち

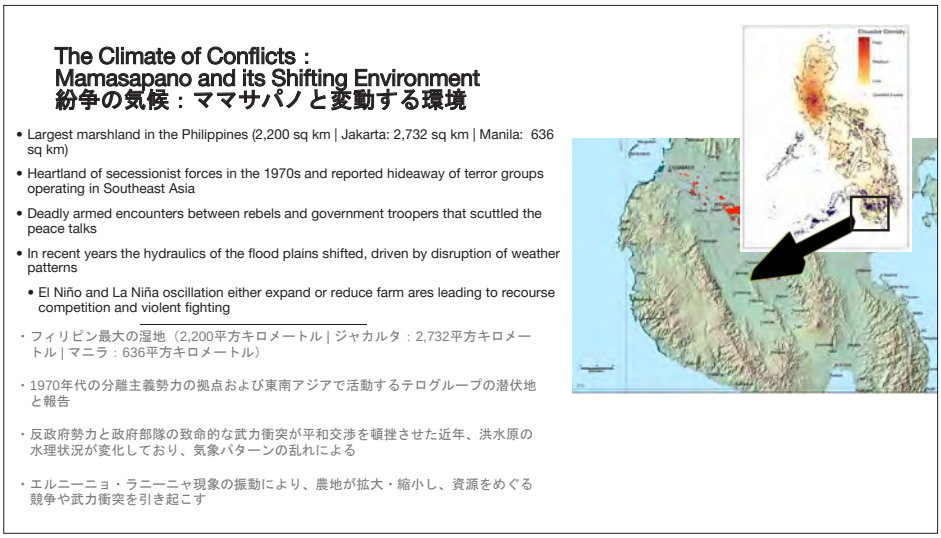
これはどういうことでしょうか。具体化のため、ママサパノ（Mamasapano）の女性たちの事例を紹介します。村というか町というか、衝突が起きてきた地域





© 2026 SGRA

スライド４




にあります（スライド４）。60年間に及ぶ衝突の中で、ママサパノは常に、紛争時も平和時も戦闘が絶えない場所にありました。イエス、一部の銃は発砲を止めていました。しかし静かにはなっておらず、避難と社会の混乱が続く地域では、ジェンダー関係と社会的立場が複雑化しました。そして今回は、続く紛争や小競り合い、気候変動がもたらす不確実性などの複雑な諸要因が起きてきたのです。

既存の亀裂が断片的な暴力を助長しました。その亀裂のひとつにクラン（武装一族）がありました。クランは一族性の家族で、お互いに援助しあい、集まっています。しかし彼らは武装もしているのです。彼らはまた過去には武装闘争に参加して、自決権闘争を支持してきました。和平合意の後、彼らは地域的課題に目を向けました。地域の紛争はいつもそこにあったのです。彼らは既存の問題を蒸し返し始めました。土地へのアクセスや財産をめぐる争い、地方の政治権力などです。武装して以来、彼らはしばしばお互いで戦闘するようになり、断片的な暴力を招くこともありました。

暴力の規模と特徴が変化したことは、すでに分離主義者やアイデンティティー戦争に巻き込まれてきた女性の状況を複雑にしました。今回親たちは、続いている避難と安全不確実性のため、子どもたちを学校へ通わせるのを中止しました。状況がさらに複雑化するのは、今回、彼らがお互いを知っていたことです。彼らは拡大家族の一部として戦うことができます。彼らはお互い相手を知っている。だから彼らは、分離主義戦争のときに政府軍と対峙し戦っていた時より、危険を知っているのです。

避難したり退去したりする中で安全が確保できないと農業は持続可能でなくなり、食料アクセスの危機につながります。食料アクセスの危機で二重の重荷を負うのは女性です。彼女たちは避難していても耕すでしょう。彼女たちは夜または別の時間に畑に忍び込もうとするだろうし、同時に生活費を稼いで緊迫した食料事情に対処しようとするでしょう。学校が安全でないかもしれないので登校せず、教育や公共の児童ケアにアクセスできない子どもたちの世話も同時に担います。

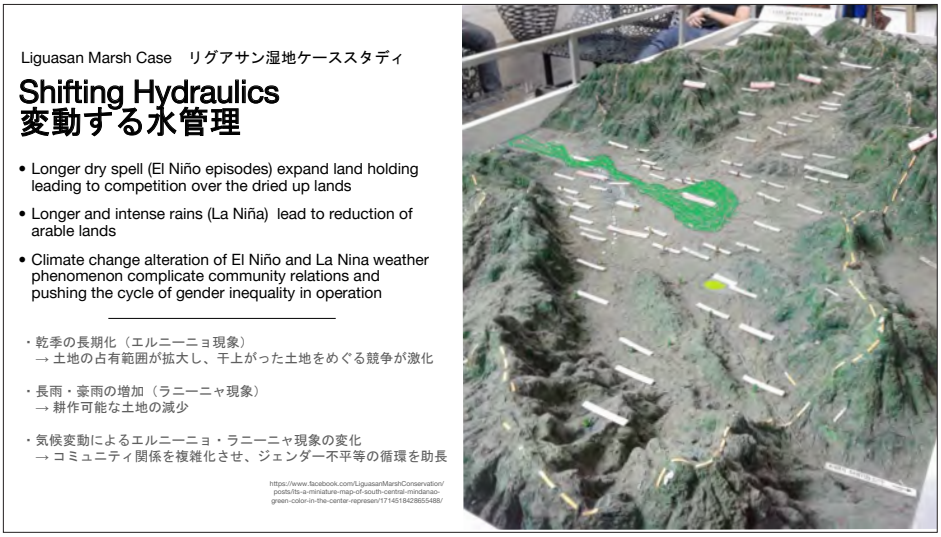
これらの要素と避難をさらに複雑にしているのが、変化する気候のインパクトです。これまでお話ししてきた母親たちがいる村ママサパノは、リグアサン沼の



© 2026 SGRA

スライド５

スライド６




地域にあります（スライド５）。ここは湿地帯です。この湿地帯が60年間の分離主義者の紛争の中核地域でした。ここは、（前にお話しした）米国の対テロ戦争のテロリストグループの潜伏場所のひとつでもありました。反乱者と政府軍の兵士の殺し合いは以前の和平交渉を頓挫させたりしてきました。だからここは複雑な地域なのです。

しかし今回、気候の重圧で、湿地の水管理と洪水の氾濫原の場所が変わりました。天気のパターンによって壊れたのです。ご存じのように、太平洋を横断する二つの自然現象があります。エルニーニョとラニーニャで、7年ごとに起きると考えられています。しかし、気候変動により、もはや方向がわからなくなったのです。それが地上にもたらしたインパクトによって、暴力、戦闘、最終的には女性たちの状況が複雑になりました。戦闘は以前から存在してきましたが、この地図では×で表しています。それらはみんな湿地帯にあります。ごらんのように多くの地域があります。しかしこれは氷山の一角で、湿地における紛争の全体の範囲を数えていません。

ビジュアルで見てください（スライド６）。地帯は山で囲まれています。雨が


© 2026 SGRA

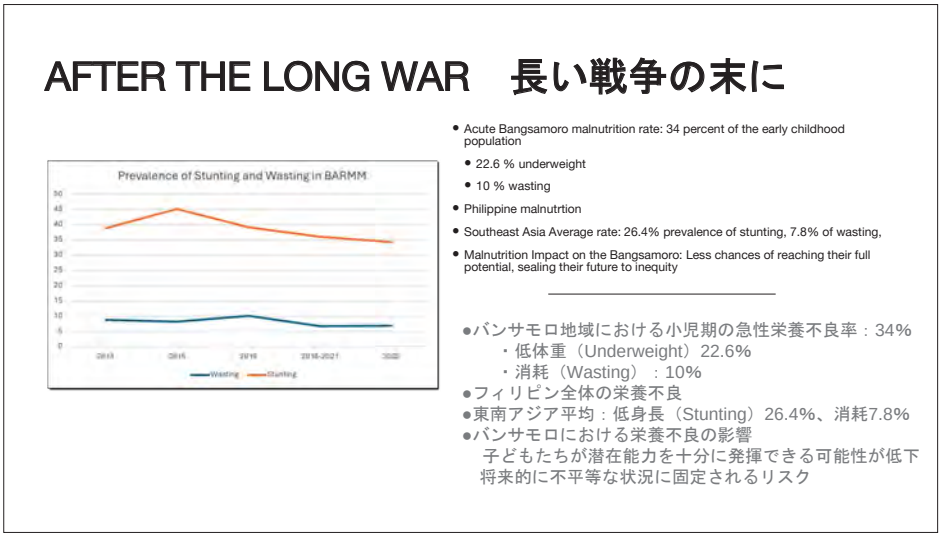
降れば、特にラニーニャの時には、降水はすべて暴力が起きてきた地域に流れこみ、そこはますます脆弱性にさらされます。ここ最近起きているエルニーニョの最中は、乾期や干ばつが長期化し、干上がった土地が増えます。土地は乾き、6カ月7カ月、8カ月も水上に出るので、陸上の人々と共同体は土地を耕す機会を見いだします。誰がこの土地を所有するかという境界設定はありません。なぜならそこはかつて水中だったからです。人々は、別のグループや他のクランが占領しようと挑んでくるまでその土地を占有します。争いの最中、彼らは武装しているので感情が高ぶり戦闘が起きます。暴力的な戦いが始まり、ジェンダー不平等の循環を助長します。

その間に、今回、少なくても太平洋のフィリピン側では、ラニーニャ現象によって降水量が増えています。雨が増えるということは洪水が増えるということです。洪水が増えるということは住居を失い避難する人が増え、資源と土地が減少するということです。これにより土地、紛争、暴力をめぐる争いが増え、最終的に前に述べたようなジェンダーに起因する苦しみが事態をさらに複雑にするのです。

## 3．長い戦争の末に

私たちが見ているのは政治と紛争が重なり、交差する危機です。すでにお話ししたようにこの基礎にあるのは、文化、社会、政治のジェンダー関係で、これは長い戦争の後で子どもと女性たちの状況を複雑化させます。証拠をひとつお見せしましょう。これらは政府のデータから私たちが整理したものです（スライド7）。バンサモロ地域で小児期の急性栄養失調は34％で、22.6％が低体重、10％が衰弱です。フィリピン全体の栄養失調のデータは29％なので、この地域の栄養失調率は高い。東南アジアの平均は26.4％、バンサモロ地域の34％という数字は高く、この地域の女性と子どもたちの困難を目立たせています。私たちはなぜ

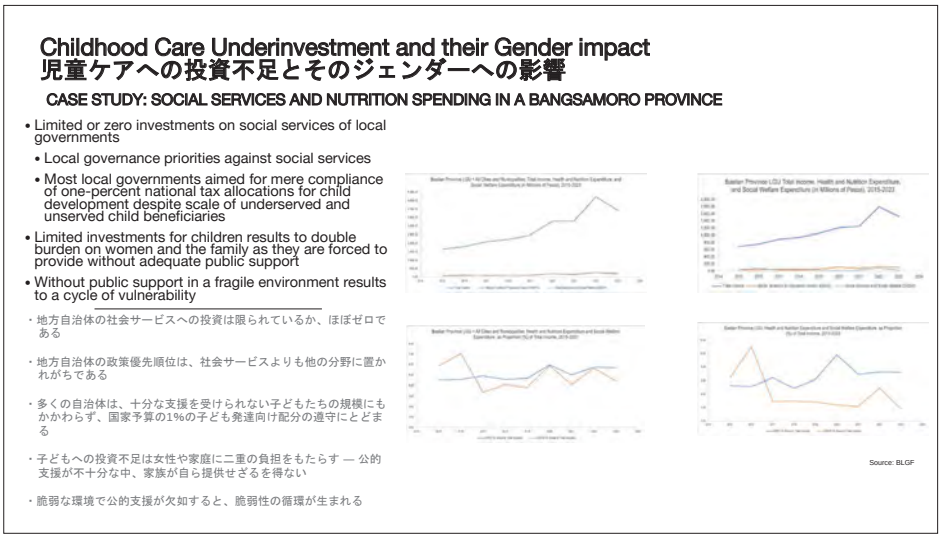
スライド7






© 2026 SGRA

スライド 8




栄養失調に注目すべきなのでしょうか。なぜなら栄養失調の影響は、子どもの成長が止まって衰弱したら潜在能力を十分に発揮できる可能性が低下し、生涯を通じて不利な状況に固定されることが多くなるからです。

幼稚園レベルの就学率を見ましょう。紛争、避難（displacement）、気象の変動などの理由でわずか5%の児童しか幼稚園に通っていません。その影響は小学校レベル、最終的には大学まで生涯続きます。子どもが基礎教育や高校教育を修了する機会が減り、大学教育を終了する機会はさらに減ります。非常に少ない数しか大学教育を修了しないでしょう。すると、こどもたちは成長する前に、自分たちのポテンシャルを試す前の段階で、少なくとも現在の社会状況では子どもたちに生涯にわたる不利益をこうむるでしょう。

これはこの地域とフィリピン全体の経済トレンドです（スライド８）。フィリピンは5%から6%の経済成長の途上です。この地域は8%から10%で、とくに大きな武装衝突、分離主義者の戦争が終わってから成長しています。しかし経済が成長しても（バンサモロ地域のひとつのケースですが、パターンは地域のプロビンスで同じ）、社会サービスと児童への投資はほとんどゼロでした。グラフで青い線は地方政府の歳入レベルを表しています。底にあるオレンジの線のところにゼロがあり、女性や子どもへの投資や配分です。これが、私が女性と子どもが平和の最後の数マイルにいると主張するポイントです。なぜかれらが再建の最後の段階におかれるのか、女性や子どもを超える他の優先順位があるからです。

最後に今後の展望はどうでしょうか。暴力は収まってきて、統治構造は確立しましたが、この地域の紛争による人間的苦しみの深さや長期的影響を反転させるまでは至っていません。今日お話ししたように、戦争と平和は常にジェンダー化された領域です。しかし、その種の社会構造は、少なくともこの地域では、紛争から再建への移行の途上で十分な関心を与えられてきませんでした。戦争と平和のジェンダー化された影響から、こうしたさまざまな挑戦がいかに問われ解決されたか学ばれなければならないと思います。フィリピンの、ミンダナオの、バンサモロの教訓を超えて、世界への教訓がここにあります。冒頭で触れたように、


© 2026 SGRA

これは世界で成功した少数の和平プロセスの一つです。おそらく、この地域の紛争から紛争後にいたる教訓は、未だにダイナミックな段階にあったり、困難に直面したりしているガザやスーダンやその他の場所でいかに対処するかという考えや洞察を私たちに与えてくれます。

とても悲しい経験をお話ししましたが、悲しく終わることを望んではいません。平和は維持されています。複雑さが増していますが、平和は継続されています。おそらく私たちは希望を持つことができるでしょう。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

# ［コメント3-1］

福永 玄弥
東京大学

私の専門はクィア研究で、特にポストコロニアル・脱植民地化という視点から、これまで東アジアにおけるセクシュアリティの権力が、ジェンダーやレイシズム、あるいは帝国主義や植民地主義、そして冷戦体制とどのように結びついてきたかということを研究してきました。

まずはじめに、山城さんの報告に対してコメントをしたいと思います。本日のご報告は、まず、沖縄戦後の長い沈黙ののちに女性たちが証言に立ち上がっていった契機、それからアメリカと日本という重層的な植民地体制下に置かれた沖縄における福祉医療制度の遅れ、あるいは本土とのダブルスタンダード、それから米兵による性暴力や無国籍児の不可視化といった三つの論点を当事者の語りと政治制度と往還させて可視化するような試みとして私は拝聴いたしました。

特に、1957年の調査から国籍法改正へと至る運動の歴史を接続させて、暴力の経験が個人の生活だけではなくて制度においても持続してきたということを説得的に示していただいたことに心から敬意を表したいと思います。

次に、今回のご報告をフェミニズムやクィア研究の文脈に位置付けて考えてみたいと思います。

戦後日本のフェミニズムは、1945年以降のアメリカ主導による民主化を女性の権利獲得のスタート地点と捉えるような直線的な進歩史観を共有してきました。他方、今日まで、在日コリアンやアイヌ女性、障害者女性、レズビアン、トランスジェンダー女性たちが、マイノリティ女性というポジションから、そのような直線的な進歩史観を批判する声を挙げてきましたが、今回のご報告も、マジョリティ・フェミニズムの歴史的な枠組みを相対化するようなインパクト、つまり、植民地主義の力によって安定化させられているような歴史のマスターナラティブに亀裂を入れるようなインパクトを持っていると思いました。

また、近年のクィア研究ではアーカイブに対する関心が高まっています。クィアな生とはまず第1に、それが常にトラウマと隣り合わせにあること、そして第2に、歴史学においてクィアな人々の生というのは常に不可視化されてきたということから、いかにクィアな生あるいは死をアーカイブ化していくかということが理論的にも運動的にも喫緊の課題となっています。

今回のご報告にとどまらず、山城さんの長年にわたる活動それ自体が、当事者の証言を継承しつつ、同時に当事者の語りの主権を確保する貴重なアーカイブになっているように感じられました。総じてご報告は、戦後80年を過去の区切りとする欺瞞の物語に乗っかるのではなくて、それを現在進行形の課題として捉え直す、そのような強度を持つものとして受け止めました。貴重なご報告をありがとうございました。


© 2026 SGRA

続いて、ジョエルさんの報告にコメントいたします。まず、ご報告の最も重要な貢献は、停戦合意や自治権の獲得を平和の到達点とみなすような従来の考え方を批判し、とりわけ女性や子どもの生活世界、つまり就学、保育、栄養、移動の安全などに焦点を当てることで、「平和のラストマイル」を測る新たな視覚を提示したところにあると思います。

フェミニズムの研究や運動は、紛争や戦争がジェンダー化されているということをこれまで暴いてきましたが、今回のご報告では復興や社会を再建していくというプロセスもまたジェンダー化されているということ、すなわち男性中心的な構造の中で女性や子どもの生存や安全が周縁化されているということを明らかにしていると思います。

このようなジョエルさんの議論は災害研究とも通ずるところがあります。つまり、自然災害の被害もジェンダー化されているということを災害フェミニズムは明らかにしてきましたが、災害から立ち直っていく復興プロジェクトにおいても女性を始めとするマイノリティが周縁化されてきたとするような発見と共有できる知見が今回の報告にあったと思います。

あるいは、ブラックフェミニストのキンバリー・クレンショーがインターセクショナリティという概念を提唱したとき、彼女は反差別運動におけるシングルイシューの政治がトップダウン型の発想に根拠付けられているということを問題化し、これに対し、インターセクショナリティというのはボトムアップの思想であるということを強調しました。ジョエルさんのご報告もまた、このようなボトムアップの思想と通ずるところがあると私は受け取りました。

さらにご報告では、バンサモロがアメリカのグローバルな対テロ戦争の舞台の一つとされていたことについて言及がありました。9.11を受けて、アメリカはバンサモロを対テロ戦争の第2のフロントとして位置づけましたが、そこにはムスリムをテロリストと結びつける言説や嫌悪の情動のトランスナショナルな流通が間違いなくあります。そして、そこにはレイシズムだけではなくて、ジェンダー化が作用しています。

第1に、治安を目的にムスリムの男性を潜在的なテロリストとしてプロファイリングし、移動、就労、教育といったあらゆる領域で排除すること。第2に、女性や子どもを保護すべき弱者として名指しつつ、同時に社会でのケアの資源を削減し、その労働を私的領域に改めて押し付けることで、女性や子どもを家父長制の庇護化に改めておくといったプロジェクトです。

問題の構成はやや異なりますが、アメリカだけでなく、日本や韓国といった東アジアでもまた、ムスリムの他者化が現在進行形の喫緊の課題として起きている



© 2026 SGRA

こと、そしてそれがアメリカの帝国主義プロジェクトの背景のもとで進展しているということを改めて強調しておきたいと思います。

最後に、今回のご報告は、紛争とその後の再建の過程をジェンダーの正義あるいは子どもの人権という観点からとらえ直すものであり、戦争だけではなく、平和復興というプロジェクトやそのプロセスもまたジェンダー化され、人種化されているとする知見を踏まえた上で、私たちは、問題に対する交差的なアプローチを考えていかなければならないということを教えてくれるご報告であったと思います。以上です。ありがとうございました。





© 2026 SGRA

# ［コメント３-２］

## 増渕あさ子

立命館大学

私は、米軍統治下の沖縄での医療や福祉について、政策だけではなく、そこに関わっていた人たちの動きが、どのように軍事の動きと密接に絡んでしまっていたのかということを根本的な問題として考えています。今日のお二人の報告は、まさに私にとっても密接に結び付く問題でした。福永さんが言われたことと重なってくるポイントもあるのですが、幾つかこのような点で考えることができるのではないかという論点を挙げていきたいと思います。

まず、山城さんの報告について。沖縄戦と占領下で女性や子ども、そして障害者といった長い間語ることのできない、あるいは語る場を持たない、語っても聞き遂げられない沈黙を強いられた記憶とともに、占領下を生きていた人々にとって戦争、占領はどのような事態だったのか、その中でどのように声を挙げていったのかということを、丹念に組み上げる作業を、山城さんはされていると思います。まさにそれは、グレーブ・ディギング（grave digging）という作業そのものだと思います。第１セッションの宮城晴美さんも、第２セッションの高里さんも、皆さんがやられてきたことそのものが、アーカイブ作りということにも繋がると思いますが、そういう作業だと感じました。

そして、ジョエルさんの報告ですが、まず「Gendered Frontlines：ジェンダーの最前線」というタイトルに、私はとても刺激を受けました。前線自体がジェンダー化されているということはとても大事な視点です。前線が男性で、銃後を女性が守るということ自体が作られていたものですが、そうではなくて、最前線こそが実はジェンダー化されていくということを示してくださる、そういうタイトルでもあるし、報告だったと思います。

報告の中では、長引く戦争（Protracted War）という表現をされてましたが、長引く戦争の中で、女性や子どもが最も暴力に対して脆弱な状況に置かれながら、後回しにされ、戦後再建のラストマイルとされていた状況が描かれていました。

お二人の報告にはとても重なり合うところが多いと思います。一つは、今言ったProtracted Warです。長引く戦争、長期戦争、ただ単に期間が長いというだけではなくて、沖縄の場合であれば占領状態として続いていたというだけではなくて、いずれの場所においても、たとえ狭い意味での戦闘が終わったとしても、戦争が日常生活において続いているということを示していると思います。第１セッションの冨山先生の講演の中で、日常の中での戦争という話がありましたが、日常というのは生活です。生活、福祉と言われているところで戦争が続いているということだと思います。

継続しているというのは、個人においてのトラウマだけではなくて、福永さんもおっしゃっていましたが、制度として、例えば児童ケアへの投資不足、未亡人



© 2026 SGRA

問題、児童福祉法の不整備といった社会構造の問題として続いているということが大事な視点だと思います。

二つ目もそこに続くのですが、ラストプライオリティというか、後回しにされる、ラストマイルにされることの問題です。沖縄の場合も占領軍の健康維持が最優先されていたために、住民福祉、特に児童福祉はどんどん後回しにされて、住民の自助努力に任せられてきたということがあると思います。そのように最後にされる、後回しにされるというのがたまたまではなくて、構造的に最後にされてきたのだと思います。そしてその中で、より一層、女性がケアの領域を担うことを強いられてきたということがあると思います。

私は山城さんとお会いするのは今回で4回目ぐらいなのですが、会うたびにとても濃いお話をさせていただいています。山城さんから伺ったいくつものお話の中で印象的だったのが、よく沖縄戦というのは4人に1人が亡くなったと表現されることについてです。その表現自体にも問題があると思うのですが、「4人に1人が亡くなったということは、4人に3人の方は生き残って、戦争の記憶とともに戦後生きてきたという事実を忘れてはいけない」と山城さんがおっしゃっていたのが、私にとってとても大事な言葉として残っています。

戦争の傷跡を抱えたまま生きていく、沖縄であれば占領の状態ですし、ミンダナオの場合でも復興という事態を生きていく人たちのことをどう考えればいいかについて、お二人の発表を踏まえて、子どもと環境という二つのキーワードで考えていきたいと思います。

まず、子どもということですが、世代間トラウマの話は近年指摘されるようになっていて、その戦争を受けた第1世代だけではなくて第2世代、さらに孫の世代に、トラウマが継続していくということも指摘されています。ジョエルさんの研究でも、身体的な影響、例えば低身長であるとか低体重であることと、これは山城さんが別の場所で報告されていることですが、風疹児の問題があります[1]。

1960年代に風疹が流行った時に、母体の中で風疹の影響を受けた子どもたちが障害を持って生まれたり、（占領されていたがゆえの）沖縄と本土との教育格差の問題も指摘されてきました。むしろこうした問題はこれから顕在化されていくのかもしれません。ですから、それだけの長い時間をかけて見ていかなくてはいけないということもひとつ大事な点だと思います。

もう一つは環境の話で、環境の変化が紛争の状況に影響を及ぼすということを

1　1964~65年にかけて沖縄で大流行した風疹の影響を受けて県内で400人ほど生まれた、聴覚障がいなど先天性風疹症候群の子ども。同時期の日本ではこれほどまでの流行傾向がみられなかったことから、米軍基地が感染源になった可能性が指摘されている。





© 2026 SGRA

お話しされていましたが、沖縄のことを考えるとむしろその逆のことも起きていて、武力紛争の長期化や占領の長期化によって環境自体が大きな影響を受けています。近年であれば有機フッ素化合物（PFAS）の問題、水の汚染の問題が言われていますが、やはり環境と武力、紛争の問題はとても大きなポイントだと思いますし、環境に影響が及ぼされたときに、一番脆弱な状態に置かれる人たちは誰なのかということを考えなくてはいけないと思います。

次に、これは福永さんが言われてたこととかなり近いことで、お二人にもお聞きしたいことです。レイシズムとの交差性というか、ムスリムの中でも女性や子どもが周縁化されているのですが、それだけではなくてムスリムの女性に向けられている差別の複合的なものについて、どうお考えなのかということをお聞きしたいです。また、山城さんには「混血児」と言われている人たち、占領下の中でも二重、三重に周縁化されていた人たちの見てきた戦争、占領はどのように記録されているのか、記録すらされていないこともあると思うのですが、それをどう考えるかということをお聞きしたいです。

最後に構造的な問題として、女性や子どもが周縁化されてきた一方で、そこに対して支援をすること自体、支援を受けること自体が実は暴力的な体制を継続させてしまうというような、そういうシステムの難しさもあるのではないかとも思っております。

長くなってしまいましたが、以上とさせていただきます。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

# 第3セッション【質疑応答】

司会：ミキ・デザキ（ドキュメンタリー監督）
オンラインQ＆A担当：ミヤ・ドゥイ・ロスティカ（大東文化大学）
発言者（発言順）：山城紀子（沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト）
ホセ・ジョエル・カヌディー（アテネオ大学）

［英語発言翻訳：甲斐下 裕子・川崎 剛］

**デザキ**　ジョエルさん、山城さん、質問へのお答えがありますか。

**山城**　現在進行形の問題だということは、本当に同感です。というのは、生き難さを抱えた人たちの問題というのは一番後から出てきたことです。特に女性への性暴力も含めてマイノリティーの問題というのは戦後70年あたりからやっと声が出始めました。そういう意味では今、戦後80年と言いながら、これまで本当に隠蔽されていた、蓋をされていた、沈黙の中にあったという問題が多くて、ここしばらくの間でやっと、精神障害者と沖縄戦とか、あるいはハンセン病と沖縄戦というような問題が出てきているわけです。

沖縄戦の被害の実態はなかったのかと言ったら、ものすごくあるわけです。けれども当事者も言わないし、家族も言わないし、地域も言わない。問題がありながら、あたかもなかったような状況にありました。基調講演でお話しされていた、あらかじめ排除されていた人たちの問題というのが、明るみに出るまでに何十年もかかるということが、実感で、痛感です。やっとここしばらく前からようやくそのテーマで話し合うようになったという意味では、全くの現在進行形の問題です。

それから、女性や子どもの問題が非常に後回しにされる、個人の問題として自


© 2026 SGRA

助努力というのを求められるというのも、これも日本で家族福祉が長く続いたゆえんです。私が福祉の取材を始めた時にとても感じたのは、「男がいない」ということでした。

それは、知的障害者も精神障害者も、いろいろな困難さを抱えた人の取材の現場にいくと、組織やグループの代表者としては男性の名前が出たりしますが、実態としてのケアという意味では福祉の現場は本当に女だらけの世界であったわけです。

問題解決のために立ち上がった女の人たち、例えば盲学校の戦後の再建に尽くした方にしても、沖縄のためとか社会のためではないのです。弟が全盲で戦地から帰ってきた、それまでに多くの家族を亡くしているから、生きて帰ってきたことが嬉しい。その弟の人生を可能性のあるものにしたいということで、沖縄の盲教育の再建に取り組んだわけです。要するに、社会のためとか沖縄のためとかというより、身内のためという小さな願い、この中で多くの女たちが立ち上がってやってきたのだと思いました。でも、それがなかなか沖縄の社会としては見えない、可視化されにくい。本人たちも、これは自分たちの個人の問題だからといった捉え方などをしていて、社会の問題というよりは女の問題としていたのではないかと思います。ですから、可視化したり、文字化するのはこれからなのだと思っています。

本土の復興と沖縄の復興という問題でも、沖縄で戦争があった、こんなにもいろいろなところで問題があるということが、まだまだ知られていないと思います。

例えば、ハンセン病の専門の方が沖縄に来たときに、なぜ今、日本ではハンセン病は発症0に近いんですかということを聞いたことがありました。今の日本は医療が発達してる、衛生状態がいい、人々の栄養状態もいいし、免疫力も備わってるというのです。

だとすると、その真逆な状態が戦争なわけです。衛生状態が悪くて、栄養状態が悪くて、免疫力が低い。実際にデータを見ても、戦後に沖縄のハンセン病患者がどっと増える。そこには大変な深刻な実態があるわけですが、訴える人はいないのです。

沖縄は共同体意識が非常に強いと言われてるところなのですが、以前の市町村史を見ると、門中墓（むんちゅうばか）という親族みんなのお墓の中に、ハンセン病だった人は入れない、精神疾患の人は入れない、自殺した人は入れないというような、ある種の掟のようなものがあるということが記されていて、それが関係者でも声を上げないことの大きな背景になっていたと思います。

沖縄戦の様々な被害の実態というのが現在進行形の問題であることと、マイノリティーの問題というのがいかに後回しにされたかということに、私はとても同感です。

**ジョエル**　手短に済ませたいと思います。その前に、皆様からの惜しみないコメントに心から感謝いたします。皆様のおかげでさらに深く自分の研究を理解することができ、ある意味非常に助かりました。



© 2026 SGRA

最初の発言で指摘された点について、私も全面的に同意します。つまり、私たちが見ているのは「平和への最後の一里」を測ろうとする試みなのではないかということ。それを測るうえで、こういった取り組みのなかで、測定のあり方をどう捉えるべきか。その可能性を提示できる領域の一つとして、こうした力学におけるジェンダーの影響を認識し、ジェンダーを測定の最優先事項に据えるべき、という点です。このような複雑な状況においてはなおさらです。

増渕あさ子教授のご指摘どおり、気候変動については、まだ十分な検討を行っていません。今後検討すべき課題の一つです。IPCC（Intergovernmental Panel on Climate Change：気候変動に関する政府間パネル）的な視点から考察するというよりも、気候変動が、自然環境だけでなく、ジェンダーに基づく暴力を経験している女性たちの証言に、どのような影響を及ぼしているのか、という点に注目しています。

洪水や気候変動がもたらす影響そのもの、というよりも、それらがリソースや政治情勢に与える作用こそが、共同体間または部族間の関係に直接的に影響します。こうした関係にはジェンダー的な側面が伴う可能性が高い。ジェンダーの問題は、どのような関係にも常に伴うからです。既存の関係が存在する場所には勢力闘争が絡んでくる。気候変動がもたらす課題によって状況がさらに悪化し、複雑化する可能性は常にあります。

これらはさらに発展しうる教訓です。それとともに、どう記憶にアクセスしていくか、どうアーカイブにアクセスしていくか―そこにある苦痛と可能性、今後の展開をどう理解していったらいいのか、どのような介入が可能なのか―これらがさらに重要です。気候変動から地政学的な立ち位置の変更に至るまで、課題に取り組むには、こうした視点が重要です。すべてが交差する、と私は考えます。われわれの課題は、いかにして交差的な視点を研ぎ澄ましていくか、ということでしょう。それは容易なことではありませんから。

今回の発表の作成には膨大な資料を要しました。ジェンダーに基づく暴力、差別、レイシズム、さまざまな構造的暴力がどのように交差しているかを特定するには、高度かつ複雑な分析と手法が求められます。扱う課題が混沌化するにしたがい、われわれの仕事も難解になっています。だからこそ、こうして質疑応答で多くの点を明確にできることを、非常にうれしく思っています。

**デザキ**　回答ありがとうございます。次に、質疑応答に移りたいと思います。ご質問のある方は、前の方までいらしてください。

**フロア 1**　山城さん、ありがとうございました。お母さんの悲しみが伝わってきて、やはり一番犠牲になるのはお母さんとか子どもたち、赤ちゃんなんだということを本当に感じました。

そして、ジョエルさんに質問があります。

ジョエルさんは、最も成功したピースプロセスを達成されたのだと思いますが、今、パレスチナ、ガザでジェノサイドが続いています。ジェノサイドをどうしたら止められますか。どうしたら停戦を達成できるでしょう。コメントをお願





© 2026 SGRA

いします。

ジョエル　ミンダナオの文脈でなされたことを、他のどこか、パレスチナのようなところにどのように適応できるかという質問であると理解します。

ミンダナオ、バンサモロの経験は、ご指摘のように、下からのボトムアップです。私たちはこれを政策決定者たちにまかすことはできません。ある意味の「権力」に委ねることはできません。権力は地域から耕されねばなりませんでした。ピースプロセスの成功は、（ある程度の成功だったわけですが、）一晩で起きたことではありませんでしたし、権力構造の中に戦略的に位置する誰かによる戦術的、戦略的な動きがあったからでもありませんでした。市民、市民社会、共同体、研究者たちの活動の成果だったのです。全共同体、全国民、世界のアプローチといえました。事実、ミンダナオのピースプロセスは、多くの国際的またローカルなアクターが、力関係をこのまま残していたらとても困難であると理解してプロセスに関与し、初めて軌道にのりました。世界がガザやウクライナの状況にどう立ち向かうのか世界次第だと思います。なぜなら、私たちが政治権力に委ねている限り、針は動かないと思います。力は下から出てきます。加えて、おそらく時間を通して、下と上にあるものが出会います。それがおそらくわれわれが今できることです。実際に苦難を止めることではないかもしれませんが、何らかの前進をもたらし、今よりはるかによい場所に向かう後押しをします。

デザキ　質問ありがとうございます。次は、オンラインからの質問です。

ミヤ　ジョエルさんに、オンラインからの質問です。「今回のテーマは、いわゆるフィリピン版中東問題だと理解できるでしょうか。つまり、もとを辿ればアメリカ統治時代にキリスト教住民がイスラム教原住民の土地に入植したことが要因。ただし、中東問題と相違点がある。歴史的観点からその土地は原住民の居住に属すものであり、後からの住民のものではなさそう。さらに大昔のオーラルヒストリーによると、近隣国との様々な交流も盛んに行っていた。例えば、一説によれば、「鄭和七回南下」の際、ある部下の方々は、地元に住み着いて土着化になってしまったそうです。従って、問題が根深く、およそそう簡単に解決できるものではないでしょうか」とのことです。

ジョエル　はい。パレスチナのケースとミンダナオのケースには類似点があります。どちらも植民地の遺産です。中東で見ていることは、分割が直接もたらした結果です。1945年の分割だけでなく、英国統治全期間を通じての。

ミンダナオの紛争は、（ある意味で沖縄返還に類似していますが）、アメリカがこの地域の人々が大フィリピンに属したことがないと決めてしまったことに根ざしています。事実として、国家としてのフィリピンは、スペイン人が来る前、そしてアメリカ人が来る前には存在しなかったのです。国家を想像することは、植民地主義の反作用として発生した国民主義運動の枠内で生まれたのです。このことが、国をどう想像できるか、どこに国が従事できるかという境目も決めまし



© 2026 SGRA

た。ポスト植民地の力学や、権力や政治の相互作用が現在ある実態を形作ってきました。ですから答えはある意味でイエスで、植民地主義に根ざしています。地上の人々は自分たちが地域に土着していたのであり、そこに住む権利があると確信していますが、同時に、地域に移動して定住してきた他のグループ、別の共同体もあるのです。移民ナショナリズム（settler nationalism）といったものもあるのです。だから類似点はあります。以上です。

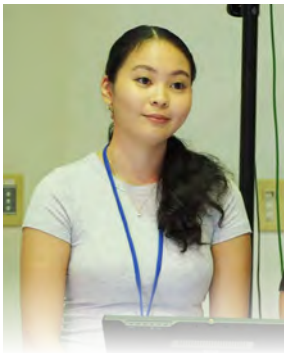
デザキ　時間になりましたので、セッションを閉じたいと思います。スピーカー、コメンテーターのみなさんありがとうございました。拍手をお願いします。





© 2026 SGRA

発表４－１



# 沖縄の基地暴力とジェンダー：
## CSW 国連女性の地位委員会に性暴力を訴える
## ―沖縄県内の動きを中心に―

松田 明
沖縄キリスト教学院大学卒業生

徳田 彩
沖縄キリスト教学院大学

## １．CSW69に参加して

本日はプレゼンテーションというよりは、３月に私たちが参加したCSW69についてお話ししたいと思います。

私たちは今年2025年3月10日から21日までの2週間の日程でニューヨークの国連本部で開催された第69回国連女性の地位委員会（CSW）に日本YWCAのユース代表として前半の1週間に参加しました。

CSWとは、毎年3月に開かれる、女性の地位向上を目的とする国連加盟国の会議です。今回のテーマは「Beijing +30」（北京「第4回世界女性会議」から30年）でした。

会期中、「脅威のもとで暮らす～在日米軍基地問題を共に考える」をテーマにパラレルイベントを開催しました。この発表を通して、来てくれた人たちに「この問題を自分ごとにしてもらう」をイベントの目標として、私たち２名を含め本土から3人、合計5人のユースのメンバーで発表を行いました。

## ２．「伝えること」が未来を変える力に

私たちが行ったパラレルイベントでは、プレゼンテーションに加えて、会場に来られた方々との感想の共有や基地問題についてのディスカッション、そして最後に「沖縄へのメッセージ」を書いたリボンを一つに繋げるアクティビティを行いました（スライド参照）。



© 2026 SGRA

プレゼンテーションの内容ですが、私たちは「沖縄の声」として、沖縄で起きた女性暴行事件や軍用機体の墜落事故の話と、戦後から今までの県民による抵抗運動と強化され続ける軍事力についての問いかけを行いました。また、名古屋YWCAの沖崎さんが「構造的問題」について、東京YWCAの国吉さんが「歴史的背景と法制度」について、そして長崎YWCAの安野さんが「抵抗運動」について発表しました。

今回のCSWで私が特に強く感じたのは、「伝えることの大切さ」と「知ることの大切さ」です。ディスカッションの場でアメリカの方とお話しした際に、印象に残ったのは次の言葉でした。

> 「自分の国の軍隊が他の国でそんな酷いことをしているなんて知らなかった。沖縄がどこにあるのかすらわからなかったけれど、今回あなたが伝えてくれたから知ることができた。伝えることは勇気のいることだったと思うけれど、伝えてくれてありがとう」

この言葉を聞いたとき、涙が出そうになりました。最初は「私たちの思いが伝わるのだろうか」「理解してもらえるのだろうか」と不安を抱いていましたが、実際に声を届けることで相手の意識や視点に変化を与えられるのだと実感しました。そしてその瞬間に、「声をあげて本当によかった」と心から思いました。

また同時に、沖縄の問題は私たちの身近な現実であると同時に、世界の人々にとっても「知るべき課題」であると改めて感じました。知ることで関心が生まれ、関心が行動へとつながっていく。その一歩を作るために、私たち一人ひとりが勇気をもって発信していくことが大事なのだと学びました。

この経験を通して、私は「伝えること」は単に情報を届ける行為ではなく、未来を少しずつ変えていく力を持つものだと気づきました。たとえ小さな一歩でも、確かに沖縄の明るい未来へつながっていると感じています。これからも私は、沖縄の平和な未来のために行動を重ね、声をあげ続けていきたいと思います。


© 2026 SGRA

## 3．対話することの重要性を実感

若者の視点から社会課題を議論し、多様なバックグラウンドを持つ人々と意見を交換できたことはとても貴重な経験となりました。イベントには多くの国から参加者が集まり、特にアメリカの方々が積極的に議論に参加してくださったことが印象的でした。というのも、今回のテーマは「脅威のもとで暮らす～在日米軍基地問題を共に考える～」であり、正直、アメリカの方々がこのテーマをどう受け止め、どのような反応があるのか、批判されたり、対立したりしてしまうのではないか、という不安もあったからです。

しかし、会場に来てくださった皆さんは真摯にプレゼンテーションを聞いてくださり、その後のディスカッションでも多くの質問や意見を交わすことができました。特に、私が入ったグループは全員がアメリカ人で、まず全員が口をそろえて言ったのは「知らなかった」という言葉でした。この一言は、声を出して伝えることの大切さを改めて実感させてくれました。

また、議論の中で、アメリカでも軍に入隊する背景には経済的理由や環境要因が大きく関わっていること、退役後にPTSDや補償不足、ホームレス化といった課題があることを知りました。さらに、ハワイからの参加者からは、「沖縄の基地問題はハワイとも似ている」との指摘があり、基地を抱える地域同士の共通性を感じました。

この経験を通して、敵や味方といった立場を越えて、同じ課題に向き合い対話することの重要性を強く実感しました。また、世界各地にあるアメリカ軍基地の地域同士が繋がり、協力して活動することで、この問題に対する新たな視点や解決の糸口が見えてくるのではないかという関心も芽生えました。

この体験の意義は、「声を届けることの大切さ」と「立場や国境を越えた対話の可能性」を実感できたことです。今後も、基地問題に限らず、共通の課題を共有する地域や人々と繋がりながら、新しい解決策を共に考えていきたいと思います。



© 2026 SGRA

発表4－2

# タイにおける若者フェミニスト運動の旅路

ニチャカーン・ラクウォンリット／ミミー
タイの学生活動家

［原文は英語、翻訳：川崎 剛］

## 1．若者たちのフェミニスト運動はいかにして形作られたか

ミミー（Memee）と申します。タイのバンコクを拠点にする学生活動家です。今日はタイにおける若者のフェミニスト運動の歴史、ほかでは見られない特徴、私たちが直面した挑戦、運動がどこに向かっているのか、などについてお話しします。

タイにおける若者のフェミニスト運動を理解するためには、この運動が2020年の民主化を求める抗議行動とともに成長してきたことを見ることが重要です。若者のフェミニスト運動と民主化運動は別々の運動ですが、共同で活動を始めました。しかし、民主化運動参加者の多くが、ジェンダーの公正（gender justice）は後回しにできると考えていたので、難しい側面もありました。しかしフェミニスト運動として私たちは、民主主義はジェンダーの公正を伴っていくべきだということを明確にしてきました。

まず、フェミニスト運動がいかに形作られ、広範な闘争に結集していったのか短くお話しします。次に、私たちが直面した障害についてお話ししますが、それは告発や監視、いやがらせなど国・公権力によるものと、ジェンダーに基づく暴力（gender-based violence: GBD）のように共同運動の内部からもたらされたものの両方です。最後にタイの現在の政治的背景と、若いフェミニストたちがどのように活動の新しい方向を形作っているか考えます。

これは、私が友人たちと一緒に抗議する写真です（スライド1）。不敬罪（lèse-majesté charges）があるので、多くの友人たちは逃げました。何人かはまだ収監されています。私は今日ここに立ってみなさんに報告できることを幸運であると思っています。これまでの紹介で、私が本日何を語るかについて、なぜ若いフェミニスト運動がタイの2020年の民主化運動で重要だったかについておわか


© 2026 SGRA

スライド 1

りいただけると望んでいます。

2020年、タイでは若者主導の大規模な民主化運動が起きました。引き金をひいた要因は複合的で、新型コロナ感染症（COVID-19）、経済的困難、そしてカンボジア滞在中に何者かに拉致されたタイの活動家ワンチャラーム・サトサクシット（Wanchalerm Satsaksit）の行方不明事件などがあります。もうひとつの引き金は新未来党（Future Forward Party：FFP）の解散でした。FFPは進歩派を代表しており、繰り返される軍事クーデターに捕らわれた国の若者たちに希望を与えていました。抗議運動の原因と展開に理解を深めるために、このQRコードをスキャンして、記事を読んでください。

主要な要求は民主主義、首相の辞任、国・公権力のハラスメント停止、新しい国民憲法などでしたが、運動は一歩進めて君主制の改革を要求しました。これは王室誹謗を犯罪とする不敬罪（lèse-majesté law）として知られるタイ王国刑法112条の撤廃要求を含みます。しかしこれらの若者主導の抗議対象はこうした主流の要求だけではありませんでした。すなわち、他の項目を糾合する経済、環境、そして重要な項目としてジェンダーの公正とフェミニズムが含まれるプラットフォームになったのです。

フェミニスト運動は多様な要求を街頭にもたらしました。性暴力の根絶、レイプ文化に対する挑戦、人工妊娠中絶の権利容認、LGBTQ＋とクイアの権利拡大など。私たちはまたセックスワークも労働であると主張しました。そうです。セックスワークはリスクを伴うので、もし女性が本当に平等な選択ができれば、多くの女性がこの労働を選ばないでしょう。しかし、経済的抑圧の状況下では、セックスワークは現実なのです。タイでは、セックスワークが存続すべきかどうかという点では不一致でありながら、セックスワークは合法化され、サービスを提供する者は保護されるべきだという広範な認識があります。現状では、セックスワーカーは嫌がらせや虐待に直面します。被害を受けても警察には届けられない、なぜならもし届けても、警察はセックスワーカーを保護せず、彼らに嫌疑をかけ、逮捕するでしょうから。これがタイのフェミニストが現実的な政策を強く要求する理由です。少なくとも私たちは、セックスワーカーが取り残されないよ



© 2026 SGRA

うに、彼らの安全と承認を守る政策を求めます。運動の先頭にいるこちら側の女性たちだけではありません。運動の指導者たちはレスビアンやトランス女性、性自認がひとつでないノンバイナリー・ピープル、LGBTQ＋コミュニティーの人々もいます。これはタイのフェミニスト運動の特性を示しています。私たちは「女」と「クイア」の間で分断されておらず、同じ運動の各部分であるのです。

この運動の重要なカギになる概念は、「ジェンダーの公正がない民主主義には価値がない」という呼びかけでした。しかしこれは社会運動の内部にある性的ハラスメントに直面しました。もうひとつの重要な瞬間は、タイのフェミニストがチリにおける抗議パフォーマンス「そこにいるレイピスト（A Rapist in Your Path）」を採用した時でした。グループで協力して飜訳し、いくつかの抗議行動の場で演じました。セリフの大義は「どんな服を着ようと、どこに行こうとそれは私の落ち度ではない。レイプしたあなたの責任だ」というものです。犠牲者を非難する社会の態度に挑戦したのですが、これは運動内の抗議者にすらある態度でした。

このパフォーマンスはジェンダー問題を超えて大きく大衆の関心を引きました。賛否両論を呼び、パブリックな討議に発展しました。パフォーマンスによって様々な問題を論じるいくつもの異なったバージョンに成長しました。セリフをさまざまな問題にあてはめました。学生サークルの問題、経済的不正義や労働者の権利、そして司法の不正義など……。これは、フェミニズムが単なる傍注ではなく、タイの民主化運動における駆動力であることを示しています。

タイフェミニスト解放戦線（Feminist's Liberation Front Thailand）についてもっと知るために、運動が結成されたときの名称に戻ることが必要です。最初は女性解放戦線（Women's Liberation Front Thailand）と呼ばれましたが、大規模な抗議行動の後、人々と友人が集まって名前を「フェミニスト」に変えたのです。私たちは運動をすべてをひっくるめるインクルーシブにしたかった。なぜなら運動は「こちら側の（生まれた時の性を自認する）」女性たちだけのものではなかったからです。

## 2．私たちが直面した多くの障害

多くの問題がありました。まず、国・公権力からの圧力です。多くの運動と同様、世界中のすべての運動が直面するのですが、表現の自由の行使に犯罪嫌疑がかかります。また、前に述べたように不敬罪を含めて数多くの法律が活動家に対し使われました。その数は2020年以来、200件以上にのぼっています。現在、59人の政治犯が収監されていますが、そのうち29人に不敬罪の嫌疑がかけられています。

不敬罪のほかに別の法律がしばしば活動家に対して使われます。それは新型コロナ感染症の最中に使われた緊急命令（Emergency Decree）、大衆集会条例（Public Assembly Act）、コンピューター犯罪法（Computer Crime Act）などです。抗議運動を組織したフェミニスト運動家たちが、民主化運動の活動家と同





© 2026 SGRA

じように訴追されています。私個人は、七つの容疑がかけられていますが、そのうち五つは未成年としてです。私にとってそのうち二つが特に重要でした。一つ目は、政治犯の釈放と刑務所に収監されている女性たちの待遇改善を求めて抗議集会で行ったスピーチです。私は緊急命令と大衆集会条例で起訴されました。法執行の過程で、私のような未成年に対して、事件を免訴する代わりに「代替更生プログラム（diversion program）」に加わるようにという非常に大きな圧力がありました。私は拒否し、更生プログラムには従わず、判決を求めて闘うことを選びました。私のケースは、判決の出た最初の未成年政治事件になりました。事件は最終的に却下され、判事は、私の活動が表現の自由を保証する憲法の権利として保護されていると認めたのです。

私に対する二つ目の重大な事件は、保健省前で行われた新型コロナ感染症対策改善要求の抗議中に起きました。当時の保健省報道官に、官僚に対する誹謗の嫌疑で訴追されました。そしてこの件では、「代替更生プログラム」に加わりました。しかしながら、交渉の中で、報道官は「ワイ（合掌）」という敬意と服従の意志を示すタイの伝統的な手のジェスチャーで私が謝罪することを要求しました。彼の秘書官は私が謝罪する写真を撮ろうと待ち構えていました。最初、私が謝罪を拒否すると、彼は非常に怒りました。判事が介入し、私にただ従うように求めたので、私はそうしました。その後、私の写真がネットに流出し、私たちが法廷に抗議すると、判事は彼に削除を命令しました。これとは別に、彼は私に保健省にある王室の像の清掃を命じました。私は「公共サービスのようなことをやらせたいのなら、病院を掃除できないでしょうか」と言いました。しかし彼は王室の像の清掃が必要と言い張ったので、これは明らかに政治的象徴でした。さらに、私は保健相に対して謝罪の手紙を書くよう命じられました。彼の名前はアヌティン・チャーンウィーラクーン（Anutin Charnvirakul）。先週首相になりました。

国・公権力のおどし、いじめに加えて、活動家はネットの嫌がらせにもあいます。フェミニストやクイア運動の活動家は外見や扮装のせいで嫌がらせされたり、批判されたりします。主流の民主化運動の抗議者や活動家が受けないような、品位をおとしめるような言葉で侮辱されるのです。

いやがらせは運動の外からだけではなく内部のものもあります。性的暴力は、未だに運動の中でみられますし、犠牲者が運動を守るために沈黙を強いられる圧力を受けたり、そうでなければもし声をあげたら運動に損害を与えると言われたりするのです。興味深いことがあります。それは多くの運動指導者がLGBTQ＋コミュニティーに属しながら、自分たちのアイデンティティーを公の舞台で代表することには躊躇して、異性愛規範の体裁を守ろうとすることです。

現在、運動は割と静かですが、結集して行動を準備すべき時期になっています。

ここで強調しておきたいのは、タイにおける軍部の力の伸張です。タイとカンボジアの紛争をご存じだと思いますが、タイにすでに植え付けられているナショナリスト（国家主義者）のナラティブは今急にもたらされたものではありません。紛争が始まる1年前に、「タイ・ミルクティー同盟（Milk Tea Alliance Thailand）は、影響作戦に見られるように、国家主義者の論調が強まっている兆候に気づきました。昨年、タイ政府は児童の権利を難民の児童にも拡大する



© 2026 SGRA

「子どもの権利条約」22条を保留してきたのを解除する望ましい決定をしました。そうすると即座に、ティックトックやフェイスブックの何千ものアカウントが、移民の児童が自動的にタイ国籍を付与されるという誤情報を発信し始めました。移民への攻撃だけでなく市民政権への攻撃でもあるこのような行動は、新未来党（Future Forward Party）の後継である野党の人民党（People's Party）がミャンマー人民との同盟であるとでっちあげるものでした。彼らの名前は、「ミャンマー人民党（Myanmar's People Party）」などと歪曲されました。このナラティブは、軍国主義的なものです。

この後、さまざまな作戦が見られました。身体的なものさえありました。そこでは一人のビルマ人活動家が英雄を自称する者により襲撃されたり、市場が襲われたり、未登録の移民労働者の拘束が呼びかけられたりしました。同じような戦術がタイ南部のイスラム教徒にも拡大されました。私たちはわかったことをビルマの活動家とも共有したのですが、彼らは直ちに理解しました。ロヒンギャ迫害のキャンペーンのときに同じプロパガンダを経験していたからです。ジャーナリスト、ミャンマーの同盟者、「虹のパンダのボニ（Bonni of Rainbow Panda）」の支援を得て、私たちは2020年から21年にかけてのミャンマー移民に関する偽情報のパターンを分析するバックグラウンドペーパーを製作しました。しかし私たちが発表してまもなく、ナショナリスティックな感情に火をつけタイ・カンボジア紛争をあおる作戦はすでにその目的を達成していたのです。

これ以後、ナショナリズムが高揚し、政治は弱くなっていきました。この間にすでに3人の首相が交代しています。現職はタイの感覚では直接に右派の人物で、上院多数派を形成しています。政治的抑圧は強まっています。今週、裁判所は4、5年前の不敬罪事件の新たな収監判決を出しました。さらに大規模な判決も差し迫っています。まとめると、要するに、タイでは軍部の力が増し、ナショナリズムが増長し、抑圧も増すサイクルに再び見舞われています。政治はますます不安定に見えます。

## 3．今後の展望

さて、暗く重荷をせおった過去に次いで、未来についてお話しします。ここで政治状況についてお話しする必要があるのは、タイのフェミニスト運動は民主主義と政治と決して切り離せないからです。政治で起きることが直接に私たちのスペースを形作ります。今のこの静かな期間に何か新しいことが出現しています。2020年のフェミニスト運動の間には起きなかった何か、それはたくさんのフェミニスト・クラブが出現し、成長していることです。たくさんの、多分10くらいのフェミニスト・クラブが大学のさまざまな学部から生まれています。これまでに起きたことのない現象で、フェミニスト組織がひとつの運動に向けて力を合わせています。今では多くの若い団体があります。彼らの主要な目的はキャンパスに安全な空間を作り、大学や学生サービスと協力して「ジェンダーに基づく暴力（GBS）」による犠牲者支援の相談窓口を提供したり犠牲者を支援したりする





© 2026 SGRA

ことです。彼らはまたキャンパス外でも、ミャンマーやロヒンギャ支援などの共同行動や、（1976年10月６日の）「血の水曜日事件」を記念するフェミニスト抗議を通じて連帯を示してきました。

私はもし3年から5年の間に大衆動員の新たな波が起これば、こうしたフェミニスト・クラブが運動の種になると信じています。運動内でのジェンダーの安全は必要な指針として認識されつつあります。人々は、ジェンダーの安全はオプションなのではなく、真剣に取り組まなければならないと理解したのです。国境や地域を越えた連帯のために最近では「SEAblings」（きょうだいたち）と呼ぶトレンドがあります。私たちは東南アジア諸国からインドネシアの状況への連帯を示してきました。私たちタイの活動家にとって、違う国々と地域に及ぶコンテキストから学ぶことは重要です。なぜなら私たちの地域の政治的回路のパターンを認識するのに役立つからです。

日本の友人のみなさんが、支援してくれる最良の方法は、私たちの国についてステレオタイプから離れて背景と状況を単純に理解してくれることです。個人的には学生や、積極的行動、人権、社会運動などに興味を持つ誰とでも連携したいと思います。私たちの団体はいつも協調にオープンです。

これが本日お見せしたい最初の共同運動「フェム・サームヤーン（FemSamyan）」です（スライド２）。サームヤーンは、チュラロンコン大学周辺の地名です。これはチュラロンコン大学の集団的なフェミニストコミュニティーです。独立したクラブであり、大学から金銭を得ておらず、貧しい団体です。私たちはさまざまなフェミニストたちと共同行動をめざしているので、私はこれを集団的なフェミニスト行動の空間と呼びます。キャンパスにおける「ジェンダーに基づく暴力」の犠牲者を支援する方法を開発するために大学や学生同盟とも協力します。

これは、タイ・ミルクティー同盟（Milk Tea Alliance Thailand）です（スライド３／p94）。お聞きになったことがあるかもしれません。当初、ミルクティー同盟は4、5年前に流行ったオンラインのミーム（meme）でした。タイのミル

スライド２

© 2026 SGRA

クティー同盟は、ミャンマーのクーデター後に動員された「ミルクティー同盟『ミャンマーの友人たち』」の上部団体です。タイ・ミルクティー同盟から私たちは主に東南アジアでアジア諸国の困っている人々と連帯します。私たちはタイのローカルな活動家とも協同します。私は地域活動家なので、私が彼らとともに活動しているとは言いませんが、しかし、そう、私たちはともに自分たちの視野を拡大し、地域のパターンを認識し国に提言したいと思っています。私からは以上です。ありがとうございました。

スライド 3

© 2026 SGRA

発表4－3

# 沖縄戦の記憶を聴く：
## 体験者との交流を通して

中塚静樹
沖縄大学

## 1．語り部の方との出会い

沖縄大学人文学部国際コミュニケーション学科4年の中塚静樹です。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私は大学の副専攻で「沖縄学」を履修し、これまで沖縄の歴史や文化について学んできました。なかでも歴史について関心を持ち、沖縄戦や戦後の沖縄社会における基地問題について学び、発信する活動を行ってきました。本日は私のこれまでの活動を紹介し、今後これらの問題をどのように広く発信し次世代に繋げていけるかを考えたいと思います。

まず、私がこのテーマに関心を持ったきっかけを話したいと思います。大学2年生の時に、「戦後の沖縄から見る社会」という授業の中で吉川麻衣子教授の話を聞いたことがきっかけでした。そこで、沖縄戦を生き抜いた人々の精神的苦痛を知りました。それまで、沖縄戦が生存者に残した傷や苦しみ、トラウマなどにあまり目を向けず沖縄戦を大枠で捉えていた自分に深く反省し、歴史をもっと幅広い視点で捉え直さないといけないと思いました。

また、この授業である語り部の方を知りました。吉川教授の小学生時代の恩師である、翁長安子氏さんです。沖縄戦当時15歳で、沖縄特設警備隊第223中隊（通称・永岡隊）に看護要員として加わり、地上戦を経験しました。何度も死の危険に直面しながらも、「生きたい」という思い一心で激戦を生き抜いてこられました。私はそんな翁長さんの体験や平和への想いを実際に聞いてみたいと思い、沖縄戦のフィールドワークで初めて講話を聞きました。

軍国少女だった当時の心情、戦場で見た光景、安国寺での馬乗り攻撃など自身の体験を語られました。体験者の語りを実際に聞き、これまで感じたことのないようなリアリティを覚え、遠い昔の歴史であった沖縄戦をより近いものとして捉えることができました。また、体験者が語る意義、語りの重要性を実感しました。



© 2026 SGRA

さらにこの時、元ひめゆり学徒隊の島袋淑子さんと話す機会もありました。私はその時聞いた言葉が今でも強く心に残っています。「戦争で亡くなっていった友人たちに平和な時代を見せてあげることができなかった。自分だけが生き残ってしまって申し訳ない。」という戦争さえなければという思いと、戦後ずっと自責の念とともに生きてきた姿は非体験者の私にとって「沖縄戦とは何だったのか」ということを考えさせるものでした。加えて、体験者にとって沖縄戦というのは区切りがあるものではなく、今に続く地続きの問題であるということに気づきました。

## 2．沖縄戦の語り継ぎ手として

### （1）縦のつながりの大切さ

私はこの出会いをきっかけに沖縄戦の語り継ぎ手として彼女らの思いを次世代に繋げていきたいと思い、月に2回ほど会うようになりました（スライド1）。交流の場では、みなさん暖かく迎えてくださり、学生時代の話や戦前の街の様子など話してくださいました。また戦後の収容所での話や遺骨収集の話など戦前から戦後までさまざまなお話を聞かせてくださいました。なかでも翁長さんの永岡隊での体験は想像を絶するもので沖縄戦の凄惨さを感じさせるものでした。交流を通して翁長さんは私に「私と同じような思いを二度とさせたくない。これからの時代はあなたたちが作っていくもの。平和を作る担い手となってほしい。」といつも語りかけられます。

私はこの思いも踏まえ、ひとりでも多くの人が語り継ぎ手となるきっかけが作れないかと考え、今年2025年の5月、沖縄大学に翁長氏を招き平和学習会を開催しました。学習会には、約50名の同世代が集まり、当時の翁長さんと年齢の近い高校生も参加してくれました。翁長さんは永岡隊での体験を語られ、若者の

スライド1

**ひめゆりコーラス**
**Himeyuri Chorus**

・月に2回交流。ユンタク。
・戦争体験に加え学生時代の話や戦前の様子、捕虜収容所での体験、遺骨収集など様々な話を聞いた。
・元気な姿を見る機会。

・Meet twice a month. Yuntaku.
・In addition to war experiences, stories about student days, life before the war, experiences in prisoner-of-war camps, and the collection of remains were shared.
・An opportunity to see other lively elders.





© 2026 SGRA

次世代への継承に期待を込めた講話でした。講話の最後には、「戦争を起こさせないためには、社会をしっかり見つめることが大切。戦争を起こすのは政治家である。政治の動きをよく見て、戦争を起こさない政治家を選んでほしい」と戦争はある日突然起こるものではないからこそ、社会に関心を向け戦争に向かわない社会を作ることの重要性を訴えられました。

私はこの学習会を通して世代のつながりを感じました。永岡隊長の「生きてこの戦があったことを語ってくれ」という使命を受けてこれまで自身の体験を語られてきた翁長さん。それを聞いてこれまで沖縄戦の研究をされてきた吉川先生。そして、吉川先生の話を受けて、沖縄戦への関心を強く持ち翁長さんとの交流をしてきた私。歴史、記憶というのはこのように語りによって次世代へとつなげられていくのだと、世代を超えた語りの大切さ、縦のつながりの重要性を実感しました。

## （2）横のつながりを広げるために

一方、私は同世代、地域を超えた横のつながりも重要だと考えています。昨年の11月、「平和へのウムイ（思い）」発信・交流・継承事業というものに参加しました（スライド２）。沖縄と同様に悲惨な戦争体験等を有し、体験の継承と平和構築に取り組むアジア７地域（韓国・カンボジア・台湾・ベトナム・長崎・広島・沖縄）の学生が5日間ともに学び、相互理解を深め、平和を考えるプロジェクトです。これまで沖縄戦を学んできた私にとって、自国の加害に深く触れる機会となりました。琉球処分、沖縄戦、米軍統治、過重な米軍基地負担など日本（ヤマト）からの被害性を有する沖縄ですが、アジア諸国から見ると、かつて植民地統治などを行った日本の一地域として捉えられ、加害の一部となります。このように自国の加害と沖縄という被害の側面がある中で、沖縄戦、沖縄の問題を伝えていくためには、自国の加害を理解し、戦争責任と向き合うことだと学びました。

スライド２

© 2026 SGRA

今後、さらに体験者が減少する中、沖縄戦を継承し、そして沖縄を二度と戦場にさせないようにするには体験者から非体験者への縦の継承だけでなく、若い同世代、地域を超えたつながりが非常に重要になると思います。また、近隣諸国との友好関係を築いていくためにも、日本に暮らす国民自身による戦争責任の検証が不可欠になります。80年前の出来事を歴史物語にして風化させては決してならず、一人一人の歴史との向き合い方が問われます。自国の加害性とも真摯に向き合い、平和主義を掲げる国としての自覚と責任を持って、国際社会に平和をもたらす役割を日本が担っていくことを期待します。

「平和へのウムイ」事業では、各地域の学生との交流もたくさんあり、部屋でお酒を飲みながらおしゃべりをしたり、国際通りで一緒に食事したりと充実した時間を過ごしました。プログラムを通して各地域の仲間と交流し仲を深めることができました。ですが、その前提にはプログラムを通した各地域の歴史に対する相互理解があったからだと思います。近隣諸国に対する脅威やネットでの情報操作が広がる中、先入観だけで判断するのではなく、実際に交流して価値観を共有し合うことが重要だと考えます。実際の体験に基づいて物事を判断する、一人一人のリテラシーが大切になると思います。そのためにも、地域を超えた交流を沖縄から進めていき、相互理解を深め、横のつながりを広げていけたらと切に願います。

### （3）沖縄戦の語り継ぎ手養成講座

このように横のつながりを広げる事業とは別に、「沖縄戦の語り継ぎ手養成講座」も受講しました。本事業は、戦争体験者の高齢化に伴い、平和講話（学習）を実践できる人材を育成するための講座を実施し、次世代への語り継ぎ手を育成するものです、前者とは逆に、縦の継承に重きを置くものです。講座は全14回で、講師による基礎学習やフィールドワーク、ファシリテーター育成のために平和学習の実演やロールプレイ学習などがありました。講座の最後には、グループで考えた平和ガイド案を発表しました。そこで目を向けたのは、「モノ」による継承でした。体験者が減少している今、戦争の記憶を伝える遺跡や慰霊碑など、「モノ」の存在がますます重要になってきます。今後、「人」から「モノ」へと継承の手段が変わっていく中、歴史を風化させないために、「モノ」が持つ意味や歴史にも私たちは目を向けていかなくてはならないと思います。

## 3．平和をつくる当事者として

さらに私は、フィールドワークを通して遺骨収集も経験しました。沖縄戦から80年が経過した今もなお沖縄の地には、遺骨が眠っています。たった1メートル四方を掘っただけでもいくつもの遺骨が見つかり、沖縄戦の痕が未だ多く残っていること、そして自分自身がそれと隣り合わせに生きていることを実感させられました。私が思っている以上に沖縄戦は近くにあり、自分にも関わりがあると





© 2026 SGRA

いうことです。遺骨は80年という年月とともに風化が進んでおり、判別が困難になっています。沖縄戦の痕をいかに見つけ出し、記憶し、継承していけるかが私たちに課せられた大きな課題だと思います。

加えて沖縄に関しては、広大な米軍基地が存在し、その割合は全国の米軍専用施設の約70%を占めています。このように基地問題を抱える沖縄では戦後の米軍統治や米軍の事件事故、騒音など過重な基地負担により体験者に大きな心的ダメージを与えています。戦後、米軍による度重なる事件事故、米軍機の騒音は体験者のPTSDを引き起こしました。私は、戦争体験者との交流を通して、これらの事件事故が沖縄戦の記憶と深く結びついていると感じました。沖縄戦というのは、今の私たちの生活とも深く結びついていており、平和を考える者として、基地問題に対しても目を向ける必要があります。その上で私は、沖縄戦と基地問題を切り分けて考えるのではなく、一貫して考えていくことが重要だと思っています。

基地問題に関わることとしては、昨年12月に行われた米兵による少女暴行事件に反対する県民大会に登壇し、沖縄から抗議の声を上げました。被害に遭ったのは16歳未満の少女であり、大変遺憾で許し難いものです。この事件の被害者は16歳未満であり、翁長さんの当時の年齢とほぼ同じです。戦後80年近くたった今でも、軍隊により沖縄にくらす人々の平和が脅かされ、それが度重なる現状は異常としか思えません。軍隊により平和が阻害されていることに関しては、80年前と変わりはありません。これまで翁長さんたちの話を聞いて私にとって、今もなお女性や子どもが危険に晒されていることに胸が痛みます。沖縄が平和を願うことはこんなにも難しいものなのでしょうか。

ですが、こうした思いがあったとしても県民大会へ出ることへの躊躇いがありました。それは加害者が男性であり、自分も男性という立場から発言することで、被害女性のトラウマや恐怖につながる恐れがあるからです。自分が声を上げることで被害女性が苦しまないか、自分が声を上げることを被害者は望んでいないかもしれないと悩みました。加えて、私は県外出身であり、かつ男性であるということから、当事者性の低さや特権を持っている立場でもあります。

しかし、米軍人による事件事故はこの一件だけでなく、戦後立て続けに起こっており、平和を脅かしています。また、県民大会のテーマは「なかったことにしないで」でした。私はあの時事件を見過ごし、声を上げないという選択を取ることもできましたが、これ以上被害を生まないためにも、声を上げなくてはならないという思いが強くありました。性暴力というのは女性だけの問題として捉えられがちですが、男性も被害に遭う可能性もあり、加害者も男性が多く無関係なものでは決してありません。事件から目を背け、なかったことにさせないためにも、男性である私が声を上げることで男性の意識、同世代の意識を向けられるのではないかと考え、かつテーマを鑑み、声を上げることへの重要性を感じ、登壇を決意しました。また、私には特権を持ちこれまで加害側にいた者として、県外の人々に伝える責務があると思います。県民大会を通して、県外の友人や知り合いから、「スピーチ見たよ」「新聞記事読んだよ」「沖縄でこのような事件が起こっていたことを知らなかった」と、微力ではありますが意識を向けさせること



© 2026 SGRA

ができたのではないかと思います。

県民大会を終え、政府や各政党に要請行動に行きました。具体的な防止策や問題点を示さず、形式的な謝罪に憤りを感じました。なかなか思うような対話はできず悔しい思いをした一方で、日米地位協定の問題に関しては、領域主権や航空特例法、身柄引渡しの問題など共感し合える場面もありました。日米地位協定をはじめ基地問題というのは沖縄だけの問題ではなく、日本全体の問題です。日本の安全保障を大切に考えるのであれば、その皺寄せを受ける沖縄の現状から目を背けることはあまりにも無責任であり、加害へ加担することにもなります。

私は、基地問題の一つでもある日米地位協定改定への世論を高めるために、同世代の若者と「What is SOFA?」という団体を作りました。各地で勉強会の開催、改正を求める人の輪を広げ、地方自治体で日米地位協定改正の請願・陳情・意見書を提出するなどイデオロギーを超え、政治家・学者・ジャーナリスト、そして市民が幅広く協力することを目指します。

戦後80年、戦争体験者が減少している今日、「戦争をさせない」「歴史を繰り返させない」と一人一人が主体的に平和を考えられるよう、ロールプレイなどを通して当事者意識を育む平和学習を展開していきたいです（スライド３）。私は、戦争を体験していません。しかし、これまでの経験を通して、沖縄戦、基地問題への学びを深めてきました。戦争の当事者ではありませんが、平和をつくる当事者です。これからもその意識を持って、誰一人として命が奪われない社会に向けて活動していきたいです。ご清聴ありがとうございました。

スライド３

© 2026 SGRA

# ［コメント4-1］


## 親川裕子

沖縄大学、Be the Change Okinawa代表


親川と申します。沖縄大学地域研究所の特別研究員で、非常勤講師としてジェンダー関連の科目や平和と人権などを担当しております。専門は沖縄戦後史、戦後女性史、ジェンダーや複合差別研究、国際人権論です。現在は1950年代から70年代初頭の沖縄で、いわゆる「混血児」の国際養子縁組など国際福祉（International welfare／transnational welfare「越境福祉」）に取り組んだ組織や人々に関する調査研究を行っています。

私が主催する団体Be the Change Okinawa（ビー ザ チェンジ オキナワ）は、昨年10月のCEDAW女性差別撤廃委員会の日本政府締約国審査に際し、CSO（Civil Social Organization）レポートを提出するために組織しました。県内で女性の人権に取り組む団体や個人の連合体として発足したものです。現在は不同意性交等罪を含む性犯罪裁判の傍聴など、ジェンダーに基づく暴力防止のための調査研究を主軸に活動しています。

では、まず、発表1の徳田さん・松田さんのCSWへの取組みについてコメントします。CSWは国連で毎年開催される定例会議の中でも規模が大きいもので、さまざまな国や地域で女性の人権問題に取り組む女性達が集い、お互いの経験や実践を共有する場として、またエンパワメントする場として認識されています。今回、在沖米軍基地から発生する性暴力を訴えるにあたり、不安もあったようですが、立場や国境を越えた対話の可能性を実感できたという点で非常に貴重な経験になったと思います。また、本日はミミーさんや中塚さんのお話を聞いて思うところがあったのではないかと思いますので、感想を交えてお二人のコメントを聞かせていただければと思います。

それから1点、世界各地にあるアメリカ軍基地の地域同士の繋がりについてということに言及があった点について触れたいと思います。午前中のセッションでも高里鈴代さんが報告されていらっしゃいましたが、1997年に「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク会議」が発足しました。メンバーは沖縄、日本、韓国、フィリピン、米国本土、プエルト・リコ、ハワイ、グアムなどから草の根の市民活動を行っている人々が参加していて、2、3年に一度、定期的に集っています。今年5月に韓国で開催された会議に私も参加しましたが、議論では米軍のみならず、自国の軍隊、その兵士らによる性暴力も後を絶たないことが語られていました。そのうえ、訴え出ることが難しかったり、性暴力自体が無かったことにされたりするなどの事例も散見されています。軍隊、兵士による性暴力であっても、その土地の歴史的、政治的背景が異なることから、一様な解決策は導き出せないのだということがわかりました。それらの違いや困難を踏まえた上で、28年間もネットワークを維持し、世代交代しながら軍事主義に対する議論を続けて



© 2026 SGRA

います。徳田さんや松田さんにもぜひ関わっていただきたいと思いつつ、ネットワークの重要性を改めて強調しておきたいと思います。

次に、ミミーさんの発表についてです。民主化運動、タイのフェミニスト運動に取り組んできた経緯を拝聴し、非常に興味深く、大学内のフェミニストコミュニティーやミルクティー同盟というのがとても素敵だなと思いました。沖縄の大学でもできたらと思いますが、沖縄や日本の学生は大学の学費が非常に高いため、皆さんアルバイトをするなどしてとても忙しく、なかなかこういう活動が根付きづらいというのがあります。タイの学生の皆さんは、どのように学業と両立をされていらっしゃるのか、グッドプラクティスがあれば教えていただきたいと思います。

加えて1点申し上げますと、「国家による嫌がらせや抗議活動の犯罪化」という例は沖縄でも存在します。

例えば、チョウ類研究者の女性が自身の研究のために、返還された米軍北部訓練場跡地に入った際、米軍が訓練で使用したと思われる薬きょうなどの米軍廃棄物を発見しました。女性は米軍や沖縄防衛局、警察に米軍廃棄物の撤去と環境回復を訴える活動をしていましたが、廃棄物の回収、処理が行われなかったために、抗議の意思を示すため、米軍基地を出入りする米軍車両を通行させないようにする活動を行いました。この女性の行為が「威力業務妨害」などの罪にあたるとして家宅捜査され、パソコン、スマートフォンなどが押収されたのです。裁判では、懲役3年罰金30万円執行猶予4年の有罪判決となりました（2025年3月6日）が、米軍廃棄物の未処理問題が明らかとなり、沖縄防衛局に、原状回復が不履行だったことを認めさせることになりました。

この裁判で顕在化したのは、米軍返還跡地の原状回復義務が免除された日米地位協定（第4条第1項）の差別的条項です。これは初めてではなく、かつても沖縄市や北谷町の米軍基地跡地からPCBなど有害物質を入れたドラム缶が地中に埋設廃棄されていた例が発覚しています。すなわち、責任を問われるべきは、差別条項を放置している日本政府の不作為なのであり、裁かれるべきは政府です。女性を逮捕することで抗議活動の萎縮を狙った国家が、逆に問われる結果となったといえます。

最後に中塚さんの発表についてです。中塚さんは沖縄戦の語り継ぎ手となるべく様々な取組みや、海外、県外の方たちと戦争や平和をめぐって相互理解を深める活動など、精力的に多彩な活動を行っておられることに、深く敬意を表したいと思います。

それを受けて１点、ジェンダーの視点を指摘しておきたいと思います。昨年、





© 2026 SGRA

私も共同代表として関わり、同じくコメンテーターの上野さやかさんも実行委員として関わりましたが、米兵による性暴力事件に抗議する県民大会で、個人的には中塚さんの登壇には意味があったと考えます。自身も登壇を躊躇したとのコメントがありましたが、男性も当事者であるという認識は非常に重要です。エンタメ業界の芸能事務所の経営者による所属若手男性タレントへの性加害問題は深刻な人権侵害です。他方、性加害事件の被害者の大多数は女性であり、男性の加害性やその責任の議論は非常に希薄です。社会の責任ある地位を占めるのはまだまだ男性が多く、それら多数派の男性たちの認識が変わらなければ、言い換えれば、男性自らが性加害の問題に取り組まなければ、性犯罪は決してなくならないと考えます。その点を踏まえ、今後はジェンダーの認識をより深め、学び、中塚さんの活動にジェンダーの視点を交差させて考えていただけたらと思います。それは必ずこれからの中塚さんの活動をより有意義なものにすると確信します。

私からは以上です。ありがとうございました。



© 2026 SGRA

## ［コメント4-2］


# 上野さやか

沖縄大学、エンパワメント・ラボ・おきなわ共同代表


私はふだんは、おきなわCAPセンターで子どもへの暴力防止の活動を行なったり、SNSを活用してリモート相談などをしたりする活動をしています。また、学生時代から女性学やジェンダー学などに強い関心を持っていましたので、エンパワメント・ラボ・おきなわという市民団体を立ち上げて、性暴力被害者の支援や予防の為の性教育、性の多様性に関する講演会活動なども行なっています。その他に、性暴力当事者を孤立させない、無理解への抗議を目的としたフラワーデモ in 沖縄を開催しています。今日は市民団体、市民活動を行う立場からコメントさせていただければと思います。

まず最初に、徳田さん松田さん、本当にありがとうございました。声を挙げるのは、とても勇気のいる行動だったのではないかと思います。なぜなら、私たちの周りもしくは私たち自身の中に、それが当たり前だと思う感覚、つまり感覚が麻痺していると、自分自身が思っていることが正しいのかどうかということに気付けないこともあると思います。その中で、松田さんと徳田さんは、今自分たちの周りに起きていることが脅威であると捉え、そして発信をすることができました。声を挙げられたということ、そして他人事ではなく自分事として、考えてもらおうという目的を持ってきちんと発信することができたからこそ、「伝えてくれてありがとう」という言葉も引き出せたのではないかと思います。

性暴力被害への寄り添いとして「Me too」という言葉があります。これを直訳すると「私も」ですが、私だったかもしれないという意味も重ねて用いられたりします。自分事として捉えることによって、当事者の気持ちに気付くこともできます。それと同時に、私たちのフラワーデモでは「With you」という寄り添いを表す言葉も用います。そして、30分間のサイレント・スタンディングという声を奪われた当事者に思いを寄せたアピールも行なっています。本日午前中のセッションでも、語れないとか語り得ないという当事者の心理が紹介されていましたが、まさにそこに思いを重ねてのアクションです。

発することはなかなか難しいことですが、話せないから弱い人というわけではないのです。時には暴力によって話す力を奪われている人もいますが、沈黙は勇気を溜める時間という言い方をすることもあります。ぜひ引き続き、いろいろな方の思いを受け止めながら、With youの気持ちも重ねて活動していただければと思いました。

次に、タイのミミーさんについてコメントします。とにかくエネルギッシュで、すごいパワーをいただきました。そして、日本でも同じような活動を広げていけたらいいなと感じました。

タイ政府によって活動が制限されるという課題や、女性やLGBTQ＋の活動を標





© 2026 SGRA

的とした性暴力や嫌がらせがあるというお話がありましたが、日本でも同じような問題が起きていますので、日本とも重なることだと思いながら拝聴しておりました。

私の友人が東京で、家に帰ることができなかったり、居場所がなかったりする子どもたち・少女たちを支援する「Colabo（コラボ）」という団体を立ち上げているのですが、活動に賛同しない人たちによる誹謗中傷やSNSでの拡散などが広がったことによって、行政からの支援が中止されてしまったこともありました。その他にも、女性というだけで暴力の被害に遭う、時には命を奪われるフェミサイドという問題であったり、今日の新聞の紙面に大きく取り上げられていましたが、ある政党の市議会議員のLGBTQに対する偏見によって傷付けられている当事者もいます。こういった攻撃に対して屈しないという思いから、今まさに私たちの周りでも、いろいろな団体がネットワークを強くしていっているところです。

フラワーデモは2019年に東京と大阪で始まったのですが、今はロンドンやバルセロナなどにも広がっています。とにかく同じ思いを持って性暴力に対する被害者を支え、無理解をなくしていこうというアクションです。ミミーさんにもぜひ、フラワーデモinタイを開催していただき、ネットワークを広げていっていただけるとうれしいなと思いましたので、お伝えします。

最後に、中塚さんへのコメントです。私自身が暴力防止の活動の中で伝えている一つのリスクとして、暴力は当事者だけではなく、周りの人の心も傷付けるということを、改めて考えさせられました。私たちの周りには本当にいろいろな暴力があって、その最たるものが戦争ではないかと思います。国同士の争いに対して、一人の人として抗うのはすごく難しいことなのと、生き延びてしまったことへの罪悪感というのが、中塚さんが聞き取りをした島袋さんのお話の中からも感じることができました。

被害の当事者であれば話を聴いてくれる人はたくさんいます。でも、それを周りで見ている人の話まで、どこまで私たちはその声を聴けているのか。それをすごく考えさせられました。当事者ではないのだからもう早く忘れなさいと言われれば、自分の思いに蓋をするしかないわけですが、その思いやトラウマはなかなか消えることがなく、どんどん自分の中に内的な抑圧を掛けてしまうことがあります。そうすると、ケアというのがすごく難しくなってくるのではないかと思います。そんな中で、語る場を作った中塚さんの活動というのは、もしかしたら島袋さんにとってケアの一つに繋がったのではないかと、話を伺いながら感じました。

話を聴くことはすごいこと、最大のエンパワーメントだという言葉もありますので、ぜひいろいろな人の思いをこれからも聴いていっていただけたらなと思います。以上です。



© 2026 SGRA

# ［コメント4-3］

## ボニー・ランバタン

Rainbow Panda代表

［原文は英語、翻訳：甲斐下 裕子］

ボニーと申します。ここに居ることをうれしく思います。クィアな子どもの福祉に向けた団体「Rainbow Panda（レインボー・パンダ）」を代表し参加しています。Rainbow Pandaのモットーである「クィアな子どもたちのために、よりやさしい未来を」は、今回のテーマと非常に深い関わりがあると思います。ソンヤさんもRainbow Pandaの仲間です。しかしながら、私は批判理論と哲学を専門とする在野研究者でもありますので、ここではその視点から議論を進めていきたいと思います。

私からの質問は特にありませんので、セッションの内容についての考察をまとめます。まずはシモーヌ・ド・ボーヴォワールの言葉から始めたいと思います。「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」。先ほど冨山先生が基調講演で論じられた、戦前と戦後の境界は曖昧である、という点をとらえた表現です。暴力は潜行的だからです。暴力は私たちの身の回りにあふれ、日々の生活そのものを形作っていますよね？ ジェンダー化というプロセスそのものが本質的に暴力的であることを、この言葉はきわめて的確に要約していると思います。ミミーさんは、タイの司法制度が彼女に特定の「しぐさ」をさせたこと、王室の像を掃除させたこと、という秀逸な事例を挙げましたが、それらは象徴的です。掃除という労働だけでなく、象徴的な意味がありますよね？

そして「プレゼンタビリティ」をめぐる政治について。政治は本質的に、常にジェンダー化されてきました。ある特定の人々が最前線で戦い、別の特定の人々が後方に留まるよう求められる。これが、ジョエルさんが先ほど述べた、女性と子どもが和平プロセスの「ラスト・マイル（最後の一里）」として位置づけられる理由でもあります。インタンさんは、知識生産には「喪」がともなうことについて言及し、墓を掘ることと墓掘り人による継承という、すばらしい比喩を提示してくれました。しかし墓を掘り継承する前に、誰かが死ななければならなかったのです。そこには死という行為、埋葬という行為がありました。くりかえしますが、それらは暴力という行為です。単なる無作為な暴力ではなく、きわめて意図的なトラウマの大量生産と言えます。このトラウマの大量生産そのものが、われわれの社会に深く根付いていると私は考えます。同時に、こう考えたい。人や物体、あるいは思想が死んだとき、われわれがそれらを埋葬し、墓を掘るのであれば、それに続くさらなる行動が必要なのではないか。死んだ思想を解剖する必要があるのではないか。死んだ思想はどこから来たのか？　何が原因で死んだのか？　暴力という行為だけでなく、社会に暴力を根付かせ、これらの死を許容してきたものは、何だったのか？

物のエピステモロジー、歴史の再語りなど、アーカイブ化における困難さのエ





© 2026 SGRA

ピステモロジーについて、多くのことを話し合いました。ミミーさんが話してくれた影響工作やフェミニスト運動の未来、アルゴリズムとの戦いについても。というのは、われわれには闘うべき戦いが山ほどありますよね？　闘うべき戦線は本当にたくさんあるように思えます。しかも闘いながら子どもや家族の世話をし、生き延びなければいけない。生き延びることじたいが難しいのに、そのうえ戦線で前進するとは。では、どうすればよいのか？ 今日われわれにとって最大の課題は、それだと思います。

フェミニストのサークルがいたる所で生まれていることを、非常にうれしく思います。徳田さんと松田さんは国際会議で講演を行い、国を超えた連携とコミュニケーションの重要性を強調しました。中塚さんは、世代を超えた対話の重要性を訴えています。進めるべき戦いが山ほどあるなか、どうしても先ほどの問いが戻ってきます。取り組むべき運動と異なる視点がこのように多いなか、われわれはいったいどうすればいいのか？ フェミニスト運動内の相違、市民運動内の相違に、一体どう向き合えばよいのか？

ミヤさんはまた、いかにして運動を普遍的かつグローバルなものにし、かつ地域に根ざしたものにするか、という問いも提起しました。私はこう考えています。普遍性は地域に根ざすことで初めて見出せるものである、と。グローバルにしようとすると、トップダウンの構造を上から押し付けてしまうからです。他者を支配しようとする。しかし、地域に根ざすことにすると、黒人フェミニストのオードリー・ロードが「エロティックなものの活用」と呼んだ何かを見いだせると思います。この呼び方には非常に興味深い言葉遊びが含まれています。オードリー・ロードが「エロティック」という言葉を使うとき、セクシュアリティやポルノグラフィーに関連した意味は、ありません。なぜなら、エロティックじたい、性暴力のなかで破壊され、揚州で破壊され、慰安婦たちのなかで破壊され、こうしたあらゆる暴力行為のなかで破壊され、そしてポルノグラフィーのなかで破壊されてきたからです。オードリー・ロードにとってエロティックとは、親密さに内在する脆弱性そのものです。エロティックとは相手を思いやる行為であり、裸になり自分をさらけ出す行為です。そして結局のところ、それこそが性暴力が消し去ろうとする概念そのものなのではないでしょうか。レイプという行為は、性的な動機ではなく権力への欲求、つまり、自分たちの中にある脆弱性の痕跡をすべて破壊し、最終的には抹殺しようとする行為だからです。だからこそ、性暴力は本質的にミリタリズムと深く結びついている。こうした権力構造を維持しますから。

われわれの「戦い」は、エロティックという概念を高める戦いであり、エロ



© 2026 SGRA

ティックを取り戻す戦いであり、脆弱性を取り戻す戦いだ、と私は考えています。だからこそ、これらを「戦い」と呼ぶべきではないと思っています。これまで私は「戦い」と呼んできました。他にどう呼べばいいのか分からなかったからです。でも、もう「戦い」と呼ぶのは、やめるべきだと思っています。最後に日系アメリカ人で批判的人種理論のマリ・マツダの言葉を引用し、締めくくりたいと思います。「戦争を想わせる言葉はすべて手放し、最も古くからの願いを拾って両の手のひらに乗せなさい。『私を見て、私を愛して、私を知って。』」[1]

ありがとうございました。



1　マツダ・マリ. (2005)　Love, Change. *Georgetown Law Faculty Publications and Other Works*, 895, 196-197.


© 2026 SGRA

# 第4セッション【自由討論】

司会：洪 玧伸（沖縄大学）、デール・ソンヤ（SGRA）
発言者（発言順）：高里鈴代（「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表）
山城紀子（沖縄タイムス元記者・フリージャーナリスト）
宮城晴美（沖縄女性史研究家）
徳田 彩（沖縄キリスト教学院大学）
ニチャカーン・ラクウォンリット／ミミー（タイの学生活動家）
中塚静樹（沖縄大学）

［英語発言翻訳：川崎 剛］

**ソンヤ**　ボニーさん、コメントありがとうございます。今日のフォーラムを通じて話題になったたくさんのポイントをつなげていただきました。アイデアの多くをつなげた上に、今日ここにいる若い活動家たちの行動にも光をあてていただきました。

皆さん、何かコメントに対しての反応はありますか。もしあれば、ぜひお答えいただければと思うんですけど、どうですか。

**洪 玧伸**　すごいなと思いました。最初のセッションから最後のセッションまで、様々な地域のメンバーや幅広いテーマでしたが、議論を重ねていくなかで、実はここまでつながっているんだなと、感心しながら聞いていました。

本日最後のセッションの若者たちは北京プラス30年に参加しながら活動しましたが、まさにその北京の大会に30年前に、第1セッションの高里鈴代さんが活躍していましたし、その時に、本日の基調講演の冨山一郎先生は『戦場の記憶』という大切な著書を刊行しています。本当に「つながる」という気がしています。また、北京クイアの映画祭に参加した発表者もいるし、タイの話を聞いていますと、韓国で民主化運動に関わっている若者たちを紹介したいという気持ち

© 2026 SGRA

でいっぱいになりました。実は明日宮古島で、韓国からいらした梁先生がそれと関連するテーマで講演されます（附録１参照／ p115）。まさに「交差する」ということを実感しています。

これらのテーマについて先輩と後輩と対話するだけでも、1日かかると思うのですが、まず、先輩たちから北京に行って戻った緊張感や、今の若者たちを見ながら感じた希望とか、こういうことをどう思うのかとか、少し話していただければと思いますが、高里さんから一言お願いいたします。

**高里**　第4回世界女性会議の北京会議に参加して、沖縄の空港に帰ってきて、その時に12歳の少女のレイプ事件を聞いたんです。北京に行ったことを後悔するぐらいのショックを受けました。

私たちは11のワークショップを準備して、沖縄から71人の女性たちで第4回の国連の北京会議に参加していました。私は「軍隊・その構造的暴力と女性」というテーマでワークショップを準備して参加しました。そして帰ってきた時に、仲間が新聞の切り抜きを持って空港に迎えに来たのです。12歳の少女が3人の米兵にレイプされたという記事でした。もう本当にショックでした。それで、翌朝８時半に女性副知事の執務室に集合をかけて、抗議文を準備してお昼の記者会見をセットしました。

国際会議に参加して、南アフリカのアパルトヘイトの問題も一緒に歌って、高揚した気持ちで帰国したときにこの事件を聞いたんですね。

徳田さん松田さんが今回ニューヨークに参加した経験を受けて、これからも継続してやってほしいと思います。よろしくお願いします。頑張ってください。

**山城**　本日の最後のセッションを若い人たちの発表で締めくくったことに希望を感じます。というのは、沖縄に慰安婦として連れてこられた裴奉奇（ペ ポンギ）さんが、そのまま沖縄に滞在をすることを可能にするためには、自分は朝鮮から連れて来られて、ここで慰安婦をしていたということを語らなければ、滞在の許可が下りなかったのです。

韓国の日本軍「慰安婦」被害者の尊厳回復と問題解決のために立ち上がった人たちが、沖縄にそういう人がいるということがわかったことで、足繁く何人かの元慰安婦の方が、沖縄に体験を語りに来られました。

そのひとつに宣教師の女性から自分の勤めてる宜野湾セミナーハウスに韓国とフィリピンから来県する元慰安婦の方が宿泊するので、「山城さん、取材をしてもらえない？」と声を掛けてもらったことがありました。訪ねて、取材をさせてもらいました。二重の通訳を必要としました。タガログ語から英語に、英語から日本語に。また、韓国語から英語に、英語から日本語に、と。最初のうちこそまどろっこしい感じがありましたが、途中からは全く気にならなくなりました。私の方は聞きたい気持ちが強く、一方で元慰安婦の方々からも伝えたい、話したい、という強い気持ちが伝わってきました。性暴力の問題は国を超えて共有しなければ、と思いました。時間の経つのも忘れるほどでした。４、５時間は経っていたと思います。





© 2026 SGRA

彼女たちは最後に「若い人たちに伝えてほしい」「1行でも多く書いて」「写真も載せてね」とリクエストしていました。でも、そのあとの日本の政府の状況を見ていたら、従軍慰安婦の従軍は削除ということを閣議決定で決めています。沖縄の147カ所の慰安所を見たら、米軍が上陸しなくても日本の兵隊が行ったところに慰安所ができるということは、まさに従軍なわけです。

そういった、もう教科書にもなかなか載らなくなった史実を、伝え、語り合っていくことの大事さを改めて感じます。

**宮城**　徳田さん、松田さん、ミミーさん、中塚さん、本当にお疲れ様でした。

私たちはいろいろな活動をしているなかで、若い人につながってないのではないかとよく言われてきましたけれども、今日ここで皆さんの報告を聞いて、非常に心強く思いました。

私から一つだけ注文があるのですが、実は先ほど中塚さんも基地問題に関心を持ってるとおっしゃっていました。私自身は50年余り、何百人になるかわかりませんけれども、たくさんの人から沖縄戦の体験を聞いてきました。皆さん、もう戦争は絶対ダメだと必ず言います。二度と起こさないでと言います。けれども、選挙の時に誰に投票しているのか。

防衛費は強化すべきとか、あるいは基地の拡張は当たり前だという政策をずっと唱えてる政党に投票する人が、残念ながら、私が取材した戦争体験者にも多いです。その人たちは別にそこまで考えてないのかもしれませんが、20代、30代という若い世代がそういう政党に非常に多く投票しています。去年の衆議院選挙もそうでしたし、今年の参議院選挙もそうでした。

先ほど上野さやかさんから1人で抗うことはできないかもしれないというお話がありました。確かにそうなのですが、選挙という一票はあります。皆さんの仲間たちに、別に誰に入れるかではなくて、軍拡が進む現状に対する問題意識を問いかけるのはどうでしょうか。今後そういうことも含めて、活動を継続してほしいと思っております。以上です。

**ソンヤ**　先輩方、ありがとうございます。若い世代はすごく期待されてしまうわけですが、発表者の皆さんからも、こういう支援や応援、こういう支えがあればもっと頑張りやすい、もっと活動しやすいということがあれば、ぜひ伝えて欲しいと思います。どうですか？

**洪 玧伸**　なんと優しい（笑）。

**ソンヤ**　いやいや（笑）、だって1人で活動しているわけではないので。みんな一緒ですから。

**洪 玧伸**　あまり大げさなことではなくて、ささやかな日常のことでも。つながることは今日のテーマでもありますから。どうですか。



© 2026 SGRA

徳田　今日、この場に立たせていただいてありがたく思っています。伝えることは本当に難しいことだと思います。特に性暴力のこととか戦争のこととか、もちろん楽しくはないし、重たいトピックなので、若者として前に立つときにすごく緊張します。テンパってしまいますし、難しいものだと思うのです。ただ、高里さんや山城さんや、周りを見れば先輩たちがいて、アドバイスしてくださり、何をしていけばいいのかというのをずっと示してきてくださっているので、それをたどって若者代表としてこれから先につなげていきたいと思います。

選挙のことはすごく大事だと思うので、私自身も考えていますし、周りの大学生の友人など、身近なところから少しずつ少しずつ始めていって、この沖縄から平和をどんどんつなげていって、いろいろな世界にこの平和を届けていきたいなと思ってます。以上です。

ソンヤ　ありがとうございます。ミミーさんどうですか。

ミミー　まず勉強と活動のバランスについての質問にお答えします。私はこれに答えることができません。なぜならここに来るために授業を休んだからです。

冗談です。しかし文化が違うとは思います。市民や学生運動が立ち上がった背景はそれぞれの地域で異なります。沖縄の特徴についてはよく知りませんが、タイではもし市民の領域が縮小されそうになれば、まず何かの傾向を見いだして、そこに機会を見つけます。市民は今何に関心があるのか、何かを始めようという人々がいるのか。そういう機会をつかみ、問題を探り、何か新しいことをともに始める共同体や友人を探すために前に進むでしょう。

支援と激励について。数多くの人々が若者の意味ある参加というような言い方を使っています。私も、若者の声がしばしば十分に聞いてもらえないというような「微少な差別」は数多く経験しました。私は年長者を非難しません。傷ついた人々が時には人々を傷つけます。若者の声を聞くことができる年長者は、ひょっとすると彼ら自身も声が聞かれていないと感じているかもしれません。私が言いたいのは、若者のためのスペースを創るだけでなく、技術やイノベーションやゲームなどを使える新世代間で高めあうことです。年長者からは得られなかった経験をもって。

共同参加や若者に経験をもたらす共同作業、新しい視野を学べる機会、さらに人生の探求、あるいは、単に愚かな質問や愚かな話題に耳を傾けたりすることだって、若い人々にとっては、意味あることだと思います。ありがとうございます。

洪 玧伸　では、中塚さん、どうぞ。

中塚　先ほどソンヤさんが問いかけてくださった、どのようにしたらこうした活動がより良くなっていくかということを考えました。活動するグループの中でもそうですし、もっと身近なところで、人を傷つけないといったルールをきちんと決めていく。性暴力の問題にしてもそうですが、声をあげる当事者の中でもそういった問題が起こらないように、組織の中でしっかり作っていくことではないかと思





© 2026 SGRA

います。

そして、若者と上の世代との対話も大事だと思っています。若者頑張れではなく、上の世代の人が頑張れでもなく、どちらかに任せるのではなくて、どちらも頑張っていく、その対話が大事だと思います。選挙においてもこの政党に入れた若者はダメだと批判するのではなくて、そこに寄り添う。批判してしまったら遠ざけてしまうことになりますから、なぜその政党に入れてしまったのかというのを自分たちでしっかり考えて、より良い未来のためにどうすればいいのかを、お互い寄り添いながら対応していく、それが大事だと思っています。

**洪 玧伸**　会場の皆さん、今日はいかがでしたか。

最初にこのフォーラムの紹介をしたときに、SGRAというグループに「巻き込まれて」最後まで聴いてほしいとお話ししましたが、巻き込まれた方々が最後までしっかり残ってくださったという実感があります。オンラインでもほとんど離れずに聞いておられる約300人の方がいらっしゃいます。議論することによりだんだんと輪も強まる感覚と言えるでしょうか。

自分自身、戦前戦後、平時と平和みたいなものの線引きは問題の意識にあったものの、本日のセッションを全部聞きながら、福祉や環境問題、今も世界各地に起こっている戦争や占領状況における子どもや女性への暴力を想起される問題が、インドネシア、マレーシア、タイ、沖縄からの歴史的な経験を具体的に語ることによって非常に広がりを持ちながらも、迫ってくる問題として感じることが出来ました。参加された皆さんもおそらく、本日提起した問題を、「戦後80年」という綺麗な時間軸ではないもの、つまり「過去」の問題として共有できたのではないでしょうか。

その意味で、最初の冨山先生の言葉を引用しながら終わりにしたいと思います。今日、最初の基調講演の時にこういう言葉がありました。

「暴力の後と暴力の予感が重なる今を、他者との出会の始まりとして確保することが問われている」。

一旦起きてしまった暴力後に、また起こるかもしれないといった予感が重なり合う。

おそらく今日の地点でもさまざまな視点が重なって、LGBTQも含めて、私たちが非可視化してしまったものがここまで多いということがよくわかりました。課題はまだまだ多いと思います。でも真剣に考え、言葉を交わしているうちに、一見、無関係に見えたものも実はとても繋がっているものである。今日の議論の場が、まさに異なる状況をどのように繋げられるか、その糸口のような、ヒントのようなものにはなったのではないかという気はします。

その意味で、丸一日、この空間で得たこの身体感覚を大事にして、今後も対話できればと思います。皆さん、本日は「巻き込まれて」くださってありがとうございました。

**ソンヤ**　洪さん、ありがとうございました。皆さんにぜひ忘れないでほしいことは、1人ではないということです。



© 2026 SGRA

優しい気持ちになることは非常に難しいことですが、少し優しい気持ちになって、相手のことをちゃんと聞いて、支えあう合うことはすごく重要なこと。皆さんも多分できることですので、ぜひ自分は力があることを忘れないでほしいなと思います。

本日のフォーラムはこれで終わりますが、これが最後ではありません。これからもぜひ対話をし続けてください。

それでは登壇者の皆様、沖縄大学の皆様と通訳関係者はじめ本日の会議を支えてくださった皆様、聞いてくださった皆様、ありがとうございました。

これからも一緒に対話していきましょう。





© 2026 SGRA

附録 1

「『慰安婦』のための碑　17 周年記念シンポジウム」
（於 宮古島市公民館・未来創造センター）

# サバルタンの強烈な声：
## 韓国における最近の社会変化と「日本軍性奴隷（JMSS）」問題への私の関わり

梁（ヤン） 絃娥（ヒョナ）
ソウル大学名誉教授

［原文は英語、和訳校正：洪 玧伸］

このたび沖縄での素晴らしい会議にお招きいただき、特に洪玧伸教授ならびに本イベントを実現してくださったSGRAや宮古島で「慰安婦」問題を考える会のスタッフの皆様に、心から感謝申し上げます。私が最も愛する場所である宮古島で、この会議に参加できることは大変、光栄なことです。去る8月にソウル大学を退職して以降、このような機会をいただいたことは、私にとって格別の意味を持つものでもあります。

本日は、主に日本軍性奴隷（「慰安婦」）生存者の証言を通して「サバルタン（抑圧された人々）」の声について、そしてこと女性市民の関わりが極めて大きな役割を果たしてきた韓国における最近の社会変化についてお話ししたいと思います。本日の発表では、社会的な側面と私自身の経験とを統合しながらお話しいたします。

## 1．私とJMSS問題との関わり

私は1990年代初頭に博士課程で留学していたとき、新聞で金学順（キムハクスン）さん（日本軍性奴隷問題の被害者として初めて名乗り出た女性）の証言を読み、この問題を知りました。そのとき私は大きな衝撃と怒りを覚えました。そういう意味で、この研究に私を導いたのは金さんであったと言えます。ちょうどその頃、ニューヨークで「ジェンダーと韓国ナショナリズム」に関する会議が予定されており、私は当時主催者で、その後、友人であり同僚となった金賢淑（キムヘスク）さんに連絡を取り、研究をまだ始めてもいなかったにもかかわらず、この問題について発表したいと伝えました。これが、私のこの問題との旅路の始まりでした。

韓国に戻った後、2000年12月に開催された「日本軍性奴隷制を裁く女性国際戦犯法廷」（以下、女性国際法廷）の準備のための大規模な集まりがありまし



© 2026 SGRA

た。私は「韓国挺身隊問題対策協議会」（以下、韓国挺対協）が組織したグループに加わりました。そこで私はとても自然な流れで「証言チーム」を立ち上げ、「真相究明委員会」で証言研究に取り組むようになりました。その後、私たちは、証言をどのように聞き取り、表現するか、その方法を模索しながら2年近く懸命に取り組むようになります。

その歴史的経過をごく簡単にご紹介しますと、韓国における元日本軍性奴隷生存者の証言研究は、韓国挺対協や「韓国挺身隊問題研究所」といった研究グループ、また各地や個人研究者の尽力により、すでに8巻以上の証言集が刊行されています。100名を超える生存者への深い聞き取りを通して、「慰安婦」の証言は収録されてきました。これは研究者たちの絶え間ない努力の結晶でもあります。韓国における他の被害者証言研究と比べても、「慰安婦」証言研究は最も継続的かつ大規模に展開されたものでした。

## 2. 韓国における証言研究

証言チームは、当時としては前例のなかった「被害者中心」の研究を行いました。そこでは、涙を流す「ハルモニ（お祖母さんという韓国語で「慰安婦」被害者もその名称で呼ばれる）」として描かれがちだった姿を、耐え難い苦痛を抱えながらも自らの人生を切り拓いてきた「生存者」として再構成しました。これは、サバルタンが韓国近現代史の危険な坂道をいかに乗り越えてきたかを証言する「叙事史」のような物語でもありました。私たちは、苦悩に満ちつつも解放感を伴うその物語に驚嘆しました。

また、口語のリズムやニュアンスも、再現にあたって魅力的でありながら難しい要素でした。方言や古い言葉、日本語・中国語・ロシア語などが混じり合い、一見混乱した言語でありながらも、そこには美しさやリズム感、さらには遊び心すら含まれていたのです。その意味をどう解釈するかにも私たちは苦心しました。

やがて私たちは、そうした経験や人生の道筋、主体性を表現する方法を少しずつ見出していきました。その成果のひとつが、2001年に出版された第4巻の証言集です。当時は、この証言チームが自分の生涯にわたるチームになるとは思いも寄らないものでした。まるで映画『ロード・オブ・ザ・リング』に登場する「旅の仲間12人」のように、証言チームは私のキャリアを通じて常に共にありました。そして20年後の2023年、私たちはこの韓国語の証言集を英語に翻訳し、Routledgeという出版社から出版しました。

ガヤトリ・スピヴァクやサバルタン（抑圧された人々）研究の学者たちは、「サバルタンは話さなかったのではなく、その声を聞くための方法や理論がなかったために、私たちが彼らの声を聞けなかったのだ」と論じています。2000年12月、先ほど触れた女性国際法廷が東京で開催され、私は南北共同の韓国検察団の一員として検事を務めました。この法廷では、アジア各地の高齢の被害者たちが法的主体として立ち上がり、昭和天皇をはじめとする国家の最高責任者や





© 2026 SGRA

軍幹部を被告として呼び出し、有罪判決を下させることができました。

その経験を受けて、2001年2月、私はソウル大学法学研究所のポストドクトラル・フェローに応募しました。女性国際法廷での経験から、国際法を学ばねばならないと痛感したからです。そこで私は、アジアの無力な人々、特に女性を代表するために必要とされる国際人権法や人道法、また国家間条約における「欠落」や「著しい認識のなさ」といった知識層の権力という現実に直面しました。西洋中心のフェミニズム法理論においても、法と歴史の乖離は明らかでした。彼女たちは「法におけるサバルタン」だったのです。

この意味で、サバルタンとは単に社会の少数派を指すのではなく、歴史記述・経済・政治・法などの領域で「知られてこなかった」人々――その仕事、思想、文化を含む――を意味します。したがって、その声は聞かれ、統合されなければなりません。振り返ると、「慰安婦」のハルモニたち、あるいは被害時には十代だった少女たちが、私を通じて声を発し、私をソウル大学法科大学院へと導いたのだと思います。

その2年後、2003年に私はフェミニスト法学の教授に採用され、同大学法科大学院で初の女性教授となりました。そして、退職を迎えた今、自らがこの使命をどれほど果たせたのかを省みると、その歩みはあまりに微々たるものだったのではないかと感じます。

しかし、生存者の証言の意義は決して小さくありません。生存者の証言は、韓国をはるかに超えて、植民地主義や第二次世界大戦の歴史に関する集団的記憶を書き換えてきました。当初、彼女たちは自らの体験を「恥ずべきもの」と考えていましたが、やがて聞き手――彼女たちの語りを貴重で記憶に値するものとして受け止める「共感する観客」――との出会いによって力を得ました。

今日では、南北コリア・台湾・中国・フィリピン・インドネシア・東ティモール・太平洋諸島・オランダ・日本の「慰安婦」被害者たちは、沈黙し客体化された被害者ではなく、女子学生や若い女性たちから共感と尊敬を寄せられる力強い存在となりました。このように、ハルモニたちの言葉は力強いのです。その声と経験は、被害者の権利、賠償、国家免責、武力紛争におけるジェンダー暴力の性質などをめぐる法廷での議論や判例に証拠と影響を与えてきました。

日本軍性奴隷の声は、アジアのみならず、アメリカ・カナダ・南米・ドイツ・ヨーロッパ各国、そしてアフリカの多くのポストコロニアル諸国にまで響き渡り、今後もさらに響き続けるでしょう。

## 3. 変わりゆく世界と韓国の変化

今日の世界は、極右的なナショナリズムの台頭によって、きわめて分断的で危険な方向に変化しています。しかし一方で、世界はますます相互につながり、多様化し、文化的な覚醒を遂げつつあります。ですから、私たちは希望を捨てることはできません。

ご存じのとおり、昨年12月3日、韓国では突如として「戒厳令」が布告され、



© 2026 SGRA

その後数か月にわたり政治的・社会的な混乱が続きました。その冬は凍えるように長く、国民は耐えねばなりませんでした。不安や恐怖のため、多くの市民が不眠や胃腸障害といった「内戦症候群」に苦しみました。

驚くべきことに、デモに継続的に参加した人々の大多数は、これまで政治的主体としてほとんど見なされてこなかった20代・30代の女性たちでした。彼女たちは、汝矣島（ヨイド）にある国会議事堂の前、南泰嶺（ナムテリョン）地域、漢南洞（ハンナムドン）の大統領公邸の周辺はもちろん、全国各地で「光の革命」を主導しました。大雪の日にはアルミ箔のような防寒シートを体に巻きつけながら抗議を続けたのです。

ステージの上では、多くの市民が列をなし、それぞれ自分の「物語」を語りました。その内容は、女性差別や性的指向、階級、出身地など、実に多様でした。多くのオンライン投稿者とは異なり、デモ行進の舞台の上でマイクを握った人たちは、自らの名前を明かし、性的指向も公にし、「戒厳令」を下した前大統領を批判し、未来の社会への要求や願いを語ったのです。そこには驚くべき言説空間が広がっていました。

私自身も毎週抗議に参加しました。そこで耳にした女性たちの声は、本物であり、感情に満ちあふれていました。では、この声はどこから生まれてきたのでしょうか。彼女たちは、10年ほど前に起こった「ロウソク革命（不法的に親友に国政介入を許した大統領を弾劾訴追し法に基づいて政権を交代した一連の動き）をめぐる」とフェミニズム社会運動を目の当たりにし、また参加してきた世代です。

私は長年、大学で「ジェンダーと法」を教えてきましたので、ここからは韓国社会を変えるうえで重要だった女性関連の判例を紹介したいと思います。

## 4．女性の意識を変えた韓国における二つの重要な判例

第一に、家族法（民法の親族編・相続編）の改正についてです。これは1960年に新民法が施行される以前、1950年代初期から始まっていました。特に「戸主制度」は2005年まで存続していましたが、この年、韓国憲法裁判所は民法における戸主制度を違憲と判断しました。この改正運動は50年以上にわたって続けられ、韓国史上最も長く前例のない法改正の社会運動であり、その中心には主に女性市民がいました。

ただし、韓国の戸主制度は、朝鮮王朝時代（1392–1910）の家父長制的な家族制度を直接受け継いだものではなく、日本植民地期に「家（イエ）制度」と戸籍制度の一部として導入されたものです。イエ制度における戸主と朝鮮時代の家長は、親族の範囲や戸主の権限などにおいて相違がありました。韓国憲法裁判所は、2005年2月3日（2001憲家9号など）において、戸主制度は憲法第11条（平等権）および第36条第1項（婚姻・家族生活における個人の尊厳と平等）に違反すると判示しましたが、その植民地的側面については沈黙したままでした。

私は韓国の戸主制度を、「二つの父権制が変異的に融合した法文化的構築物」





© 2026 SGRA

として解釈してきました（Yang, 2009）。2005年の廃止は不可能ともいわれ、まさに「山を動かした」出来事でしたが、その後、韓国家族は本当にジェンダー平等となり、「良き伝統の尊重」を実現できたのか――これは今も追求すべき問いです。私は懐疑的です。その関連課題のひとつが、家族の正義と幸福に関わる「リプロダクティブ・ジャスティス（生殖に関する正義）」です。

韓国刑法は長らく人工妊娠中絶を犯罪とし、2020年までそれは維持されていました。同年、憲法裁判所は刑法第269条などの中絶罪について違憲決定を下しました。多数意見は、中絶罪は女性の自己決定権を侵害しており、妊娠・出産・育児と同様に中絶の決断も「人間的に不可欠な決定」であると述べています。刑事罰の存在のために、女性は葛藤を語ることができず、必要な支援やサービスも受けられませんでした。違法な中絶診療所は、妊婦に安全な環境を提供することもできませんでした。

さらに、多数意見は現行の「母体保護法」が社会経済的理由による中絶を合法化の要件に含めていない点を指摘し、将来の立法においては、妊婦が十分な情報やカウンセリングを受け、自ら出産するかどうかを判断できる機会を保障すべきだと勧告しました。そして裁判所は、2020年末までに代替法の制定を求めました。

この違憲判決は、女性たちの粘り強い運動と、韓国におけるリプロダクティブ・ジャスティスの学術的努力の成果によって支えられていました。私自身もその一部を担ってきました。

ご存じのように、韓国の合計特殊出生率は極端に低く、2020年には0.78、2024年には0.75となりました。晩婚化、非婚化、子どもを持たない結婚の増加が背景にあります。しかし、より深刻な問題は、ジェンダー平等や性の自由、雇用の安定、ケア労働の負担などにあります。したがって、中絶罪の廃止は「リプロダクティブ・ジャスティス政策」へと拡張されるべきでした。

しかし韓国ではそうなりませんでした。憲法裁判所の決定後も、国会は刑法や母体保護法、その他必要な法律の改正について与野党の合意が得られず、代替立法を行いませんでした。さらに深いレベルで見ると、進歩・保守を問わず主要政党も行政も、この違憲決定に本心から共感していなかったのだと思います。

出生率の低下と国家の「問題」を把握できない無力さは、社会的再生産の危機であると同時に、ジェンダー関係の危機でもありました。政府は出生率上昇のために莫大な予算を投入しましたが、その多くは「ジェンダー中立的政策」、たとえば新婚夫婦への住宅や融資の支援などに偏っていました。女性の生殖やケア労働の負担を軽減する政策は、ほとんど顧みられないか二の次にされました。

さらに、韓国の法制度と社会においては、子どもを持つ正当な主体は依然として「結婚した夫婦」に限られています。シングルで妊娠した女性やシングルマザーの「正当な家族を持つ権利」は大きく制約されているのです。この婚姻中心主義は、リプロダクティブ・ジャスティス政策、家族、代替的パートナーシップ、労働やケア労働といった領域が密接に結びついていることを示しています。



© 2026 SGRA

## 5．結びの言葉

私は、これらすべての状況が、昨年冬から春にかけて、多くの女性市民が前大統領ユンの弾劾を求めた理由を説明していると解釈しています。尹錫悦（ユンソンニョル）前大統領は「韓国には構造的な性差別は存在しない」と宣言し、そのため自らの政権下で女性家族部を廃止するという大統領公約を掲げて当選した人物でした。一方で、韓国の若い世代の女性たちは、これまで見てきたような女性たちの社会的な取り組みや勝利によって大いに力づけられてきましたが、それでもなお、自らの性的、経済的、家族的生活――ほとんど日常生活のすべての側面において――において、挫折や困惑を抱え続けています。市民と専門家による膨大な努力の末に、私たちは新しい民主的な大統領を選ぶことができました（おそらく、かつて10代で工場労働者であった「サバルタンの大統領」とも呼べる人物です）！

幸いなことに、新しい李在明（イジェミョン）大統領は国民のために非常に熱心かつ賢明に働いているように見えます。しかし、彼が過去にどのようにして選ばれたのか、そして将来においてジェンダー政策がいかに重要であるかについて、ジェンダー的な視点を持っているかどうか、私はまだ確信が持てません。ここで、私の発表をまとめるにあたり、日本軍性奴隷（JMSS）問題と韓国における最近の政治的変化との間に、何らかのつながりを見いだそうとしたいと思います。「慰安婦」生存者の声を聞き、女性の法的・社会的運動を子ども時代、10代、あるいは20代に目の当たりにし、そこに参加した女性たちが、「語る勇気」と「声を上げる精神」を学び、継承してきたと考えるのは、あまりにも想像に過ぎることでしょうか。

この発表では、法的判断、家族制度の改革、生殖などにおいて、普通の女性たちの集合的な声を含むサバルタン（抑圧された人々、生存者）の声がいかに強力であったかを見てきました。しかしそれを超えて、彼女たちの声を響かせることは、自らの尊厳と幸福を守るうえでも決定的に重要であったと理解しています。私は、正義の実現と地域の歴史の保存に膨大な努力を注いできた沖縄の研究者や住民たちこそが、そのような強い声を持つサバルタンであると知ってきました。

ご清聴ありがとうございました。

© 2026 SGRA

あとがきにかえて

# 沖縄から「アジアのジェンダーと暴力」につながる可能性を探るということ

## ―戦前、戦後の時間軸では問えない日常から問いかけを中心に―

洪（ホン） 玧伸（ユンシン） 沖縄大学

### はじめに：戦後80年という時間軸への「違和」

戦後80年の2025年は、皮肉にも現在進行中の戦争の報道に、最も頻繁に接した年となった。戦闘が続くロシアとウクライナ、長年の内戦により焼野原となったシリア、何よりイスラエルの攻撃以来、孤立無援の飢餓状態に陥ったカザの民間人や子どもたちの顔を「映像」で眺めている。戦争はまさに80年前の出来事ではなく、連日メディアで接しているものであり、日本でいう戦争体験者の高齢化による継承以上に、このような「距離感」を保ちつつ自分と「無縁」の世界のように戦争を眺めている私たちに、果たして「戦争」とは何か、「戦後」という時間軸自体が何かを、今一度考えることを要求しているのかも知れない。この「時間軸」への「違和」がまさに、第5回SGRA主催のアジア文化対話が、沖縄で開かれた第一の理由であろう。

沖縄大学との共催で、「アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性」をメインテーマとし、韓国、中国、インドネシア、アメリカ、フィリピン、タイ、ノルウェーなどの専門家や活動家のパネリストで構成された四つのセッションが設けられた。

2008年度の渥美国際交流財団の奨学生で関口グローバル研究会の一員として、現在は沖縄大学で教鞭を持つことから、7か国以上の出身地を持つパネリストを一堂に集めた国際シンポジウムの全体コーディネーターの一人として勤めさせていただいた。会場には沖縄市民を含む100人以上の聴衆に加え、Zoomでは200人余りが長丁場の議論に参加した。

フォーラムは終始緊張感を保ちながら進行され、質問をする市民の声が相次いだ。議論の流れを振りかえながら、今回の開催の意味合いについて考えていきたい（敬称略）。



© 2026 SGRA

## 問いの始まりとして：基調演説「暴力に抗する「他者」の眼差し」

第１セッションの基調演説は『戦場の記憶』（1995年、増補2006年）で著名な冨山一郎（同志社大学教授）によるものであった。冨山は、湾岸戦争で人々が殺されていく場面をテレビゲームのように眺める頃、「民族浄化」のために性暴力が正当化されたボスニア内戦（1992年～95年）が起きており、さらに、沖縄で繰り返される性暴力問題に抗して活動する高里鈴代「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表が「何度東京に来て同じ話をすればいいのか」というつぶやきに出会った時を振り返る。冨山が述べる「戦場」が、３人の米兵による少女レイプ事件（95年）に対する怒りで8万5,000人の県民大会が行われた沖縄からの声を「東京」に届けようと奮闘していた高里の「何度、言えばいいのか」というつぶやきや、語っても語っても言葉が届かない状況から始まるのは大切である。

「何を言っても無駄」という状況にかかわる「暴力」そのものへの冨山の洞察は「毎日の陳腐な営み」から「往復運動」として戦場を発見する眼差し、つまり平時／戦場、戦中／戦後、の二分法を超える眼差しで、自身の身体感覚から始まっている。二分法を超えるためには、他者との関係の中に設定されている「実践」の領域が前提に置かれているのは言うまでもない。

## 交差する差別とジェンダー

第２セッションは、沖縄、インドネシア、韓国からの活動家や研究者により戦争、紛争下の暴力「後」にどのような差別が温存され、それに抗する言葉を探るために女性たちはどのような「実践」連帯や活動を展開できるのかが議論された。

まず、高里鈴代によって沖縄戦や戦後の米軍基地化による沖縄の現状、復帰後も続く基地固定化の状況が、いかに女性の生き方に影響をしていたのかが語られた。高里は那覇市婦人相談員、那覇市議会議員、「アジアと手をつなぐ会」代表などを歴任してきた沖縄のフェミニスト。発表では、「近代への道」の中で「琉球人」から「沖縄人」にならなければならず、差別を温存したまま進めた沖縄の歩みが、その後、沖縄戦を経て、さらに「日米政府」による27年間の占領期にどのように構造的な差別へ繋がっていったのかが説明された。特に、沖縄戦後、差別構造の中で「日本人」対「琉球人」の潜在する対立を利用しようとした占領初期の「民事ハンドブック」の記述や、繰り返し行われていた米兵による性犯罪やそれを可視化できなかった、その系譜を語った。

沖縄の女性への暴力に安全保障を優位し、女性の人権を「小さい政治」として扱ってきた状況、加害者不処罰が交差しながら形成されていったことが論じられた。高里によると、朝鮮・ベトナム・湾岸・アフガン・イラク戦争へ直結する派兵基地の全機能は、女性への性暴力、人権侵害に深く繋がっている構造的な暴力に他ならない。講演では、高里自身が、こうした沖縄の状況に立ち向かうため、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」を立ち上げ、真の意味の安全保障





© 2026 SGRA

とは何かという「安全保障」への再提起に向かって基地・性暴力に苦しむ国々のアクティビストと共に活動していく過程が紹介された。

復帰以前の沖縄では、ベトナム戦争や冷戦構造の激化を背景に、土地の強制接収や性犯罪、人権蹂躙が繰り返された。同時期、インドネシアでは約50万人から300万人の民間人が警察や国家暴力の犠牲となった。1965年以降続いた「赤狩り」を掲げた大量虐殺には、多くの女性と子どもが含まれている。女性作家のIntan Paramaditha（マッコーリー大学）は、組織的に標的とされ、強制的に解散された「Gerwani（ゲルワニ）インドネシア女性運動（Gerakan Wanita Indonesia）」以降、どのように女性たちが、これら歴史から抹消・排除された女性たちの存在を記憶し、継承していこうとしているのか。2020年に設立された「女性思想学校（Sekolah Pemikiran Perempuan：SPP）」や、ETALASEフェスティバルという活動を通して紹介している。

興味深いのは、インドネシアの群島の横断的なフェミニスト集団のSPPが、既存の男性中心、家父長制中心の言葉を転覆し、言葉（概念）を再定義した活動をしていることである。

ワリス（相続）の概念は、家父長制的な財産移転の概念から、トラウマの認識と集団的癒しのフェミニスト的実践を意味する「継承」という意味へと根本的に変えた。単なる財産の移動ではなく、内面的な痛みや集団的な傷に注目する概念となったことにより、ワリス概念は、植民地主義と資本主義の相続論理に異議を唱える言葉となった。また、「galikuburガリ・クブル」（墓掘り人）という概念は、歴史に消された女性たちの痕跡を探す積極的で実践的な人を指す。散逸した公文書、手書きの伝記、未完の詩、色褪せた写真、レシピに至るまで様々な痕跡を探し出す、積極的な調査者のことだ。今回の講演では、こうやって歴史に消された女性たちの名前を、声を出して読み上げている映像で紹介された。

このように第２セッションは人種化に基づく「他者化」や、それを利用した植民地主義・帝国主義・軍事主義の暴力構図の連鎖が、沖縄やインドネシアの歴史的文脈によって述べられながら、それに立ち向かう言葉をどのように模索してきたのか。具体的な「活動の現場」の声をも含んだものだったと言える。

## 戦争とジェンダー

戦争や大量虐殺の傷跡は、時間軸での「戦争」の終結とは関係なく、その場に住んでいる人々のその「後」の福祉、復興、再建にまで深い影を落とすものである。第３セッションでは、山城紀子（フリージャーナリスト）が「沖縄戦・米軍統治下の福祉と女性」と題して、沖縄戦後日本と分類され米軍の直接占領下の沖縄で行われた福祉政策の影を、Jose Jowel Canuday（アテネオ大学）が「平和の最後の数マイル：ミンダナオ島ザンサモロ地域のジェンダー化された最前線における長期戦争の後に何が起こるのか」というタイトルで発表した。

このセッションを一言でいうならば、「無化された存在」から問う「戦争とジェンダー」ともいえる。

山城が注目したのは、圧倒的な「恐怖」によって身内を殺してしまった痛みを



© 2026 SGRA

「語る」という歩みにおける苦しみである。特に「我が子」を助けることが出来なかった「母親」たちの体験を含む、沖縄戦の語りが公式の場に浮上したのは、沖縄で死者が神様になると言われる33回忌、つまり1977年以降であった点に注目する。

なお、戦後を生きる母親たちにとっても、ハンセン病や米軍との子どもを抱える女性たちは、いわゆる「福祉」の恩恵を受けることが出来なかった。前者は、「自宅監禁」という形で、村社会からも孤立させられ、後者は例えば米軍と正式な結婚をした場合にも、無国籍児と化されていく。沖縄の無国籍児が多発していた1970年代、日本では父親が日本国籍でなければ日本国籍を習得できず、またアメリカでは、父親自身が米国で成人になって一定期間の居住実績がなければ国籍を得ることは出来なかったからである。

「法」によって守られない人々の存在は、「福祉」の面においては「本土並み」を掲げられるようになり、復帰後に徐々に改善されていく。しかし、2024年に明らかになった無国籍児男性のように、何処にも属さずにブラックボックスの中の存在のように生きている人々を生み出した「戦争」の足跡は、依然として現在進行形であることが示された。

山城が紹介しているように1970年代沖縄が、高度成長期の日本本土とは異なる「福祉」の死角地帯の人々が浮上し、片方では戦争の記憶を語り始めていた頃、フィリピンでも、戦後続いてきた政府と「モロ」と呼ばれるミンダナオ地域に移住したムスリム住民たちの間の和平・合意のプロセスが進行していった。フィリピンは戦後、独立国家となったが、その誕生と共に、16世紀はスペイン、19世紀はアメリカの占領を受けた負の歴史とも重なり、圧倒的多数のカトリックとムスリムの存在を胚胎したのである。カトリックが多数を示すフィリピンの中で、わずか6%余りしか存在しないムスリムが居住するバンサナモの長きにわたる葛藤は、2014年バンサモロ包括和平合意締結など様々な形での「和平」が模索されており、2025年現在には地方自治条例の制定に向かっている。だが、その「平和の最後の数マイル」に見えなくなっているのは何か。

Jose Jowel Canudayは、戦後半世紀も続く長きにわたる「戦争」状況における「ジェンダー化」された日常に焦点を当てる。銃後を支える役割を女性に任された村社会は、避難や紛争の混乱において、自然災害にも備えることが出来ず、洪水や干ばつの被害を余儀なくされる。農業中心の社会の生産構図を保つ事が出来ず、それは、子どもの栄養失調の高さに影響を及ぼす。学校に通うことが出来ない子どもの比率も圧倒的に高い。驚くべきことは、1970年代以降は分離主義勢力の拠点となり、1990年以降には東南アジアで活動するテログループの潜伏地とも報告されたバンサモロ地域が、2001年以降、アメリカのグローバルな対テロ戦争の警戒地域として設定されたことである。

本セッションを通して、山城やJose Jowel Canudayが言及した「戦争とジェンダー」が、2025年現在、私たちのすぐ近くに存在している点である。無国籍児にしてもバンサナモの状況にしても、目に見えない形となっている人々への暴力は、現在進行形で実行されており、特定の人々の移動する権利を奪い、自らの安全を保ちつつ教育を受け、就職し、住まいを構える当たり前の「日常」を制限





© 2026 SGRA

する形の暴力として存在している。

## 多様性からなる提言、一枚岩ではないアクションを探って

最後の第4セッションは活動と未来に焦点を当てたパネルで、20代の大学生、活動家が中心となって議論する場として設定された。沖縄で繰り返される米軍による性犯罪、その基地暴力の問題を国連女性の地位委員会に訴えた沖縄キリスト教学院大学の在学生（徳田彩）・卒業生（松田明）が、沖縄の状況を国連女性の地位委員会（CSW）に伝えた経験から学んだものを中心に報告した。また、沖縄大学の在学生（中塚静樹）は、沖縄戦体験者とのかかわりの中で学んだこと、沖縄に住む大学生として日々の学びのなかで感じた問題認識を発表している。さらに、沖縄の学生たちと同年代のタイの学生活動家（Memee Nitchakarn）が、沖縄の現状と軍事クーデターや戒厳令が繰り返し行われ、民主化運動のさなかにあるタイの状況を報告した。

これら若者たちの議論の後は、第1、第2セッションで発表された沖縄の活動家たちが、ちょうど30年前、同じ国際会議で沖縄戦から米軍基地に連なる暴力の現状を訴えた経験などからの声が相次いだ。登壇者の大学生たちからも、また、戦争の記憶が薄れていく中で、若者たちへ寄せられる「頑張ってね」という言葉が時には励みではなく重荷に感じるとの本音も発せられた。セッションの中で、この涙ぐんだ若い大学生のつぶやきのようなものが、まさに、「暴力に抗する他者の眼差し」と題した冨山の基調演説での提起に再び戻り、「私は○○ではない」という態度への省察を促したような気がしている。

私は沖縄人ではないですが。私は若者ではないですが。私は女/男ではないですが。私は○○の専門家ではないですが。私はこの問題は知らないですが。など、私たちが前置きとして語っている数多くの言葉が、実は、暴力にさらされている人々を黙らせ、「言葉が後方に退き暴力がせりあがってくる状況」を容認したかも知れない。前置きで語られる言葉に私たちは、どれだけ自分を「安全」な場所に置き、暴力に抗した、あるいは抗しようとする言葉を、無力にさせていったのだろうか。「何度東京に来て同じ話をすればいいだろう」という言葉は沖縄の活動家の話に限らない。だが、全体の議論が沖縄で開かれたことで、これほど広範囲の議論が現実に迫ってくる問題として響いたのは事実であろう。

今回のシンポジウム自体、時間軸では取り上げられない＜戦後＞という提起、それをジェンダー視点で議論していくという多少、無謀に近い挑戦であったが、それにしても沖縄という＜場の力＞によって一つの言霊ははっきり共有されていったのではないかと考える。おそらく提起された問題に対してこの場の人たちが「沖縄の問題」「タイの問題」「フィリピンの問題」などと所有格を付け、前置きの中で自分と無縁な問題として聞いていたわけではないことだ。それは確かに私たちが生活する空間で起きた問題ではない。しかし、それぞれの登壇者が提起している暴力から、身の回りに起きている様々な状況を考えさせながら、「暴力」の表れる際の類似性に驚きながら、一定の緊張感を保ちながら聞いて、感じて、考えさせる場となった。



© 2026 SGRA

目の前に基地を抱え、性暴力、基地汚染、差別としか言いようがない「法」の規範などの状況にかかわる市民たちに見守られるなか、それぞれの暴力状況を報告する登壇者もまた、＜他者＞でありながら、この沖縄の状況と響き合う関係性を持つものとして、それぞれの議論を進めている。確かに他者の状況が報告されても、それを聞く私たちには、主語を置き換える体験をしたのではないか。いつか私たちたちに起きたこと、また起きるかも知れない暴力的な状況であることとして。その感覚は冨山の言葉を借りれば＜暴力の予感＞であるだろうし、その感覚こそ、今回の国際シンポジウムが沖縄で開かれた意味として大切であったと考える。

（洪玧伸「第78回SGRAフォーラム『沖縄から＜アジアのジェンダーと暴力＞につながる可能性を探るということ―戦前、戦後の時間軸では問えない日常から問いかけを中心に―』報告」より転載）

© 2026 SGRA

登壇者
略歴

## ［講　演］

### ■冨山一郎／Ichiro TOMIYAMA

同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授。著書に、『近代日本と「沖縄人」』（日本経済評論社、1990年）、『戦場の記憶』（日本経済評論社、1995年）、同増補版（2006年）、『暴力の予感』（岩波書店、2002年）、『流着の思想』（インパクト出版会、2013年）、『始まりの知』(法政大学出版局、2018年)、がある。編著に、『記憶が語り始める』（東京大学出版会、2006年）、『ポスト・ユートピアの人類学』石塚道子、田沼幸子と共編（人文書院、2008年）、『現代沖縄の歴史経験』森宣雄と共編（青弓社、2010年）、『コンフリクトから問う』田沼幸子と共編（大阪大学出版会、2011年）、『あま世へ』森宣雄・戸邉秀明と共編（法政大学出版局、2017年）、『軍事的暴力を問う』鄭柚鎮と共編（青弓社、2018年）、などがある。

## ［発　表］

### ■高里鈴代／Suzuyo TAKAZATO

1940年生。1982年から7年那覇市婦人相談員、1989年から4期15年那覇市議会議員、「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」共同代表、「軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」沖縄代表。元「強姦救援センター・沖縄（REICO）」代表。「辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議」共同代表。著書に『沖縄の女たち―基地・軍隊と女性の人権』（明石書店、1996年）共著に『社会を拓いた女たち・沖縄』（沖縄タイムス社、2014年）『沖縄にみる性暴力と軍事主義』富坂キリスト教センター編（御茶の水書房、2017年）などがある。

### ■インタン・パラマディタ／Intan Paramaditha

インドネシアの作家、学者、フェミニスト活動家。脱植民地化の知識生産に焦点を当てた、島嶼横断的なフェミニスト集団「Sekolah Pemikiran Perempuan」の共同設立者であり、インドネシアにおけるフェミニストの知識と歴史を発掘するフェスティバル「Etalase Pemikiran Perempuan（ETALASE）」を主催している。
『The Routledge Companion to Asian Cinemas』共同編集者。小説『The Wandering（彷徨）』はイングリッシュPEN翻訳賞を受賞し、短編集『Apple and Knife』はVintage Classicsの「Weird Girls」シリーズに収録されている。シドニーのマッコーリー大学でメディアと映画学を教えている。

### ■山城紀子／Noriko YAMASHIRO

ジャーナリスト。1949年生。1974年からから2004年まで沖縄タイムス記者。主な連載記事に「老いをみる―在宅福祉の現場から」、「社会の谷間に―赤ちゃん置き去りの背景」、「医療過誤訴訟の周辺」など。著書に『心病んでも―「あたりまえ」に向かって』（ニライ社、1998年）、『新聞コラム集〈女性記者〉の眼』（ボーダーインク、2004年）、『人を不幸にしない医療』（岩波現代文庫、2011年）、『あきらめない―全盲の英語教師・与座健作の挑戦』（風媒社、2003年）など。共著に『社会を拓いた女たち・沖縄』（沖縄タイムス社、2014年）、『沖縄にみる性暴力と軍事主義』（お茶の水書房）、『沖縄という窓』（岩波書店、2022年）などがある。

### ■ホセ・ジョエル・カヌディー／Jose Jowel Canuday

オックスフォード大学で社会文化人類学の博士号を取得し、アテネオ・デ・マニラ大学社会学・人類学部の准教授。文化間の溝を埋めるためのアプローチを開発する、学術と実践を重



© 2026 SGRA

視する機関であるタグプアン・アテネオ対話・研究・協働センターの所長を務めている。研究分野は、先住民の権利と自己決定、政治的に周縁化された地域におけるコスモポリタニズム、プライマリケアの不平等である。

### ■徳田 彩／Aya TOKUDA

2003年生まれ、沖縄キリスト教学院大学人文学部 英語コミュニケーション学科 4年生

### ■松田 明／Mei MATSUDA

1999年生まれ、沖縄キリスト教学院大学人文学部 英語コミュニケーション学科 卒業生

### ■ニチャカーン・ラクウォンリット／ミミー／Nitchakarn Rakwongrit (Memee)

タイのバンコクを拠点とする若きフェミニスト活動家。2020年のタイ民主化デモに参加し、以来、精力的に活動している。若い年齢にもかかわらず、少なくとも7件の政治的訴追に直面しており、そのうち5件は未成年時に起こっている。現在、ミルクティー・アライアンス・タイランドに積極的に参加し、フェミニズムと集団文化を社会運動に取り入れることを目指している。

### ■中塚静樹／Seiji NAKATSUKA

2003年生まれ、沖縄大学国際コミュニケーション学科 4年生

## ［コメンテーター］

### ■宮城晴美／Harumi MIYAGI

沖縄女性史研究家。1949年座間味村生まれ。沖縄の月刊誌記者・編集者を経て那覇市役所勤務。『なは・女のあしあと那覇女性史（前近代～現代）』の編集・刊行に携わった後、那覇市歴史資料室で『那覇市史現代』の編集・刊行を担当。那覇市歴史博物館を定年退職後、県内4大学で非常勤講師として、沖縄女性史、沖縄近現代史、ジェンダー論など10年余り担当する。また、1994年から新沖縄県史編集委員として『沖縄県史女性史』編さんなどに携わり、現在に至る。

### ■ロバート・リケット／Robert RICKETTS

1944アメリカ生まれ。バージニア大学中退（1964）、アルジェリアでボランティア。パリ大学（1965-66）、国際基督教大学（1966-69）を経て、カナダのモントリオール大学の人類学研究科博士課程満期退学（1975-83）。和光大学人間関係学部の専任教員、専攻は民族関係、多文化社会論（1992-2015）。著作に「朝鮮戦争前後における在日朝鮮人政策―戦後単一民族国家の起点」大沼久夫・編『朝鮮戦争と日本』（東京：新幹社、2006）他多数。英訳にEiji TAKEMAE ,The Allied Occupation of Japan. Preface by John Dower ( New York : Continuum,2002)HONG Yunshin, “Comfort Stations” as Remembered by Okinawans during World War II ( Leiden & Boston : Brill , 2020)他多数。

### ■グオ・リフ／Lifu GUO

中国出身。クアラルンプール建設大学言語情報学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科





© 2026 SGRA

国際社会科学専攻修士課程修了。同大学院地域文化専攻博士号取得。2024年より筑波大学ヒューマンエンパワーメント推進局助教。学部と修士課程の間では、北京LGBTセンターや北京クィア映画祭をはじめ、中国における性的マイノリティの社会運動に携わってきた。研究テーマはポスト／新冷戦構造における中国の性の政治。主な論文に「Medals and Conspiracies : Chinese and Japanese Online Trans-Exclusionary Discoursesduring the 2020 Tokyo Olympic Games」、「中国における包括的性教育の推進と反動：『生命を大切に：小学生性健康教育読本』を事例に」、「終わるエイズ、健康な中国：China AIDS Walkを事例に中国におけるゲイ・エイズ運動を再考する」などがある

## ■ミヤ・ドゥイ・ロスティカ／Mya Dwi Rostika

2010年度渥美奨学生。国士館大学大学院政治学研究科より博士（政治学）を取得。現在、大東文化大学国際関係学部講師。専門はインドネシア地域研究で、特に女性英雄カルティニの政治的役割を研究。大学で「多文化共生」を担当しており、日本のインドネシア人コミュニティーにも関心を持ち、副次的な研究として取り組んでいる。

## ■梁 絃娥／Hyunah YANG

ソウル大学法学専門大学院教授、韓国ジェンダー法学会会長、日本軍'慰安婦'研究会会長、2000年日本軍性奴隷戦犯女性国際法廷、南北共同起訴団検事、日本・東京・南北共同起訴団検事。

## ■福永玄弥／Genya FUKUNAGA

東京大学教養学部付属教養教育高度化機構D&I部門准教授。専門はフェミニズム、クィア研究、社会学、地域研究（東アジア）。主な関心は東アジアにおける植民地主義・冷戦体制と性政治。著作に『性／生をめぐる闘争——台湾と韓国における性的マイノリティの運動と政治』（明石書店、2025年）など。

## ■増渕あさ子／Asako MASUBUCHI

立命館大学産業社会学部准教授。専門は歴史社会学、沖縄占領史、医療史、エスニシティ研究。主な著作として、“Stamping Out the ‘Nation-Ruining Disease’ : Anti-Tuberculosis Campaignin US-Occupied Okinawa” , Social History of Medicine34(4),2021、「医療衛生から再考する沖縄米軍占領」歴史学研究会編『日本復帰50年琉球沖縄史の現在地』（東京大学出版会、2024年）、『軍事化される福祉―米軍統治下沖縄における「救済」の系譜』（インパクト出版会、2025年）など。

## ■親川裕子／Yuko OYAKAWA

沖縄大学、Be the Change Okinawa代表。宜野湾市出身。1975年生まれ。沖縄大学、沖縄国際大学、日本女子大学非常勤講師。琉球大学大学院人文社会科学研究科比較地域文化専攻博士後期課程在籍。ジェンダー、複合差別、国際人権法の視点から沖縄戦後史、沖縄女性史を研究。現在、1950年代の戦後沖縄における国際福祉（国際養子縁組、無国籍児）に関する差別の交差性についての考察に取り組む。沖縄大学地域研究所特別研究員、沖縄国際大学沖縄法政研究所特別研究員、反差別国際運動（IMADR）特別研究員、同志社大学アメリカ研究所嘱託研究員、「新崎盛暉平和活動奨励基金」運営委員。【著書・作品など】「戦後沖縄における「国際福祉」の萌芽「ハーフ・ウェイ・ホーム」から「国際社会事業団沖縄代表部」の設立へ:ミネソタ大学エルマーL.アンダーセン図書館社会福祉史アーカイブス（Social



© 2026 SGRA

Welfare History Archives, Elmer L.Andersen Library, University of Minnesota: SWHA）調査について」『同志社アメリカ研究』（第61号、同志社大学アメリカ研究所、2025年）「第5章まっとうな「狂気の声」」『「いくさ世」の非戦論ウクライナ×パレスチナ×沖縄が交差する世界』（佐藤幸男編著、インパクト出版会、2024年）

### ■上野さやか／Sayaka UENO

沖縄大学、エンパワメント・ラボ・おきなわ共同代表。性教育およびジェンダー教育等を啓発する「エンパワメント・ラボおきなわ」を2021年設立し、県内の学校や地域での講話等を行う。2019年より「未来を変える、社会を変える、性暴力をゆるさない、被害者に寄り添う」ためのフラワーデモin沖縄呼びかけ人として、毎月11日県庁前県民広場にて実施。性暴力やこどもと女性への暴力防止のための活動等を行う。本務としてＮＰＯ法人おきなわＣＡＰセンター理事／事務局、ＮＰＯ法人エンパワメントかながわ相談員、沖縄大学非常勤講師（ジェンダー学）等を行う。

### ■ボニー・ランバタン／Bonni Rambatan

トランスフェミニンでノンバイナリーの作家、アーティスト、批評理論家であり、ジェンダー正義と政治経済哲学の交差点で活動してる。現在、アジアのクィアの子どもたちの福祉を訴える団体「レインボーパンダ・RainbowPanda」の芸術・創造表現ディレクターを務めている。独立した学者でアーティストでもあり、連帯と解放のための新たな可能性を模索することに情熱を注いでいる。最新刊『イベント・ホライズン：セクシュアリティ、政治、オンライン文化、そして資本主義の限界』（ジェイコブ・ヨハンセンとの共著、Zer0 Booksより2022年出版）（英語）は、「私たちの欲望が巨大テクノロジー企業の産物になったとき、私たちにはどのような夢を見る方法が残されているのだろうか？」という問いを投げかけている。詳細：https://www.bonnibel.net/

［司会］

### ■洪 玧伸／Yunshin HONG

韓国ソウル生まれ。早稲田大学で博士号(国際関係学)を取得。現在、沖縄大学人文学部国際コミュニケーション学准教授。著書に、『沖縄戦場の記憶と「慰安所」』（インパクト出版会、改訂版2022年）Comfort Stations as Remembered by Okinawans during World War II (Brill、2020)、共著に『フェミニズムを学ぶ人のために』申琪榮・青山薫編（世界思想社、2026年）、『戦後・暴力・ジェンダーⅠ：戦後思想のポリティクス』大越愛子・井桁碧編（青弓社、2005年）、『戦後・暴力・ジェンダーⅢ：現代フェミニズムのエシックス』大越愛子・井桁碧編（青弓社、2010年）、『現代沖縄の歴史経験』森宣雄・冨山一郎編（青弓社、2010年）、編著に『戦場の宮古島と「慰安所」―12のことばが刻む「女たちへ」』（なんよう文庫、2009年）、などがある。沖縄の歴史とジェンダー、日本軍「慰安婦」問題、戦時性暴力などを専門とし、多角的な視点から研究を進めている。

### ■イドジーエヴァ・ジアーナ／Diana IDZIEVA

ダゲスタン共和国出身。2024年度渥美財団奨学生。東京外国語大学大学院総合国際学研究科より2021年に修士号（文学）、2025年9月に博士号（文学）予定。主に日本の現代文学の研究を行っており、博士論文のテーマは今村夏子の作品における暴力性である。現在、東京外国語大学、慶應義塾大学、津田塾大学で非常勤講師。





© 2026 SGRA

### ■ ミキ・デザキ／Miki DEZAKI

ドキュメンタリー映像作家、YouTuber。1983年、アメリカ・フロリダ州生まれの日系アメリカ人2世。ミネソタ大学ツイン・シティーズ校で医大予科生として生理学専攻で学位を取得後、2007年にJETプログラムのALT（外国人英語等教育補助員）として来日し、山梨県と沖縄県の中高等学校で5年間、教鞭を執る。同時にYouTuber「Medama Sensei」として、コメディビデオや日本、アメリカの差別問題をテーマに映像作品を数多く制作、公開。タイで仏教僧となるための修行の後、2015年に再来日。上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科修士課程を2018年に修了。初映画監督作品である『主戦場』は世界50以上の大学や学会で上映された。現在、2作目のドキュメンタリー映画を制作中。

### ■ デール・ソンヤ／Sonja DALE

アジア文化対話プログラムディレクター、関口グローバル研究会（SGRA）プログラムコーディネータ、レインボー・パンダ（Rainbow Panda）のコミュニティとメンバーシップディレクターを務めている。上智大学でグローバルスタディーズの博士号を取得し、包摂と排除の社会構造やアイデンティティ構造に関心をもち、これまでは日本におけるLGBTQ問題とノンバイナリーのアイデンティティに焦点を当ててきた。現在はマイノリティにとっての安全な空間つくりと多様なストーリーテリングに力を入れている。



© 2026 SGRA

附録2

沖縄スタディツアー報告

# 普天間から辺野古・大浦湾へ

イドジーエヴァ・ジアーナ
東京外国語大学

第78回SGRAフォーラムの一環として実施されたスタディツアー「普天間から辺野古・大浦湾へ」に参加した。沖縄が抱える歴史的背景と米軍基地問題、そして環境や人権をめぐる課題を実地に学ぶことを目的として企画されたものである。限られた日程ではあったが、現地での視察と講義を通じて、沖縄の人々が直面する現実を多角的に観察し、理解する機会となった。

15世紀に成立した琉球王国は、中国や日本との間で外交と貿易を展開し、独自の文化を育んできた。しかし1609年の薩摩侵攻以降、二重支配の下で苦難の歴史を歩み、明治期には琉球処分により日本へ併合された。その後、言語や風俗の抑圧、土地の国有化、軍事化が進められたことは、現在の沖縄が抱える負担の原点でもある。

第二次世界大戦末期の沖縄戦は、県民約22万人が犠牲となった苛烈な地上戦であり、民間人の犠牲の大きさは他に例を見ない。戦後は米軍による接収が進み、住民の土地は銃剣とブルドーザーで奪われ、冷戦構造の中で沖縄は巨大な軍事拠点と化した。1972年の本土復帰以降も、在日米軍専用施設の約70％が沖縄に集中し、過重な負担が続いている。

私たちは宜野湾市に位置する嘉数高台公園を訪れ、そこから米海兵隊普天間飛行場を視察した。市街地の真ん中に位置するこの飛行場は学校や住宅に隣接し、騒音・落下物・環境汚染など、多くの危険を地域社会にもたらしている。最近では有機フッ素化合物（PFAS）などの有害物質による地下水汚染が健康被害への懸念を強めている。加えて、航空機事故や米兵による事件や事故は住民の不安を高めていることを実感した。

1995年の米兵による12歳の少女暴行事件を機に、普天間飛行場の返還が日米間で合意された。しかし危険性除去の代替策として浮上したのが、名護市辺野古への移設計画である。

続いて訪れた辺野古は現在、新たな滑走路と港湾機能を備えた基地建設が進行している。辺野古や大浦湾の152ヘクタールが埋め立て対象となり、世界的にも稀少な生態系が破壊の危機にさらされているという。特にジュゴンやアオサンゴなど絶滅危惧種262種を含む約5,300種の生物が生息するこの海域は、国際的NGO「ミッション・ブルー」により日本初の「Hope Spot」に認定されている。にもかかわらず、政府は環境影響評価を軽視し、建設を進めている実態を知り、





© 2026 SGRA

深い憂慮を覚えた。

2014年の着工後に建設予定地の海底は軟弱地盤であることが判明し、71,000本の杭打ちによる補強が必要とされる。巨額の費用と長期化が予想され、米国からも実効性への疑念が投げかけられている。完成時期は早くとも2037年以降とされ、現時点では普天間返還の見通しすら曖昧なままである。

こうした状況に対し、沖縄の市民は長年にわたり粘り強く抗議活動を続けてきた。辺野古の浜辺やゲート前での座り込み、カヌーによる海上抗議、署名や住民投票、さらには国際自然保護連合（IUCN）との協力など、多様な手段が展開されている。2003年に提訴された「沖縄ジュゴン訴訟」は、米国の国家歴史保存法を適用させた画期的な事例であり、沖縄の声を国際的に可視化する機会となった。

近年では国連人種差別撤廃委員会へ働きかけ、同委員会が日本政府に対し、辺野古建設が琉球・沖縄の先住民族の権利を侵害していないか説明を求めるなど、国連を巻き込んだ動きも生まれている。現地で出会った人々の言葉には、生活を守り、未来世代に豊かな自然を残したいという切実な願いが込められていた。

今回痛感したのは、沖縄の基地問題が単なる地方の課題ではなく、日本の安全保障政策や環境保護、人権、そして暴力からの開放に直結する問題だという点である。辺野古を「唯一の選択肢」と繰り返してきた日米両政府の姿勢は、市民参加や自治の尊重を欠き、対話の不在を浮き彫りにした。さらに、軟弱地盤問題や環境破壊のリスクを前にしても計画を見直さないかたくなさは、政策決定の硬直性を象徴している。

求められるのは、沖縄の人々の声に耳を傾けるとともに、この問題を自分ごととして捉える視点である。環境、人権、平和という普遍的な価値のために、何ができるのかを考え、社会的対話を広げていくことが必要だろう。

ツアーで得た経験は、沖縄の歴史と現在を直視する重要な機会となった。普天間と辺野古の現実を前に、私たち一人一人が問われているのは、どのような未来を選び取るのかという根源的な問いである。沖縄が背負わされてきた過重な負担を減じ、豊かな自然と文化を守り抜くために学び続け、行動することの必要性を強く心に刻んだ。

（イドジーエヴァ「沖縄スタディツアー報告―普天間から辺野古・大浦湾へ―」より転載）

© 2026 SGRA

附録3

宮古島スタディツアー活動報告

# 戦後80年に咲く花

グオ・リフ
筑波大学

2025年9月11日から16日にかけて、沖縄の地で「第78回SGRAフォーラム／第5回アジア文化対話／第611回沖縄大学土曜教養講座」が、「アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性」のテーマで開催されました。今回のエッセイでは、印象に残った14日からの宮古島スタディツアーの報告をします。

今回のスタディツアーは、SGRAによる「第5回アジア文化対話」の一環として、戦後80年という歴史的な節目に実施されました。世界各地から集まった研究者や活動家たちが、二度と戦争と暴力を繰り返さない未来を希求しながら、沖縄という地で対話と学びを深めるかけがえのない機会です。舞台となった宮古島は、沖縄本島から南西に約300km離れた位置にある離島で、太平洋戦争末期には地上戦こそ免れたものの、日本軍による飛行場建設や住民の強制疎開が行われ、朝鮮人労務者や「慰安婦」とされた女性たちが多数送り込まれた場所でもあります。戦後は米軍統治を経て、現在では自衛隊の基地が次々に建設されるなど、南西諸島防衛の最前線として軍事的要所となっています。

ツアーを企画した沖縄大学の洪玧伸（ホン・ユンシン）先生は、長年にわたり宮古島をフィールドとして慰安婦の記憶を丹念にたどってきた研究者です。その洪先生の案内のもと、慰安婦たちが日常的に歌っていた「アリラン」の歌声をたどりながら、草むらの奥に眠る小さな井戸や忘れ去られた碑を一つひとつ訪ね、80年前の歴史と静かに向き合う旅となりました。島内をバスで移動する際にはいくつもの自衛隊施設の前を通り、その急速な軍事化の進行を肌で感じました。その景色からは、島の人々が日常的に戦争や暴力の影と隣り合わせに生き、必要とあらば国家に見捨てられ、いわば「disposable（廃棄されうる存在）」としての不安を抱えている現実が浮かび上がりました。80年前に終わったはずの戦争、あるいは冷戦という過去のはずの出来事が、ここ宮古島ではいまだに現在進行形の問題として存在している、そんな実感を胸に刻む体験となったのです。

参加者はまず宮古島市平良の公民館で開催されたシンポジウムに出席しました。オランダから参加した近代東アジア史の研究者K・W・ラドケ氏と韓国で長年慰安婦問題に取り組んできた梁絃娥（ヤン・ヒョナ）氏が講演し、戦時中宮古島に連行された女性たちの証言調査や、現在の東アジアにおける軍事化とジェンダー問題について報告がありました。地元の聴講者も交え、活発な意見交換が行われ、宮古島でこのような国際対話の機会が持たれた意義を実感しました。

シンポジウムの後、宮古島の「アリランの碑」の前で、地元の定例行事と


© 2026 SGRA

なっている「慰霊と平和を祈念するつどい」に参加しました。この「アリランの碑」は、かつて宮古島に連れてこられた朝鮮人「慰安婦」たちの記憶を刻むものであり、碑文には日本語や韓国語、英語を含む12か国語で平和への祈りが綴られています。当時、故郷を想いながら日々「アリラン」を口ずさんでいた女性たちの歌声は、やがて島民の耳にも親しまれ、宮古島独自の旋律や歌詞をもつ「アリラン」として受け継がれるようになったと伝えられています。慰安所など実際の「歴史的証拠」がない今では、この宮古島のアリランの歌は慰安婦の存在を証明する「文化的証拠」となったのです。世界各地から集まった参加者たちは、碑の前で静かに手を取り合い、「アリラン」を歌い、平和への祈願を言葉にして交わしました。歌声は時を超え、国境を越えて共鳴し、参加者の胸に深く刻まれる時間となりました。このような記憶の共有と祈りの場は、戦争の傷跡を風化させず、アジアの平和と共生を目指す実践のひとつとして、強く心に残るものでした。

その後、バスは島内を巡りながら、現在の宮古島における自衛隊配備の状況についても案内がありました。近年、陸上自衛隊のミサイル部隊が新設され、島の一角にはミサイル庫やレーダー施設が築かれています。緑豊かなサトウキビ畑の中に突如現れる軍事施設のフェンスを目にし、遠い戦争の記憶が現在の軍事化につながっている様子が肌で感じられました。

15日には、島内各地に残る戦争遺跡をさらに訪問しました。朝鮮人軍夫（従軍労務者）たちが過酷な労働の末に掘り抜いたというピンプ嶺の地下壕跡や、「慰安婦」たちが水汲みに使ったという井戸跡、通称「ツガガー」などを見学しました。雑草に覆われた小高い丘にひっそりと口を開ける井戸を覗き込み、戦時中ここで喉の渇きを癒やされた名も知らぬ女性たちの姿に思いを馳せました。宮古島と隣接する伊良部島を結ぶ全長3.5kmの伊良部大橋を渡り、下地島空港の西側に広がる海岸にも立ち寄りました。沖縄県が管理する同空港は元々パイロット訓練用に建設された滑走路ですが、地政学的に、また近年の国際情勢を受けて、一部軍事利用の可能性も取り沙汰されています。2019年に新ターミナルが開業して定期便が就航してからは利用者が急増していますが、地元では環境保護と観光振興の観点から慎重な議論が続いているとのことで、私たちは透き通る青い海を眺めつつ、平和な島の暮らしを守ることの難しさについて考えさせられました。

一連のフォーラムとフィールドワークを通じて、参加者たちはジェンダーと暴力という問題を多面的に捉え直す貴重な体験を得ました。沖縄という土地で直面した過去と現在、戦争の被害、基地による犠牲、環境破壊への懸念など、それらを実際に見聞きしたことで、机上の議論では得られないリアルな実感が伴いました。戦場の暴力は今も続くグローバルな課題であり、ジェンダー視点が欠かせないとの問題意識が、肌感覚をもって腑に落ちたと言えるでしょう。各国から集った参加者同士の対話を通じ、文化や立場の違いを越えて共感し学び合うことで、暴力の連鎖を断ち切るヒントが見えてきました。とりわけ、宮古島の「アリランの碑」で皆が手を取り合い歌ったひとときは、過去の犠牲を無駄にせず未来の平和を築くために連帯することの大切さを象徴していたように思います。



© 2026 SGRA

終わりに、私が心に深く残している小さなエピソードを一つご紹介したいと思います。2025年5月、下見のために宮古島を訪れた際、私はアリランの碑のすぐ隣に、美しく鮮やかな赤い花を咲かせる木を見つけました。地元ガイドの清美さんによれば、この木は今から20年前、アリランの碑が建立されたときに地元の人々によって植えられました。ところが、それ以来一度も花を咲かせたことがなかったといいます。その木が、まさに戦後80年という節目、そしてSGRAの参加者たちがこの地を訪れる直前のタイミングで初めて花を咲かせていたのです。その姿は、宮古島の土に静かに眠る記憶が、大地を通して鮮烈な色彩となり、私たちに語りかけているかのようでした。「忘れてはいけない」という声なき声が、自然の中に確かに息づいているように思えました。風に揺れるその花に向けて、戦後80年を越えても、この記憶と願いが咲き続けるように。

（郭立夫「戦後80年に咲く花：宮古島スタディツアー活動報告」より転載）

© 2026 SGRA

# SGRA レポート　バックナンバーのご案内

SGRA レポート01　設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一　2001. 1. 30発行

SGRA レポート02　CISV国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛　2001. 1. 15発行

SGRA レポート03　渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎　2001. 3. 15発行

SGRA レポート04　第1 回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10発行

SGRA レポート05　第2 回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲　2001. 5. 10発行

SGRA レポート06　投稿 「今日の留学」「はじめの一歩」 工藤正司　今西淳子　2001. 8. 30発行

SGRA レポート07　第3 回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊　2001. 10. 10発行

SGRA レポート08　第4 回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
臼井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蒋 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男　2002. 1. 20発行

SGRA レポート09　第5 回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ペマ・ギャルポ、林 泉忠　2002. 2. 28発行

SGRA レポート10　第6 回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三　2002. 6. 15発行

SGRA レポート11　投稿 「中国はなぜＷＴＯに加盟したのか」 金香海　2002. 7. 8発行

SGRA レポート12　第7 回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. ブレンサイン　2002. 10. 25発行

SGRA レポート13　投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト　2002. 12. 12発行

SGRA レポート14　第8 回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」＋宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・プートゥラ、孟 健軍、B.ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30発行、英語版2003. 3. 6発行

SGRA レポート15　投稿 「中国における行政訴訟―請求と処理状況に対する考察―」 呉東鎬　2003. 3. 7発行

SGRA レポート16　第9 回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子　2003. 5. 30発行

SGRA レポート17　第10 回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣　日本語版2003. 3. 25発行、英語版2003. 6. 6発行

SGRA レポート18　第11 回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子　2003. 8. 30発行

SGRA レポート19　投稿 「海軍の誕生と近代日本－幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 栄濬
2003. 12. 4発行

SGRA レポート20　第12 回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：ＣＯＰ３の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊　2004. 3. 10発行



© 2026 SGRA

SGRA レポート21　第３回日韓アジア未来フォーラム講演録 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」
平川均、孫洌、金雄熙、F・マキト、木宮正史、李元徳　2004. 6. 30発行

SGRA レポート22　渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争－どうして起こるのか　どう解決するか」 明石康　2004. 4. 20発行

SGRA レポート23　第13 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか－「共生」をキーワードとして－」
宮島喬、イコ・プラムティオノ　2004. 2. 25発行

SGRA レポート24　投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ　2004. 10. 14発行

SGRA レポート25　第14 回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙　2005. 3. 31発行

SGRA レポート26　第15 回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊　2005. 1. 24発行

SGRA レポート27　第16 回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッヂ、朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子　2005. 7. 30発行

SGRA レポート28　第17 回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美　2005. 7. 30発行

SGRA レポート29　第18 回フォーラム・第4 回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力における
ソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙　2005. 5. 20発行

SGRA レポート30　第19 回フォーラム講演録 「東アジア文化再考－自由と市民社会をキーワードに－」
宮崎法子、東島 誠　2005. 12. 20発行

SGRA レポート31　第20 回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F.マキト
2006. 2. 20発行

SGRA レポート32　第21 回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか－留学生－」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラパーブ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一　2006. 4. 10発行

SGRA レポート33　第22 回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民　2006. 7. 10発行

SGRA レポート34　第23 回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島薗 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ　2006. 11. 10発行

SGRA レポート35　第24 回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊　2007. 2. 10発行

SGRA レポート36　第25 回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるのか」
高橋冨士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇　2007. 4. 20発行

SGRA レポート37　第1 回チャイナ・フォーラムin 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫　2007. 6. 10発行

SGRA レポート38　第6 回日韓フォーラムin 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正　2007. 8. 31発行



© 2026 SGRA

SGRA レポート39　第26 回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦　2007. 11. 30発行

SGRA レポート40　第27 回フォーラム講演録 「アジアの外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチヤー・ムシカシントーン、今西淳子　2008. 5. 30発行

SGRA レポート41　第28 回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島薗進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤーヤ　2008. 3. 15発行

SGRA レポート42　第2 回チャイナ・フォーラムin 北京＆新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15 年―無理解と失敗から相互理解と信頼へ―」 高見邦雄　日本語版2008. 1. 10発行、中国語版 2008. 2. 20発行

SGRA レポート43　渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均　2008. 3. 1発行

SGRA レポート44　第29 回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25発行

SGRA レポート45　第30 回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～
日本・中国・シンガポール～」佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット　2008. 9. 20発行

SGRA レポート46　第31 回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」
東城清秀、田村啓二、外岡 豊　2009. 1. 10発行

SGRA レポート47　第32 回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」
清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8発行

SGRA レポート48　第3 回チャイナ・フォーラムin 延辺＆北京講演録 「一燈やがて万燈となる如く―
アジアの留学生と生活を共にした協会の50 年」工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15発行

SGRA レポート49　第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」
東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト　2009. 6. 30発行

SGRA レポート50　第34回フォーラム・第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」
平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲　日本語版、韓国語Web 版 2009. 9. 25発行

SGRA レポート51　第35 回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」
大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15発行

SGRA レポート52　第36 回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21 世紀の課題」
宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チィ、
劉 傑、孫 軍悦 日本語版2010. 3. 25発行、中国語Web版2013. 12. 20発行

SGRA レポート53　第4 回チャイナ・フォーラム in 北京＆上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～
TABLE FOR TWO ～」近藤正晃ジェームス　2010. 4. 30発行

SGRA レポート54　第37 回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：
東アジアのエリート教育の現状と課題」玄田有史　シム・チュンキャット
金 範洙　張 建　2010. 5. 10発行

SGRA レポート55　第38 回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・
建築のエネルギー事情とライフスタイル～」木村建一、高 偉俊、
Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、
葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 栄珠、王 剣宏、福田展淳　2010. 12. 15発行



© 2026 SGRA

SGRA レポート56　第5回チャイナ・フォーラム in 北京＆フフホト講演録 「中国の環境問題と日中民間協力」
第一部（北京）:「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉
第二部（フフホト）:「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン
日本語版2011. 5. 10発行、中国語版2011. 7. 20発行

SGRA レポート57　第39回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、
ティムール・ダダバエフ、ゾンタック・ミラ、エリック・シッケタンツ、島薗 進、陳 継東
2011. 12. 30発行

SGRA レポート58　投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均　2011. 2. 15発行

SGRA レポート59　第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」
朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤　2012. 1. 10発行

SGRA レポート60　第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」
田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F･マキト　2011. 11. 30発行

SGRA レポート61　第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川惠市、黒柳米司、朴 榮濬、
劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均　2012. 6. 18発行

SGRA レポート62　第6回チャイナ・フォーラム in 北京＆フフホト講演録
「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一
「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉
2012. 6. 15発行

SGRA レポート64　第43回SGRAフォーラム講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 栄濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ　2012. 11. 20発行

SGRA レポート65　第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曺圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄　2013. 2. 1発行

SGRA レポート66　渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994–1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20発行

SGRA レポート67　第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙　2014. 2. 25発行

SGRA レポート68　第7回SGRAチャイナ・フォーラムin北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語）　宮崎幸雄　2014. 5. 15発行

SGRA レポート69　第45回 SGRA フォーラム講演録「紛争の海から平和の海へ－東アジア海洋秩序の現状と展望－」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 栄濬 2014. 10. 20発行

SGRA レポート70　第46回 SGRA フォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーグ ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英　2015. 4. 20発行

SGRA レポート71　第47回 SGRA フォーラム講演録「科学技術とリスク社会－福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理－」崔 勝媛、島薗 進、平川秀幸　2015. 5. 25発行

SGRA レポート72　第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也　2015. 10. 20発行

SGRA レポート73　第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズム一
物流を中心に」李 鎮奎、金 雄熙、榊原英資、安 秉民、ド マン ホーン、李 鋼哲　2015. 11. 10発行



© 2026 SGRA

SGRAレポート74　第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正　他15名　2016. 6. 20発行

SGRAレポート75　第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらし―環境と女性と未来に向けて」
神﨑智子、斎藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子　2016. 6. 27発行

SGRAレポート76　第9回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「日中200年―文化史からの再検討」
劉 建輝　2020. 6. 18発行

SGRA レポート77　第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力―共進化アーキテクチャの模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト　2016. 11. 10発行

SGRA レポート78　第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和について―平和のための東アジア知識人連帯を考える―」南基正、木宮正史、朴栄濬、宋均営、林泉忠、都築勉　2017. 3. 27発行

SGRA レポート79　第52回SGRAフォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
日本語版2017. 6. 9発行、中国語版2017. 8. 7発行、韓国語版2017. 8. 7発行

SGRA レポート80　第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力―新たなアジア型モデルの模索―」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲、金 泰均　2017. 5. 16発行

SGRA レポート81　第56回SGRAフォーラム講演録「人を幸せにするロボット―人とロボットの共生社会をめざして第２回―」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美　2017. 11. 20発行

SGRA レポート82　第57回SGRAフォーラム講演録「第２回　日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性―蒙古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニバートル、向正樹、孫衛国、金甫桄、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳　日本語版2018. 5. 10発行、中国語版2018. 8. 22発行、韓国語版2018. 5. 10発行

SGRA レポート83　第58回SGRAフォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一帯一路』の地政学」朱建栄、李彦銘、朴栄濬、古賀慶、朴准儀　2018. 11. 16発行

SGRA レポート84　第11回SGRAチャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本麿充、呉孟晋
2019. 5. 17発行

SGRA レポート85　第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建栄、文炅錬　2019. 11. 22発行

SGRA レポート86　第59回SGRAフォーラム講演録「第３回　日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17世紀東アジアの国際関係―戦乱から安定へ―」三谷博、劉傑、趙珖、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姓姫、趙軼峰
日本語版2019. 9. 20発行、中国語版2019. 12. 22発行、韓国語版2019. 12. 22発行

SGRA レポート87　第61回SGRAフォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!?」
沈雨香、吉田文、シン・ジョンチョル、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙　2019. 3. 26 発行

SGRA レポート88　第12回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一　2020. 9. 25発行

SGRA レポート89　第62回SGRAフォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…？――不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1発行



© 2026 SGRA

SGRA レポート90　第63回SGRAフォーラム講演録「第４回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東アジア』の誕生―19世紀における国際秩序の転換―」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方
日本語版2020. 11. 20発行、中国語版2021. ２. 11発行、韓国語版2021. ２.11発行

SGRA レポート91　第13回SGRA-Vカフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠　2020. 11. 20発行

SGRA レポート92　第13回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、古市雅子、陳 龔　2021. 6. 18発行

SGRA レポート93　第14回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀繁美、劉 暁峰、塚本麿充、王 中忱、林 少陽　2021. 6. 18発行

SGRA レポート94　第65回SGRA-Vフォーラム講演録「第５回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠
日本語版2021. 10. 8発行、中国語版2021. 12. 15発行、韓国語版2021. 12. 15発行

SGRA レポート95　第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 栄濬、西野 純也
2021. 11. 17発行

SGRA レポート96　第66回SGRAフォーラム講演録「第６回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴
日本語版2022. 6. 9発行、中国語版2022. 9. 30発行、韓国語版2022. 8. 10発行

SGRA レポート97　第67回SGRAフォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現に向かうか―世界各地からの現状報告―」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン　2022. 2. 10発行

SGRA レポート98　第15回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生んだのか？―空間アジアの形成と生活世界の近代・現代―」山室信一　2022. 6. 9発行

SGRA レポート99　第68回SGRAフォーラム講演録「夢・希望・嘘―メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る―」ハンブルトン・アレクサンドラ、バラニャク平田ズザンナ、于寧、洪ユン伸　2022. 11. 1発行

SGRA レポート100　第20回日韓アジア未来フォーラム講演録「進撃のＫカルチャー――新韓流現象とその影響力」小針 進、韓 準、チュ・スワン・ザオ　2022. 11. 16発行

SGRA レポート101　第69回SGRAフォーラム講演録「第７回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『歴史大衆化』と東アジアの歴史学」韓 成敏
日本語版2023. 3. 22発行、中国語版2023. 8. 2発行、韓国語版2023. 6. 21発行

SGRA レポート102　第16回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「モダンの衝撃とアジアの百年―異中同あり、通底・反転するグローバリゼーション―」 山室信一　2023. 6. 14発行

SGRA レポート103　第70回SGRAフォーラム講演録「木造建築文化財の修復・保存について考える」 竹口泰生、姜 璿慧、永 昕群、アレハンドロ・マルティネス、塩原フローニ・フリデリケ
日本語版2023. 11. 10発行、中国語版2024. 6. 6発行、韓国語版2024. 4. 25発行

SGRA レポート104　第21回日韓アジア未来フォーラム講演録「新たな脅威（エマージングリスク）・新たな安全保障（エマージングセキュリティ）―これからの政策への挑戦―」 金 湘培、鈴木一人　2023. 11. 15発行

SGRA レポート105　第71回SGRAフォーラム講演録「20世紀前半、北東アジアに現れた『緑のウクライナ』という特別な空間」オリガ・ホメンコ、塚瀬 進、ナヒヤ、グロリア・ヤン ユー、マグダレナ・コウオジェイ
2023. 10. 30発行



© 2026 SGRA

SGRA レポート 106　第72回SGRAフォーラム講演録「第８回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか―教育・メディア・研究―」金 泰雄、唐 小兵、塩出浩之、江 沛、福間良明、李 基勳、安岡健一、梁 知恵、陳 紅民
日本語版2024. 4. 12発行、中国語版2024. 7. 30発行、韓国語版2024. 7. 31発行

SGRA レポート 107　第17回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「東南アジアにおける近代〈美術〉の誕生」後小路雅弘
2024. 6. 13発行

SGRA レポート 108　第22回日韓アジア未来フォーラム・2024現代日本学会春季国際学術大会講演録「ジェットコースターの日韓関係――何が正常で何が蜃気楼なのか」西野純也、李 昌玟、小針 進　2024.11.14発行

SGRA レポート 109　第74回SGRAフォーラム講演録「第９回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：東アジアの「国史」と東南アジア」楊 奎松、タンシンマンコン・パッタジット、吉田ますみ、尹 大栄、高 艷傑　日本語版2025. 6. 20発行、中国語版2025. 7. 30発行、韓国語版2025. 8. 20発行

SGRA レポート 110　第20回・22回SGRAカフェ・第73回SGRAフォーラム講演録「パレスチナを知ろう」ハディ ハーニ、ウィアム・ヌマン、溝川貴己、山本 薫　日本語版2025. 6. 20発行、英語版2025. 8. 27発行

SGRA レポート 111　第11回日台アジア未来フォーラム／東アジア日本研究者協議会第８回国際学術大会内講演録「疫病と東アジアの医学知識――知の連鎖と比較」李 尚仁、朴 漢珉、松村紀明、町 泉寿郎　2025. 6. 20発行

SGRA レポート 112　第18回SGRAチャイナ・フォーラム講演録「アジア近代美術における〈西洋〉の受容」後小路雅弘
2025. 11. 16発行

SGRA レポート 113　第75回SGRAフォーラム／第45回持続的な共有型成長セミナー講演録「東アジア地域市民の対話：国境を超える地方自治体・地域コミュニティ連携構想（LLABS）の可能性を探る」フェルディナンド C. マキト、佐藤考一、李 鋼哲、南 基正、林 泉忠　2025. 11. 19発行

SGRA レポート 114　第76回SGRAフォーラム講演録「中近東・東南アジアからみる日本と暮らす日本：それぞれの視点で考える」レベント・トクソズ、チェリッキ・メレキ、アヤット・ホセイニ、アキバリ・フーリエ、ミヤ・ドゥイ・ロスティカ　2025. 11. 21発行

SGRA レポート 115　第77回SGRAフォーラム講演録「なぜ、戦後80周年を記念するのか？―ポストトランプ時代の東アジアを考える―」沈 志華、藤原帰一　2026. 6. 11発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局（Tel：03-3943-7612　Email：sgra@aisf.or.jp）へご連絡ください。



© 2026 SGRA

※本フォーラムの開催にあたっては公益財団法人高橋産業経済研究財団より研究助成をいただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

SGRA レポート No. 116

第78回SGRAフォーラム・第5回アジア文化対話・第611回沖縄大学土曜教養講座

アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性

編集・発行　（公財）渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）
〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8
Tel: 03-3943-7612　Fax: 03-3943-1512
SGRA ホームページ: http://www.aisf.or.jp/sgra/
電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日　2026年6月15日
発行責任者　今西淳子
印刷　（株）平河工業社

ⓒ関口グローバル研究会　禁無断転載　本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。
©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

SGRA REPORT

SGRAレポート

NO.116

第78回SGRAフォーラム・第5回アジア文化対話・第611回沖縄大学土曜教養講座

# アジアにおけるジェンダーと暴力の関係性

SGRA
Sekiguchi Global Research Association
ATSUMI INTERNATIONAL FOUNDATION